平成３０年度
自己点検・評価「年次報告書」

長崎女子短期大学
自己点検評価室

【目次】

部　署　名	職　名	氏　名	頁
学長	学長	玉島　健二	1
栄養士コース	コース長	橋口　亮	3
ビジネス・医療秘書コース	コース長	濵口　なぎさ	5
介護福祉士コース	コース長	長尾　久美子	7
幼児教育学科	学科長	織田　芳人	9
学生部	部長	光武　きよみ	11
図書館	館長	森　弘行	13
自己点検評価室	室長	武藤　玲路	15
入試広報室	室長	髙井　達司	17
キャリア支援センター	センター長	原田　実輝	19
ＦＤ・ＳＤ委員会	委員長	武藤　玲路	21
ＩＲ推進室	室長	森　弘行	23
教職課程委員会	委員長	織田　芳人	25
募集・広報委員会	委員長	髙井　達司	27
紀要・図書委員会	委員長	古賀　克彦	29
教務委員会	委員長	山口　ゆかり	31
学生委員会	委員長	蛯原　正貴	33
障がい学生支援委員会	委員長	光武　きよみ	35
学生相談室	室長	福井　謙一郎	37
食品加工研究センター	センター長	橋口　亮	39
地域連携推進センター	センター長	山本　尚史	41
地域子育て支援センター	センター長	本村　弥寿子	43
寮務委員会	委員長	昆　正子	45
事務局	局長	前田　功	47

職　名	氏　名	頁
学長	玉島　健二	49
教授	橋口　亮	50
	森　弘行	51
	織田　芳人	52
	中澤　伸元	53
	松尾　公則	54
	長尾　久美子	55
	白石　景一	56
准教授	武藤　玲路	57
	濵口　なぎさ	58
	山口　ゆかり	59
	島田　幸一郎	60
講師	古賀　克彦	61
	中村　浩美	62
	本村　弥寿子	63
	荒木　正平	64
	福井　謙一郎	65
	光武　きよみ	66
	山本　尚史	67
	玉置　雷太	68
	江頭　万里子	69

職　名	氏　名	頁
講師	植木　明子	70
	田川　千秋	71
助教	昆　正子	72
	蛯原　正貴	73
実習助手	太田　智子	74
	桑原　真美	75
	桑原　倫子	76
事務局長	前田　功	77
入試広報室長	髙井　達司	78
キャリア支援センター長	原田　実輝	79
事務（会計）	宮﨑　伸一郎	80
〃（会計）	一瀬　章子	81
〃（教務）	森口　和美	82
〃（教務）	林田　翔太郎	83
〃（学生・教務）	櫻井　縁	84
〃（・庶務）	藤田　紫織	85
司書	伊藤　理恵子	86
寮（寮監長）	海保　佐知子	87
〃（副寮監）	海保　都惠子	88
〃（副寮監）	大場　恵美	89

平成３０年度

「部署別報告書」

平成３０年度　「学長・運営委員会」年次報告書

区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

氏名：玉島　健二（学長）

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．　運営委員会及び入試委員会における協議、学科・コースの取組を通じた本学の活性化、特色化の推進

２．きめ細かな学生支援体制、学生相談体制等による「学生満足度」の向上

３．積極的な募集活動による入学定員充足率の向上

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．　学科長及びコース長に対し、活性化及び特色化に向けた取組を推進するように促す。
私立大学等改革総合支援事業への応募を通じて、施設設備の充実に努める。

２．各チューター、学科・コース長、学生部長、寮務委員会、学生相談室、障がい学生支援委員会等と十分な情報交換及び支援を重ねながら、退学・休学等の未然防止に努める。また、学生からの要望等に可能な限り対応することにより、学生満足度の向上に努める。

３．　募集・広報委員会、入試広報室等と積極的に連携するとともに、学長自らが募集活動に出向くこととする。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・$\boxed{\text{B}}$・Ｃ・Ｄ 」
・学科コースの特色化については、ビジネス・医療秘書コースが１年次にプレゼミナールを実施するとともに、「登録販売者」の資格取得に向けた講座を立ち上げ、4 名が試験に挑戦した。栄養士コースでは、卓袱料理試食会が復活した。また、2019 年度に向けた改革案がまとまり、実施できるところから実施することになった。
・マスコミに取り上げられる機会は昨年度より大幅に増加した。
・私立大学等改革総合支援事業（タイプ１・タイプ５）に応募し、昨年度に続き採択された。

２．自己評価「 Ｓ・Ａ・$\boxed{\text{B}}$・Ｃ・Ｄ 」
・今年度から「障がい学生支援委員会」を立ち上げ、個別の学生への対応を協議した。個別に対応できた側面と限界を感じた側面の両面が見られた。また、各教員等と連携をしながら学生対応に当たったが、今年度は退学者が前年度より多く出た。（3 月 8 日現在で 8 名）その主な理由は、経済的理由、障がいによる不適応、人間関係等である。
・学生からの要望は可能な限り聴取して対応した。今年度は学友自治会役員との意見交換を 9 月に行い、本学の取組に対する評価を聴く機会を設けることができた。

３．自己評価「 Ｓ・Ａ・$\boxed{\text{B}}$・Ｃ・Ｄ 」
学生募集については、最終的に定員 200 名に対し入学予定者 169 名で、充足率 84.5%である。
昨年度より 5 名増え、充足率も 2.5 ポイント良い状況である。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．栄養士コース及びビジネス・医療秘書コースの特色化の具体化、実践化が最大の課題である。マスコミに登場する回数を今年度以上に増やしていくために、入試広報室や各学科・コースと協力していく。

２．施設設備の改修、教授法の改善など、学生からのアンケート結果をもとに、対策を講じていきたい。

３．国の高等教育の負担軽減策が具体化する次年度に向けて、本学独自の各種奨学金・減免制度を改めて見直すなど、高校生を引き付ける対策を検討する。

平成30年度 学長・運営委員会 年次報告

Plan 計画

①運営委員会・入試委員会における協議、学科・コースの取組による本学の活性化
②きめ細かい学生支援体制・学生相談体制による学生満足度の向上
③積極的な募集活動による入学定員充足率の向上

Do 実行

①学科長・コース長の取組を促すとともに、私立大学等改革総合支援事業への応募
②各チューター、学科・コース長、学生部長、学生相談室等との情報交換の実施
学生からの要望に対する可能な限りの対応
③募集・広報委員会、入試広報室等との積極的な連携、必要に応じた募集活動への参加

Check 検証

①Lで1年次にプレゼミナール、登録販売者の講座開講、Sで特色化に向けた改革案まとまる。
私立大学等改革総合支援事業（タイプ1・5）は2年連続で採択された。
②障がい学生支援委員会の設置、協議を行ったが、3月8日現在で退学者が8名出た。学生からの要望には可能な限り対応し、9月には学友自治会役員との意見交換会を実施した。
体育館及び2号館ロビーの照明のLED化実施
③学生募集は、最終的に169名が入学予定（充足率84．5％）、前年比で＋2．5ポイント増加。

Act 改善

①栄養士コースとビジネス・医療秘書コースの特色化と実践化が大きな課題。マスコミに報道してもらうよう入試広報室等と連携

②施設設備の改修、教授法の改善など、学生満足度のアップに繋がる取組が必要

③本学の魅力度アップとともに、本学独自の奨学金・減免制度の見直しも必要

平成３０年度　「栄養士コース」年次報告書

区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

氏名：橋口　亮（コース長）

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．報告・連絡・相談、期限厳守、今すぐ実行の浸透を図る。
２．学生と教職員が一体となり取組むコース独自の行事を計画する。
３．専門教育科目の一部に長崎食育学の要素を取り入れる。
４．栄養士実力認定試験Ａ認定を７０％以上に上げる。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．　情報の流れを良くし、風通しの良い職場環境を構築する。運営委員会からコース会議への流れ、学生支援の情報、教職員の業務など情報の流れと共有を大切にする。
２．　長崎食育学の授業に「卓袱料理試食会」を取り入れ、１，２年生および教職員との協働の場を設ける。
３．　実習科目を中心に長崎食育学に関するテーマを取り入れた授業を行う。
４．２年生後期に時間割の空き時間を利用し、講義や模擬試験を実施する。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ⓐ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」

　コース会議、打ち合わせなどで、必要な情報は伝えることができた。十分ではないが、報告・連絡・相談はほぼ出来ていた。

２．自己評価「 Ｓ・Ⓐ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」

　卓袱料理試食会、オープンキャンパス、短大フェアなど、アンバサダーを含む学生の協力を得たが、運営の主体を教員が行うことで学生の負担を軽減した。今年度、復活した卓袱料理試食会は、学生および参加者の評価が高く、長崎食育学の取組として受け入れられた。

３．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ⓑ・Ｃ・Ｄ 」

　実習科目を中心に、地域の食文化をとりいれた教育支援を実施した。学生は、自然に受け入れていたが、学外実習の課題などで積極的に活用するところまでには至らなかった。

４．自己評価「Ｓ・Ａ・Ｂ・Ⓒ・Ｄ 」

　認定Ａが４３％と低く、栄養士としての知識や技術が不足している学生が多かった。模擬試験においても最後まで成績が上がらず、意識付けに苦労した。　結果は、認定Ａ４３％　認定Ｂ４３％　認定Ｃ１４％であった。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．次年度よりスタッフが大きく変わるため、報告・連絡・相談の意識は共通認識として高めたい。それに伴い、今すぐ実行の意識は高まるといえる。
２．　卓袱料理試食会は、実施の方向で進める。アンバサダーを含む学生は、ボランティアの心も大切に協働の意識で取組みたい。
３．次年度も、専門科目に長崎食育学の内容をとりいれた授業を実施する。
４．認定Ａ７０％以上を目標に、後期の時間割に「栄養士スキルアップ講座」を入れ、実力の向上を図る。学生の意識を高めるため、能力別の支援を検討している。

平成30年度 栄養士コース 年次報告

Plan 計画

１．組織的活動を意識し、報告・連絡・相談、今すぐ実行、期限厳守の意識を高める。

２．学生と教職員が一体となるコース独自の行事を実施する。

３．専門教育科目の一部に長崎食育学を意識した授業を取り入れる。

４．栄養士実力認定試験Ａ認定を７０％以上にする。

Do 実行

１．情報の流れを良くし、風通しの良い職場環境を構築する。

２．長崎食育学の授業に「卓袱料理試食会」を復活させる。2年生は、卒業研究の単位とする。

３．実習科目を中心に、長崎食育学を意識した授業を行う。

４．2年生後期の空き時間に講座を開設する。

Check 検証

１．必要な情報は、共有することができた。

２．「卓袱料理試食会」の復活は、学生の評価が高く、長崎食育学の取組として受け入れられた。

３．実習科目を中心に長崎の食文化をとりいれた授業を実施することができた。

４．認定Ａが４３％と低く、栄養士としての知識や技術が不足している学生が多かった。

Act 改善

１．次年度、スタッフが大きく変わるため、報告・連絡・相談の意識は高めたい。

２．「卓袱料理試食会」は、次年度も実施の方向で進めたい。

３．次年度も実習科目を中心に長崎の食文化を取り入れた教育支援を実施する。

４．認定Ａ７０％以上を目標に「栄養士スキルアップ講座」を実施する。

平成３０年度　「ビジネス・医療秘書コース」年次報告書

区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

氏名：濵口　なぎさ（コース長）

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．実践力の強化
- 学生が授業での学びを学内外で体験できる場を増やす。
- 上位級の検定合格者を増やす。登録販売者の受験対策講座を実施し、短大在学中での合格を目指す。

２．地域交流・地域貢献
- ２年生は「ゼミナール」、１年生は「プレゼミナール」で地域交流・地域貢献に取り組む。
- 学外者との交流によって、コミュニケーション力強化を図り、地域社会の課題発見と解決を目指す。

３．学生支援体制の強化
- 相談しやすい雰囲気づくりを心掛け、学生一人ひとりのニーズに応え、卒業時の満足度アップをはかる。
- 問題を抱えている学生に対し、コース内での情報共有とサポート体制の強化をはかる。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．実践力の強化
- ２年　ゼミナール、学長秘書、１年　プレゼミナール、1･2 年全員　中小企業家同友会による模擬面接の実施、キャリアアップセミナーでのピアサポート、長期休暇の活動報告会の実施、フィールドワーク
- 検定上位級（日商 PC 検定２級、秘書検定準１級・１級）の受験呼びかけ、登録販売者受験対策講座の実施

２．地域交流・地域貢献
- ２年ゼミナールでは、全ゼミで学外の団体等と交流を図り、地域の課題解決に貢献する活動を行った。今年度から開講した１年プレゼミナールでは、前期は個人で、後期はグループで地域の諸問題の解決に取り組んだ。

３．学生支援体制の強化
- 隔週で実施しているコース会議にて、欠席が多い等、気になる学生について情報共有を図った。会議だけでなく、メールによりコース内での情報共有を密にした。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ⓑ・Ｃ・Ｄ 」
- 学生が授業での学びを実践できる場を多く設けることができた。特に 2 年のゼミナール、1 年のプレゼミナールでは、後期終了時に全員がプレゼンテーションを行い、その成果を示すことができた。
- 日商 PC 検定３級は取得率が 85.7%と前年度（84.6%）より向上し、２級には、２年生６名（前年度の３倍）の学生が挑戦し 4 名の合格者が出たが、他の検定試験については取得率が前年度比横ばいか若干低下した。登録販売者対策講座には１年生４名が参加したが、全員不合格であった。

２．自己評価「 Ｓ・Ⓐ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
- ２年ゼミナール　長崎県男女共同参画室、長崎の猫関連活動団体・猫グッズ販売店、愛宕小学童クラブ、長崎バス・長崎電気軌道等、全ゼミで学外の団体とコンタクトを取り「地域交流・地域貢献」に取り組んだ。その結果、テレビ、新聞などのマスコミでも取り上げられ、長崎県庁でも報告会を行うなど、学内外でゼミの活動内容が評価された。
- １年プレゼミナール　前期「若者の県外流失を減らす方法を考える」、後期「長崎女子短期大学のニーズ調査に関する研究報告」に取り組むことができ、学生なりの解決策を提案することができていた。

３．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ⓑ・Ｃ・Ｄ 」
- 学生に関する情報共有は密にできており、問題が発覚する前後でチューターを中心とした迅速な対応はできていたが、残念ながら１年生 16 名中３名が退学・休学となってしまった。不本意入学や勉学意欲を喪失している学生については、チューターによる面談を重ね、親身になって対応しても、休学や退学の意思の翻意は難しい。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．在学中の 2 年間を通して、「地域交流・地域貢献」を意識して学内外での活動に取り組むよう働きかけ、学生の実践力の向上を図る

２．多くの学生が入学時に希望している資格・検定の取得をサポートし、卒業時の満足度アップを図る

３．合理的配慮が必要な学生、勉学意欲が乏しい学生への対応を検討する

平成30年度 ビジネス・医療秘書コース 年次報告

Plan 計画

1. 実践力の強化
   - 学生が授業での学びを学内外で体験できる場を増やす。
   - 上位級の検定合格者を増やす。登録販売者の受験対策講座を実施し、短大在学中での合格を目指す。
2. 地域交流・地域貢献
   - 2年生は「ゼミナール」、1年生は「プレゼミナール」で地域交流・地域貢献に取り組む。
   - 学外者との交流によって、コミュニケーション力強化を図り、地域社会の課題発見と解決を目指す。
3. 学生支援体制の強化
   - 相談しやすい雰囲気づくりを心掛け、学生一人ひとりのニーズに応え、卒業時の満足度アップをはかる。
   - 問題を抱えている学生に対し、コース内での情報共有とサポート体制の強化をはかる。

Do 実行

1. 実践力の強化
   - 2年　ゼミナール、学長秘書、1年　プレゼミナール、1･2年全員　中小企業家同友会による模擬面接の実施、キャリアアップセミナーでのピアサポート、長期休暇の活動報告会の実施、フィールドワーク
   - 日商PC検定2級の受験呼びかけ、登録販売者受験対策講座の実施
2. 地域交流・地域貢献
   - 2年ゼミナールでは、全ゼミで学外の団体等と交流を図り、地域の課題解決に貢献する活動を行った。今年度から開講した1年プレゼミナールでは、前期は個人で、後期はグループで地域の諸問題の解決に取り組んだ。
3. 学生支援体制の強化
   - 隔週で実施しているコース会議にて、欠席が多い等、気になる学生について情報共有を図った。会議だけでなく、メールによりコース内での情報共有を密にした。

Check 検証

1. 実践力の強化
   - 学生が授業での学びを実践できる場を多く設けることができた。
   - 日商PC検定3級は取得率が向上し、上位級への挑戦者も増加した。
   - 登録販売者試験は1年生4名が受験したが、全員不合格であった。
2. 地域交流・地域貢献
   - 2年:「ゼミナール」 全ゼミで学外の団体と交流し、テレビ、新聞などのマスコミでも取り上げられ、長崎県庁でも報告会を行うなど、学内外でゼミの活動内容が評価された。
   - 1年:「プレゼミナール」 今年度から新設し、地域の諸問題について学生なりの解決策を提案することができていた。
3. 学生支援体制の強化
   - 学生に関するコース内での情報共有は密で、問題発覚の前後でチューターを中心とした迅速な対応はできていた
   - 残念ながら1年生16名中3名が退学・休学となってしまった。

Act 改善

1. 在学中の2年間を通して、「地域交流・地域貢献」を意識した学内外での活動に取り組むよう働きかけ、学生の実践力の向上を図る
2. 多くの学生が入学時に希望している資格・検定の取得をサポートし、卒業時の満足度アップを図る
3. 合理的配慮が必要な学生、勉学意欲が乏しい学生への対応を検討する

平成３０年度　「介護福祉士コース」年次報告書

区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

氏名：長尾　久美子（コース長）

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．国家試験全員合格
①国家試験日に照準を合わせた効果的な年間計画の策定と実施
②向上心を持って主体的に取り組むよう、自主学習の習慣化の支援
③各科目において、基礎的理解を深める授業の実施　　④傾向と対策の徹底分析と学生への還元
⑤成績低位学生への年間を通じた個別支援の継続
２　実践力を高める学修支援
①事例研究・発表の充実　　②実践力、満足度を高める授業の実施
３．学生支援の充実
①就職活動支援の充実　　②高め合う・支え合うクラスづくり　　③学生への丁寧な個別支援

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．国家試験に全員合格
①基本修得→実践問題→重要項目→直前対策の計画に沿って実施したが、学生の理解度に大きな差があり、全体的な計画の実施が難しかった。
②受験対策問題集の自学を課題とし毎週、確認のテストを行った。課題には全員取り組んだ。
③基礎的理解が深まるようにわかりやすい解説に努めた
④キャリアアップセミナーでは、テスト結果を分析し、データに基づく支援を行った。
⑤個別支援については求める学生１名のみの支援となった。
２．実践力を高める学修支援
①事例研究・発表で実習施設と連携し、専門職としての介護過程の展開やプレゼンテーションの修得を図った。
②生活支援技術マニュアル作成、医療的ケアの実技、コミュニケーション技術など実技を強化する授業とした。
３．就職活動や学生生活等への適切な支援
①介護人材センターや施設管理者・卒業生による介護職場に関するお話など就職支援の講座を開催した。
②２年生のみとなり、クラス活動は不十分であった。
③学生の個別の相談に丁寧に対応した。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・[B]・Ｃ・Ｄ 」
①介護福祉士国家試験（H30 .1. 27、長崎県立体育館）は 18 名全員が受験した。
3 月 27 日発表　　自己採点では 2 名が不合格
②総合的評価
・基礎学力が極めて低い学生（1 名）について、個別指導を行ったが、理解向上には限界があった。
・社会人と一般学生の学力に大きな差があり、授業が難しかった
２．自己評価「 Ｓ・[A]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
①事例研究・発表の内容も深まり、成果があった。
②卒業時アンケート（H29 入学生）の学習成果（6 項目）についての評価の平均は 3.7 で、前年度（4.0）に比べ、0.3 ポイント下がった。クラス全体の雰囲気が融和性・協働性に欠けていた。
③生活支援技術マニュアル作成、医療的ケアの実技で実践力をつけることができた。
④福祉住環境コーディネータ 2 級に 6 名受験し 4 名合格した。
３．自己評価「 Ｓ・[A]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
①18 名全員が介護福祉士として専門就職した。介護福祉士としての意識を高めることができた。
②卒業時アンケートの短大生活全般についてのな満足度平均は 4..1 で、昨年より 0.6 ポイント低く、特に、社会人の本学全体への厳しい評価があることがうかがわれる

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

平成30年度 介護福祉士コース 年次報告

Plan 計画

１．国家試験に全員合格に向けた支援
①効果的な年間計画の策定と実施　②自主学習の習慣化支援
③基礎的理解を深める授業の実施
④傾向と対策の徹底分析と学生への還元
⑤成績低位学生への年間を通じた個別支援続
２．　実践力を高める学修支援
①事例研究・発表の充実　②実践力、満足度を高める授業
３．学生支援の充実
①就職活動支援の充実　②支え合い,高め合うクラスづくり
③学生への丁寧な個別支援

Do 実行

１．①年間計画（基本修得→実践問題→重要項目→直前対策）をたて、「国家試験合格へのＧｕｉｄｅ」を配布し学習計画を周知した。
②ｷｬﾘｱｱｯﾌﾟｾﾐﾅｰではテスト結果の分析に基づく支援を実施した。
③夏期講習は重点科目の基礎的理解を中心に実施し全員参加した。

２．①事例研究・発表で、専門職としてのスキルの向上を図った。
②生活支援技術マニュアル作成、医療的ケアなど実技を強化し、実践につながる授業に取り組んだ。

３．①介護人材センターや卒業生による就職支援講座を開催。
②学生の個別の相談に丁寧に対応した。

Check 検証

１①国家試験（1月27日；発表3月27日）18名全員が受験
自己採点では２名不合格　（合格率　８８．９％）
②基礎学力が低い学生について、個別指導を行ったが応用力をつけるまでに至らなかった。
③社会人と一般学生の学力に差があり、対策の進め方が難しかった。

２①事例研究・発表は内容・ﾌﾟﾚｾﾞﾝﾃｰｼｮﾝともよくできていた。
②卒業時アンケートの学修成果６項目の評価の平均は３．７で、前年度に比べ、０．３ポイント下がった。厳しく自己採点している。
③生活支援マニュアル作成、医療的ケアで実践力を強化できた。

３①１８名全員が介護福祉士として専門就職した。介護福祉士としての意識を高めることができた。
②卒業時アンケートの短大生活全般の満足度平均は４.１で、昨年より０.６ポイント低く、特に、社会人の本学全体への厳しい評価があることがうかがわれた。

Act 改善

ありがとうございました。

平成３０年度　「幼児教育学科」年次報告書
区分：　学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（　　）
氏名：織田　芳人（学科長）
ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。
１．本年度の入学者増を受けて、より多くの様々な問題発生が危惧されることから、学科としてさらなる協力体制を図って対処していきたい。 ２．再課程認定を受けて来年度から始まる新カリキュラムの準備に向けた教材研究等を、各担当者がいっそう充実させられるようにしていきたい。
ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。
１．学科としてさらなる協力体制図るため、月１回の定例学会会議を従来通りに開いて学生の情報共有に努め、さらに必要に応じて臨時会議を設ける。 ２．新カリキュラムの準備として、文部科学省による再課程認定に対応した必要な変更内容に対して、各担当者の理解を図る
ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。
１．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 前期の早い時期から退学者・休学者が出たため、学会内の情報共有が十分でなく、最終的には退学者５名になった。後期後半からは、必要に応じて月２回の情報共有のための臨時会議を設け、原則として学生部長への連絡を行うことにした。また、学科内での情報共有のルートを明確化した。 ２．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 教員の異動等による教員の新規採用が必要となり、それに従って文部科学省の再課程認定書類の差し替えや厚生労働省の学則変更の申請等、学科として対応すべきことが多く、新カリキュラムの準備状況全体を確認することまでには至らなかった。
ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。
１．2019 年度においても入学者 109 名が予想され、新規採用の教員も加わる一方、専任教員が減るため、本年度における学生問題への対応を踏まえて、いっそうの情報共有を図る。 ２．2019 年度入学生に対して新カリキュラムが適用されるので、各担当者でそれぞれの授業を評価して、いっそうの改善を図る。

平成30年度 幼児教育学科 年次報告

Plan 計画

1．学科としてのさらなる協力体制

・本年度の入学者増加に加えて、学科長交代によって、より多くの様々な問題の発生が危惧されるので、学科としてのさらなる協力体制を図る。

2．新カリキュラムの準備

・新カリキュラムにおける科目名の変更、単位の変更等が生じたので、各担当者でそれぞれの内容の見直しを図る。

Do 実行

1．学科としてのさらなる協力体制

・月1回の定例学科会議を従来通りに開いて、学生の情報共有に努める。

・必要に応じて臨時会議を設ける。

2．新カリキュラムの準備

・文部科学省による再課程認定に対応した必要な変更内容に対して、各担当者の理解を図る。

Check 検証

1．学科としてのさらなる協力体制

・前期の早い時期から退学者・休学者が出たため、学科内の情報共有が十分でなかった。

・後期後半から、必要に応じて月2回の情報共有のための臨時会議を設けた。

2．新カリキュラムの準備

・教員の異動等に伴う教員の新規採用、文科省の再課程認定、厚労省の学則変更申請等、学科として対応すべきことが多く、新カリキュラムの準備状況全体を確認するまでには至らなかった。

Act 改善

1．2019年度においても、入学者109名が予想され、新規採用の教員も加わる一方、専任教員が減るため、本年度における学生問題への対応を踏まえて、いっそうの情報共有を図る。

2．2019年度入学生に対して新カリキュラムが適用されるので、各担当者でそれぞれの授業を評価して、いっそうの改善を図る。

平成３０年度　「学生部」年次報告書
区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）
氏名：光武　きよみ（学生部長）
ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。
１．各委員会の抱える課題を明確にし、課題解決に向けた相談・助言を積極的に行う。 ２．寮生の生活実態を細やかに把握し、寮務委員と密に連携して集団生活のマナー向上に努める。 ３．挨拶・言葉遣い・バスマナー等、学友自治会と連動して社会人としてのマナー向上に努める。
ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。
１．教務委員会、学生委員会等の会議に出席して意見を述べたり、運営委員会に各委員会の案を出した。 ２．　寮務委員長や寮監の方々と情報交換を行い、細やかに面談や指導を行った。 ３．行事の折には学生へ話を実施したり、個別指導を行った。
ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。
１．自己評価「 Ｓ・[A]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 各会議には出席して意見を述べたりできたが、詳細な内容を把握できていない時があった。運営委員会へは時期を逃さず、報告や意見を求めることができた。 ２．自己評価「 Ｓ・[A]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 寮務委員会の細則を見直し、寮生の情報共有はできた。しかし、学科・コースから寮生の情報が入ってこない時があり、対応に困る事案があった。 ３．自己評価「 Ｓ・Ａ・[B]・Ｃ・Ｄ 」 バスマナーについては、毎年苦情があり減少傾向には至らない。
ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。
１．学内の行事や教務に関する事項の詳細に目を向け、議題解決に向け相談や助言を行う。 ２．各寮務委員や寮監、関係職員と連携して、寮生が充実した生活を送ることができるよう配慮する。 ３．授業や行事等でマナーについての話を繰り返し行う。

平成30年度 学生部 年次報告

Plan　計画

１．各委員会の抱える課題を明確にし、課題解決に向けた相談・助言を積極的に行う。

２．寮生の生活実態を細やかに把握し、寮務委員と密に連携して集団生活のマナー向上に努める。

３．挨拶・言葉遣い・バスマナー等、学友自治会と連動して社会人としてのマナー向上に努める。

Do　実行

１．教務委員会、学生委員会等の会議に出席して意見を述べたり、運営委員会に各委員会の案を出した。

２．寮務委員長や寮監の方々と情報交換を行い、細やかに面談や指導を行った。

３．行事の折には学生へ話を実施したり、個別指導を行った。

Check　検証

１．各会議には出席して意見を述べたりできたが、詳細な内容を把握できていない時があった。運営委員会へは時期を逃さず、報告や意見を求めることができた。

２．寮務委員会の細則を見直し、寮生の情報共有はできた。しかし、学科・コースから寮生の情報が入ってこない時があり、対応に困る事案があった。

３．バスマナーについては、毎年苦情があり減少傾向には至らない。

Act　改善

１．学内の行事や教務に関する事項の詳細に目を向け、議題解決に向け相談や助言を行う。

２．各寮務委員や寮監、関係職員と連携して、寮生が充実した生活を送ることができるよう配慮する。

３．授業や行事等でマナーについての話を繰り返し行う。

平成３０年度　「図書館」年次報告書
区分：　学科専攻　・　委員会等　・ 事務局等 ・　教職員個人　・　その他（　　）
氏名：森　弘行（図書館長）
ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。
1.　利用者サービスの改善のための館内整備。 古くて利用されない図書廃棄。 ライブラリーラバーズなどのイベント実施。 2.　サーバー機器を含めた蔵書管理、貸し出し管理システムの更新。 3.　各種研修会への参加。
ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。
1.　学生選定図書の展示。 気軽に本を読める環境づくりのため、キャンプ用テントの設置。 ライブラリーラバーズのクイズラリー実施。 2.　Windows 2008 Server、Windows 7 のサポート停止に伴うシステム更新計画 3.　九州地区、長崎県の大学図書館協議会研修会他、読み聞かせイベント等への参加
ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。
1.　自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 キャンプ用テントは好評 古い寄贈洋書の除籍を実施 ライブラリーラバーズキャンペーン 10/16（火）～11/12（月）開催 2.　自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 「情報館」システムのクラウド化を検討し、H31 年度導入が決定 3.　自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 4/19 九州地区私立短期大学図書館協議会総会（鹿児島市） 11/9 長崎県大学図書館協議会研修会 **介護福祉コースの教員・学生とともに、障がい者施設や認知症カフェ・高齢者サロンなどでお話会を開催。** （伊藤司書 8/20・8/22・2/20・3/27　計 4 回）
ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。
1.　介護福祉士コース募集停止に伴う蔵書・雑誌等の見直し 2.　「情報館」クラウドのコンテンツ整備、館内 PC の更新 3.　図書館利用拡大のためのイベント開催（紀要・図書委員会と連携）

平成30年度 図書館 年次報告

Plan 計画

1. 利用者サービスの改善のための館内整備。
   古くて利用されない図書廃棄。
   ライブラリーラバーズなどのイベント実施。

2. サーバー機器を含めた蔵書管理、貸し出し管理システムの更新。

3. 各種研修会への参加。

Do 実行

1. 学生選定図書の展示。
   気軽に本を読める環境づくりのため、キャンプ用テントの設置。
   ライブラリーラバーズのクイズラリー実施。
2. Windows 2008 Server、Windows 7のサポート停止に伴うシステム更新計画。
3. 九州地区、長崎県の大学図書館協議会研修会他、読み聞かせイベント等への参加。

Act 改善

1. 介護福祉士コース募集停止に伴う蔵書・雑誌等の見直し。

2. 「情報館」システムのクラウド化、館内PCの更新。

3. 図書館利用拡大のためのイベント開催（紀要・図書委員会と連携）。

Check 検証

1. キャンプ用テントは好評。
   古い寄贈洋書の除籍を実施。
   ライブラリーラバーズキャンペーン
   10/16（火）～11/12（月）開催。

2. 「情報館」システムのクラウド化を決定。

3. 4/19九州地区私立短期大学図書館協議会総会（鹿児島市）。
   施設での読み聞かせボランティア（伊藤司書）。

平成３０度　「自己点検評価室」年次報告書
区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）
氏名：武藤　玲路（室長）
ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。
１．短大教育の内部質保証を推進するＰＤＣＡサイクルを構築するための自己点検・評価システムを構築する。 ２．本学の学習成果と３つの方針を検証するための手法を考案し、客観的な量的データの根拠資料を作成する。 ３．平成 31 年度の認証評価に向けて、自己点検・評価報告書および根拠資料（提出・備付）を作成する。
ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。
１．学習成果の内部質保証システムを構築するために、内部質保証フローチャート、ＰＤＣＡサイクルフロー、評価指標査定方針、アセスメントマップ、内部質保証ルーブリックを作成した。 ２．学習成果の到達度を４つのレベル（学生個人レベル、授業科目レベル、教育課程レベル、教育機関レベル）で査定するための根拠資料を作成した。また、３つの方針の妥当性を検証するための根拠資料を作成した。 ３．平成 31 年度の認証評価に向けて、自己点検・評価報告書と根拠資料（提出・備付）を順調に作成している。
ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。
１．自己評価「 $\boxed{\text{S}}$・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 ３つの方針とＰＤＣＡサイクルに基づく内部質保証システムのフローチャートを作成することができた。 ２．自己評価「 Ｓ・$\boxed{\text{A}}$・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 本学の学習成果の到達度と３つの方針の妥当性を検証する根拠資料を作成することができた。 ３．自己評価「 Ｓ・Ａ・$\boxed{\text{B}}$・Ｃ・Ｄ 」 平成 31 年度の認証評価の自己点検・評価報告書と学習成果に関する根拠資料を当初の予定通り作成している。
ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。
１．本学の学習成果を３つの方針とＰＤＣＡサイクルに基づいて保証・向上させるシステムの構築を推進する。 ２．より客観的な量的・質的データを体系的に捉え、学生支援に活用できるシステムの構築を推進する。 ３．平成 31 年度の認証評価の自己点検・評価の報告書と根拠資料を完成し、訪問調査に向けた準備を進める。

平成30年度 自己点検評価室 年次報告

Plan 計画

１．短大教育の内部質保証を推進するＰＤＣＡサイクルを構築するための自己点検・評価システムを構築する。
２．本学の学習成果と３つの方針を検証するための手法を考案し、客観的な量的データの根拠資料を作成する。
３．平成31年度の認証評価に向けて、自己点検・評価報告書および根拠資料（提出・備付）を作成する。

Do 実行

１．学習成果の内部質保証システムを構築するために、内部質保証フローチャート、ＰＤＣＡサイクルフロー、評価指標査定方針、アセスメントマップ、内部質保証ルーブリックを作成した。
２．学習成果の到達度を４つのレベル（学生個人レベル、授業科目レベル、教育課程レベル、教育機関レベル）で査定するための根拠資料を作成した。また、３つの方針の妥当性を検証するための根拠資料を作成した。
３．平成31年度の認証評価に向けて、自己点検・評価報告書と根拠資料（提出・備付）を順調に作成している。

Check 検証

１．自己評価「 S・A・B・C・D 」
３つの方針とＰＤＣＡサイクルに基づく**学習成果の内部質保証システム**のフローチャートを作成することができた。
２．自己評価「 S・A・B・C・D 」
本学の学習成果の到達度と３つの方針の妥当性を**検証する根拠資料**を作成することができた。
３．自己評価「 S・A・B・C・D 」
平成31年度の認証評価の**自己点検・評価報告書**と学習成果に関する根拠資料を当初の予定通り作成している。

Act 改善

１．本学の学習成果を３つの方針とＰＤＣＡサイクルに基づいて保証・向上させるシステムの構築を推進する。

２．より客観的な量的・質的データを体系的に捉え、学生支援に活用できるシステムの構築を推進する。

３．平成31年度の認証評価の自己点検・評価の**報告書と根拠資料**を完成し、**訪問調査に向けた準備**を進める。

平成３０年度　「入試広報室・入試委員会」年次報告書

区分：　学科コース　・ 委員会等 ・ 事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

氏名：髙井　達司（室長）

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．大幅に減少した生活創造学科の入学者数を回復させる。

２．長崎女子高等学校との連携を深め、入学者数減少傾向に歯止めをかける。

３．オープンキャンパスの動員向上及び生徒、保護者への満足度を上昇させる。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．奨学事業の大幅拡充を活用した。
　①あらゆる機会を通して、高校や生徒・保護者へ周知徹底した。
　②生活創造学科の生徒に対しては、採用枠が優位である旨を強調した。
２．①進路指導部との面談は公式訪問を含め８回を数える等、年間を通じ定期的な情報交換を実施した。
　②幼児教育学科の志願者や就職希望者を対象に、ビジネス・医療秘書コースへの進路変更を要請した。（最重点項目）
　③高大連携事業の実施時期を見直した。
３．①全ての機会を通して高校、生徒、保護者への参加要請を徹底した。
　②各コースに対し、高校生の興味関心を惹くプログラム構成を要請するとともに、ホスピタリティーマインドを徹底した。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
　効果測定は難しいが、ビジネス志願者数の 64.7%が奨学生に採択された。最終的に生活創造学科の志願者はビジネス・医療秘書コースの上昇により大きく改善された（44→59 名）。また A 評定の占有率が 40%まで上昇したことは、入学生の学力質向上に大きく寄与した。
２．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
　ビジネス・医療秘書コースへの誘導に一定の結果を見た一方で、栄養士コースの減少に繋がった。
３．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
　①志願対象者である高３及び社会人の参加者が上昇した。（実数、延数）
　②殆どの項目において満足度が向上し、高い入学率に繋がった。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．高等教育の授業料一部無償化が始まる中、本学の各種奨学事業が最も大きな募集効果を生み出すような、新たな枠組みを再検討したい。
２．長崎女子高「くらし系列」と栄養士コース、「しごと系列」とビジネス・医療秘書コースとの連携強化を図りたい。
３．学生スタッフの意見聴取を事前に行い生徒目線を意識することで、更なる満足度上昇を目指したプログラム作りに努めたい。

平成30年度 入試広報室・入試委員会 年次報告

Plan 計画

1. 大幅に減少した生活創造学科の入学者数を回復させる。

2. 長崎女子高等学校との連携を深め、入学者数減少傾向に歯止めをかける。

3. オープンキャンパスの動員向上及び生徒、保護者への満足度を上昇させる。

Do 実行

1. 奨学事業の大幅拡充を活用した。
   ①あらゆる機会を通して、高校や生徒・保護者へ周知徹底した。
   ②生活創造学科の生徒に対しては、採用枠が優位である旨を強調した。
2. 進路指導部との面談は公式訪問を含め8回を数える等、年間を通じ定期的な情報交換を実施した。加えて幼児教育学科の志願者や就職希望者を対象に、ビジネス・医療秘書コースへの進路変更を要請した。（最重点項目）
3. 全ての機会を通して高校、生徒、保護者への参加要請を徹底した。また、各コースに対し、高校生の興味関心を惹くプログラム構成を要請するとともに、ホスピタリティーマインドを徹底した。

Check 検証

1. 効果測定は難しいが、ビジネス志願者数の64.7%が奨学生に採択された。最終的に生活創造学科の志願者は同コースの上昇により大きく改善された（44→59名）。またA評定の占有率が40%まで上昇したことは、入学生の学力質向上に大きく寄与した。
2. ビジネス・医療秘書コースへの誘導に一定の結果を見た一方で、栄養士コースの減少に繋がった。
3. 志願対象者である高3及び社会人の参加者が、実数、延数ともに上昇した。また殆どの項目において満足度が向上し、結果、高い入学率に繋がった。

Act 改善

1. 高等教育の授業料一部無償化が始まる中、本学の各種奨学事業が最も大きな募集効果を生み出すような、新たな枠組みを再検討したい。
2. 長崎女子高「くらし系列」と栄養士コース、「しごと系列」とビジネス・医療秘書コースとの連携強化を図りたい。
3. 学生スタッフの意見聴取を事前に行い生徒目線を意識することで、更なる満足度上昇を目指したプログラム作りに努めたい。

平成３０年度　「キャリア支援センター」年次報告書

区分：　学科コース　・ 委員会等 ・ 事務局等　・ 教職員個人　・ その他（　　）

氏名：原田　実輝（センター長）

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．　昨年に引き続き、就職率100%を目指す。

２．　就職先調査を行う。

３．　離職者に対する対策

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．　各学科・コースの年間計画に基づき、二者・三者面談、ガイダンス、模擬面接、企業交流会、就職活動体験報告会、事業主との交流等を行い、学生の就職意識を高める支援を行った。また、今年度は「現代社会と女性」の中でも就職セミナーが組み込まれ、キャリア支援センターからは１年･２年生を対象に「求人票の見方」等のテーマで説明を行い、就職の動機付けを行った。

２．　H30.3 月卒業生 184 名中、正規職員として専門就職した 156 名に対し、記名式の就職先調査を行った。

３．　今後、国の方針で各大学が離職者数を公表していくこととなった。それに伴い、離職者情報をキャリア支援センターに集約するしくみづくりを徹底すると共に、早期離職者を減らすよう取り組んでいく。また、離職を決めてから報告に来るのではなく、卒業しても一人で思い悩まず早めに相談に来るよう、ガイダンスを通じて学生に伝えた。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ⓐ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」

H31.3.15 現在の全学の就職率は 97.3 ％（昨年同期比 0.1 ポイント増）である。
未内定者は 5 名で、全員が決定できるよう支援していく。

２．自己評価「 Ｓ・Ⓐ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」。

回答率は　70.6%　(送付数に対する回収率は 88.4%)と、非常に高い回答率を得た。
６項目の設問に対する平均値は５段階評価の 3.7 で、２年前より　0.4 ポイント増であった。
一番評価が高かった項目が「誠実性・真摯性」で、評価が低かった項目が「判断力」「実行力」であった。
自由記述の意見・感想には、あいさつ、言葉遣い、社会人としての自覚、守秘義務等社会人としての心構え、マナーを求める声や、文章力、基礎学力の向上を求める記述が見られた。

３．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ⓑ・Ｃ・Ｄ 」

各学科・コースのキャリア委員を中心に、アンテナを張り巡らせて離職者の把握、キャリア担当者を通じてキャリア支援センターへの報告する体制を取るよう周知した。
今年度キャリア支援センターで把握している離職者は結婚退職も含め 13 人（S3・L2・Y8)。本人の報告により把握したのは約半分で、就職先調査・訪問で判明するケース事も多かった。また、辞め方に問題のある者が数名いた。退職時のマナー、社会常識を在学中から指導しておく必要がある。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．　就職支援体制の見直し。

２．　早期離職を減らす取り組み。

平成30年度 キャリア支援 年次報告

Plan 計画

1. 就職率100%を目指す
2. 卒業生の就職先調査を行う
3. 早期離職者対策

Do 実行

1. ・二者・三者面談・履歴書・ESの書き方指導、添削指導
   ・模擬面接　・企業交流会・面談会の実施・卒業生講演会
   ・就職活動体験報告会　・就職先訪問　・事業主との交流
   ・卒業生の集い
2. 平成30年3月卒業生　184名中、正規職員として専門就職をした156名の就職先に対しで記名式の調査を行った。
3. 国の方針により、早期離職者数の報告及び本学HPでの公表が義務付けられる事を周知した。今後は各学科・コースで得た情報はセンターに集約すると共に、離職者を減らせるよう取り組んでいく。

Check 検証

1. 3月15日現在の就職率は97.3%と、前年同期比0.1ポイント増であった。引き続き未決定者5名の支援を行っていく。
2. ・就職先調査：H30 11-12月実施
   ・回答率　　：70.6 %（回収率 88.4%）
   ・共通設問6項目の平均値は2年前より0.4ポイント増
3. ・この1年でキャリアセンターで把握している退職者は13名。（S３　L２　Y8）
   ・卒後半年以内の離職者　8名　（3月研修中2名）
   ・辞め方に問題のあった学生が数名いた。

Act 改善

1. 次年度も引き続き就職率100%を目指す。
2. 早期離職者を減らす。
   （できるだけミスマッチをなくす・職業倫理教育）
3. 問題を抱えた学生への支援
   （情報共有の徹底・きめこまやかな支援）
4. 就職支援体制の見直し。

平成３０年度　「ＦＤ・ＳＤ委員会」年次報告書

区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

氏名：武藤　玲路（委員長）

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．【FD について】

①第１回定例 FD 研修会、8 月 29 日（水）　9:30～11:00、221 教室

テーマ：障がいのある学生への理解と生活支援・学修支援への対応について（講師：分藤　賢之　氏）

②第２回定例 FD 研修会、3 月 18 日（月）　9:10～11:50、221 教室

テーマ：授業評価アンケート、学習成果の評価方針・シラバスの作成方法、学習成果の活用について

２．【SD について】

①第１回定例 SD 研修会、8 月 29 日（水）13:00～14:40、第２情報演習室

テーマ：教学 IR システムとエンロールメント・マネジメントについて（講師：ＤＳＫ・藤板　一行　氏）

②第２回定例 SD 研修会、3 月 18 日（月）12:40～14:50、221 教室

テーマ：本学の３つの方針と PDCA サイクルによる内部質保証の成果検証について

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．【FD について】

障害がいのある学生への対応と、学習成果の測定・査定・公表・活用について、学習と意見交換を行った。

２．【SD について】

本学の教学 IR システムと３つの方針・PDCA サイクルによる内部質保証について、成果検証の報告を行った。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・[Ｂ]・Ｃ・Ｄ 」

【FD について】

ほとんどの教員が FD 研修会に参加して、テーマに関する意見交換を活発に行い、研修会後のアンケートにも今回のテーマや形式に対する前向きな意見が多く見られた。しかし、実際の問題解決や向上・充実には、今後の日常的で継続的・主体的な各部署での FD 活動が必要であると思われる。

２．自己評価「 Ｓ・Ａ・[Ｂ]・Ｃ・Ｄ 」

【SD について】

多くの教職員が SD 研修会に参加して、テーマに関する年次報告に耳を傾け、研修会後のアンケートにも今回のテーマに関する肯定的な意見が多く見られた。しかし、若干事務職員の参加が少なかったことと、根拠資料に基づかない報告があったことが残念な点である。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．【FD について】

今後は、さらに教育の質的改善と授業改革による学習成果の向上・充実に努め、本学や各学科・コースの特色ある教育について検討していく必要がある。

２．【SD について】

今後は、さらに学生へのエンロールメント・マネジメントと教学マネジメントの具体的な方策や手法について検討していく必要がある。

平成30年度 FD･SD委員会 年次報告

Plan 計画

１．【FDについて】
①第1回定例FD研修会、8月29日（水） 9:30～11:00、221教室
テーマ：障がいのある学生への理解と生活支援・学修支援への対応について（講師：分藤　賢之　氏）
②第2回定例FD研修会、3月18日（月） 9:10～11:50、221教室
テーマ：授業評価アンケート、学習成果の評価方針・シラバスの作成方法、学習成果の活用について

２．【SDについて】
①第1回定例SD研修会、8月29日（水）13:00～14:40、第2情報演習室
テーマ：教学IRシステムとエンロールメントマネジメントについて（講師：ＤＳＫ・藤板　一行　氏）
②第2回定例SD研修会、3月18日（月）12:40～14:50、221教室
テーマ：本学の３つの方針とPDCAサイクルによる内部質保証の成果検証について

Do 実行

１．【FDについて】
障害がいのある学生への対応と、学習成果の測定・査定・公表・活用について、学習と意見交換を行った。

２．【SDについて】
本学の教学IRシステムと３つの方針・PDCAサイクルによる内部質保証について、成果検証の報告を行った。

Check 検証

１．【FDについて】
今後は、さらに教育の質的改善と授業改革による学習成果の向上・充実に努め、本学や各学科・コースの特色ある教育について検討していく必要がある。

２．【SDについて】
今後は、さらに学生へのエンロールメント・マネジメントと教学マネジメントの具体的な方策や手法について検討していく必要がある。

Act 改善

１．自己評価「Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ」
【FDについて】
ほとんどの教員がFD研修会に参加して、テーマに関する意見交換を活発に行い、研修会後のアンケートにも今回のテーマや形式に対する前向きな意見が多く見られた。しかし、実際の問題解決や向上・充実には、今後の日常的で継続的・主体的な各部署でのFD活動が必要であると思われる。

２．自己評価「Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ」
【SDについて】
多くの教職員がSD研修会に参加して、テーマに関する年次報告に耳を傾け、研修会後のアンケートにも今回のテーマに関する肯定的な意見が多く見られた。しかし、若干事務職員の参加が少なかったことと、根拠資料に基づかない報告があったことが残念な点である。

平成３０年度　「ＩＲ推進室」年次報告書

区分：　学科コース　・ 委員会等 ・ 事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

氏名：森　弘行（室長）

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. 学務システムを含めた基礎資料の整備と活用の推進。
   学務システムの入力内容と入力担当者の確認。
2. キャリアステップ（社会人基礎力調査）等の実施および分析・活用の提案。
3. 第三者評価に向けた仮説検証。
   委員会等からの要望に応じてのデータ分析。
   学生ポートフォリオの提案。
   入学後の追跡調査。
4. サーバー、Wi-Fi 等の情報環境整備。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. SD 研修「教学 IR システムとエンロールメントマネジメントについて」開催。
   教授会、SD 研修会で学務システムの入力内容、担当者を確認。
   学生募集 SFA（Sales Force Assistant）ツールの構築。
2. 4 月：入学時アンケート実施
   8 月：キャリアステップ（社会人基礎力調査）実施
   1 月：卒業生就職先調査（2016 年度生対象）
   2 月：卒業時アンケート実施
3. 上記調査の集計結果は、共有フォルダで閲覧可能。
   2017 年度生のキャリアステップ（社会人基礎力調査）と卒業時の成績のクロス集計、卒業時アンケートのクラスター分析を実施。
   学生情報データベースに学生ポートフォリオを試験実装。
   社会人基礎力調査結果を学務システムへ登録。
4. メール、DNS、学内専用 Web 用サーバー選定。
   学務システム用サーバーの導入調査。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

1. 自己評価「S・A・B・C・D 」
   成績は教務課からの指示により学務システムへの入力がなされている。
   一方、面談データ、学生募集復命書等の入力は、担当者によって温度差がある。
   データ更新状況が把握できない。（1 件ずつ調べるしかない）
2. 自己評価「S・A・B・C・D 」
   Web 調査により問題なく実施。
   卒業生就職先調査の回収率も 56.0～85.7%と高かった。
3. 自己評価「S・A・B・C・D 」
   2017 年度生のキャリアステップ（社会人基礎力調査）と卒業時の成績（GPA）の関連を多変量分析。
   S：実行力、L：「表現力」「空間認識」、F：「思考力」、Y：「情報把握力」「計算力」との関連が検出。
   2017 年度生の卒業時アンケートについて、変数間のクラスター分析。
   回答の内容が似かよっている設問として資格や進路支援など、学生生活に関する 8 項目、設備に関する 4 項目、学生支援に関する 4 項目、学習到達度に関する 6 項目に分かれ、それぞれ同じようなパターンで回答していると思われる。妥当な結果？、学生のアンケート疲れ、設問文の理解度？
   卒業時アンケートの回答で、本学への入学を勧めるかどうかのカギは「友人関係」の満足度？
   学生情報データベースへのアクセス数は少ない。
   学生ポートフォリオの学務システムへの実装は開発依頼中であるが未定。
4. 自己評価「S・A・B・C・D 」
   平成 31 年 3 月、メール、DNS、学内専用 Web 用を新サーバーへ移行。
   学務システム用サーバーの導入については、まだシステム開発が継続しており、現状のまま学外サーバーの利用を継続。
   Wi-Fi 環境整備は次年度以降へ見送り。現行システムで Web 調査が実施可能かを検討。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. 学務システムの整備と活用の推進。
2. 各種アンケート等の Web 化推進。
3. 学務システムの学生対象サービスの充実。
4. 情報環境整備。

平成30年度 IR推進室 年次報告

Plan 計画

1. 学務システムを含めた基礎資料の整備と活用の推進。
   学務システムの入力内容と入力担当者の確認。
2. キャリアステップ（社会人基礎力調査）の実施および分析・活用の提案。
3. 第三者評価に向けた仮説検証。
   学生ポートフォリオの提案。
   入学後の追跡調査。
4. サーバー、Wi-Fi等の情報環境整備。

Do 実行

1. 教授会、SD研修会で学務システムの入力内容、担当者を確認。
   学生募集SFA（Sales Force Assistant）ツールの構築。
2. 入学時アンケート、キャリアステップ（社会人基礎力調査）、卒業生就職先調査、卒業時アンケートの実施
3. アンケート集計結果は、共有フォルダで閲覧可能。
   アンケート結果、GPA等とのデータ分析を実施。
   学生情報データベースに学生ポートフォリオを試験実装。
4. サーバー更新、Wi-Fi整備の調査

Check 検証

1. 学務システムへの成績入力はなされている。
   一方、面談データ、学生募集復命書等の入力は、担当者によって温度差がある。
   データ更新状況が把握できない。
2. Web調査は、問題なく実施。
   卒業生就職先調査の回収率も56.0～85.7%と高かった。
3. 社会人基礎力調査とGPAの関連性を検出。
   卒業時アンケート結果は、妥当な結果？ アンケート疲れ？設問文の理解度？
   本学への入学を勧めるかどうかのカギは「友人関係」の満足度？
   学生情報データベースへのアクセス数は少ない。
   学生ポートフォリオの学務システムへの実装は開発依頼中であるが未定。
4. GPで整備のWi-Fiは、スマートフォンの接続を想定しておらず、IPアドレス不足やトラフィック増の懸念。

Act 改善

1. 学務システムの整備と活用の推進
   欠落データの整備。
   ディプロマポリシー6項目の検証。
   複数資料によるデータ分析。
   学生募集への活用。

2. 各種アンケート等のWeb化推進
   授業アンケート。

3. 学務システムの学生対象サービスの充実
   学生情報データベースへのアクセス数は少ない。
   学生ポートフォリオの学務システムへの実装は開発依頼中であるが未定。

4. 情報環境整備
   Windowsサポート終了対策、Wi-Fi環境など。

平成３０年度　「教職課程委員会」年次報告書

区分：　学科コース　・ 委員会等 ・ 事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

氏名：織田　芳人（委員長）

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．文部科学省の再課程認定に伴う手続きを円滑に進める。

２．厚生労働省が今年度中に提示する新保育士養成課程のカリキュラム研究を進める。

３．教員養成の課題について調査研究を進める。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．文部科学省の再課程認定
再課程認定に伴う新カリキュラムにおける授業内容を各担当者で見直しを図る。

２．厚生労働省の新保育士養成課程に関する情報
全国保育士養成協議会の九州ブロック協議会への参加、保育士養成セミナーへの参加、等によって情報を得る。

３．教員養成課程の課題
文部科学省のホームページ、CiNii 等を活用して資料を収集する。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・[A]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
後期に入ってから教員の転出や職位の変更が生じたため、後期末まで必要書類の差し替え等に追われたが、再課程認定をクリアすることができた。

２．自己評価「 Ｓ・Ａ・[B]・Ｃ・Ｄ 」
①全国保育士養成協議会の九州ブロック協議会への参加、保育士養成セミナーへの参加、等によって情報を得ることができた。
②「指定保育士養成施設の修業教科目、単位数、履修方法の改正」に伴う学則変更申請が大幅に遅れたが、後期末までに必要書類を提出する目途をつけることができた。

３．自己評価「 Ｓ・[A]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
文部科学省のホームページを活用して資料を収集することができた。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．2019 年度から、1 年生に対して新カリキュラムが適用されるので、各担当者でそれぞれ見直した授業を評価して、いっそうの改善を図る。

２．　厚生労働省による保育士養成に関わる課程認定が数年以内に行われる見通しであることから、それに対応しやすいように履修表等の整備を図る。

平成30年度 教職課程委員会 年次報告

Plan 計画

1．文部科学省の再課程認定
文部科学省の再課程認定に伴う手続きを円滑に進める。

2．厚生労働省の新保育士養成課程に関する情報
厚生労働省が今年度中に提示する新保育士養成課程のカリキュラム研究を進める。

3．教員養成課程の課題
教員養成課程の課題について調査研究を進める。

Do 実行

1．文部科学省の再課程認定
再課程認定に伴う新カリキュラムにおける授業内容を各担当者で見直しを図る。

2．厚生労働省の新保育士養成課程に関する情報
全国保育士養成協議会の九州ブロック協議会への参加、保育士養成セミナーへの参加、等によって情報を得る。

3．教員養成課程の課題
文部科学省のホームページ、CiNii等を活用して資料を収集する。

Check 検証

1．文部科学省の再課程認定
後期に入ってから教員の転出や職位の変更が生じたため、後期末まで必要書類の差し替え等に追われたが、再課程認定をクリアすることができた。

2．厚生労働省の新保育士養成課程に関する情報
①全国保育士養成協議会の九州ブロック協議会への参加、保育士養成セミナーへの参加、等によって情報を得ることができた。
②「指定保育士養成施設の修業教科目、単位数、履修方法の改正」に伴う学則変更申請が大幅に遅れたが、後期末までに必要書類を提出する目途をつけることができた。

3．教員養成課程の課題
文部科学省のホームページを活用して資料を収集することができた。

Act 改善

1．2019年度から、1年生に対して新カリキュラムが適用されるので、各担当者でそれぞれ見直した授業を評価して、いっそうの改善を図る。

2．厚生労働省による保育士養成に関わる課程認定が数年以内に行われる見通しであることから、それに対応しやすいように履修表等の整備を図る。

平成３０年度　「募集・広報委員会」年次報告書

区分：　学科専攻　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

氏名：髙井　達司（委員長）

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．進学説明会への積極的参加と、高校生の入学意欲を高めるプレゼンに努める。

２．全ての教育活動を募集活動と位置づけ、社会への情報提供を積極的に行う。

３．予算管理の徹底と次年度以降の広報媒体の見直しを図る。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．校内型説明会（延べ 57 校）は前年比 10 校増加。会場型説明会（22 会場）は前年比 4 会場の増加。複数回の面談者に対する説明内容は、重複することの無いよう工夫した。
２．全ての公開講座を長崎新聞社へ告知依頼するとともに、報道機関全社へのニュースリリースをその都度行うなど、マスコミに対しあらゆる教育・研究活動の情報発信を実施した。加えて今期後半より、ソーシャルメディアを活用したことで、若年層への新たな情報発信を始めた。
３．前年比大幅な予算圧縮を見たことから、執行状況には最も注意を払った。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・[Ｂ]・Ｃ・Ｄ 」
募集広報委員の協力を得ながら、「分野別進学説明会」へ 31 校参加した（前年比 11 校増）。入学後の学生生活や、卒業後の自信の姿がイメージ出来るような、興味関心を惹く分かり易いプレゼンに努めた。
依頼のあったエリア内高校へは原則全てに参加したことで、県内私大の中で説明会への露出は非常に高かった。所謂、お得意様高校においては、数多くの生徒と面談を果たしており一定の効果が見られた。
２．自己評価「 Ｓ・Ａ・[Ｂ]・Ｃ・Ｄ 」
全ての講座・講習のニュースリリースを実施したが、うち 4 講座が多くのテレビ局や新聞に掲載された。
ソーシャルメディアの活用は緒に就いたばかりで、その効果は測定できないが、本学の良さを発信していくツールとして、意欲的に取組む姿勢が各コースに芽生えた。
３．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・[Ｃ]・Ｄ 」
当初は前年並みの活動内容に基づいて予算管理を徹底してきたが、進学説明会への積極参加を実施したことで、厳格な予算執行は出来なかった。このことは、幾つかの募集活動を実施出来なかった要因に繋がった。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．講師によるプレゼン内容に違いを生じないよう、基本的なマニュアルが必要である。
またエリア外（特に佐世保市）への参加も、最小限度の範囲内で実施を検討したい。

２．発信すべき情報が中々浮かび上がってこないので、各コースとの連携を密にしたい。併せて、高校生目線を意識するため、SNS は学生の意見聴取を重視したい。

３．本年度予算を踏襲するも「会場型進学説明会」や「紙媒体」は経費も高いことから、前年度の実績評価を行うことで費用対効果を検証する。

平成30年度 募集・広報委員会 年次報告

Plan 計画

1. **進学説明会への積極的参加**と、高校生の入学意欲を高めるプレゼンに努める。

2. 全ての教育活動を募集活動と位置づけ、**社会への情報提供**を積極的に行う。

3. **予算管理の徹底**と次年度以降の広報媒体の見直しを図る。

Do 実行

1. 校内型説明会（延べ57校）は前年比10校増加。会場型説明会（22会場）は前年比4会場の増加。複数回の面談者に対する説明内容は、重複することの無いよう工夫した。
2. 全ての公開講座を長崎新聞社へ告知依頼するとともに、報道機関全社へのニュースリリースをその都度行うなど、マスコミに対しあらゆる教育・研究活動の情報発信を実施した。加えて今期後半より、ソーシャルメディアを活用したことで、若年層への新たな情報発信を始めた。
3. 前年比大幅な予算圧縮を見たことから、執行状況には最も注意を払った。

Check 検証

1. 入学後の学生生活や、卒業後の自信の姿がイメージ出来るような、興味関心を惹く分かり易いプレゼンに努めた。依頼のあったエリア内高校全てに参加したことで、所謂、お得意様高校においては、数多くの生徒と面談することが出来一定の効果を得た。
2. 全ての講座のニュースリリースを実施したが、うち4講座が多くのTV局や新聞に掲載された。ソーシャルメディアの活用は緒に就いたばかりで、その効果は測定できないが、本学の良さを発信していくツールとして、意欲的に取組む姿勢が各コースに芽生えた。
3. 当初は前年並みの活動内容に基づいて予算管理を徹底してきたが、進学説明会への積極参加を実施したことで、厳格な予算執行は出来なかった。このことは、幾つかの募集活動を実施出来なかった要因に繋がった。

Act 改善

1. 講師によるプレゼン内容に違いを生じないよう、基本的なマニュアルが必要である。またエリア外（特に佐世保市）への参加も、最小限度の範囲内で実施を検討したい。

2. 発信すべき情報が中々浮かび上がってこないので、各コースとの連携を密にしたい。併せて、高校生目線を意識するため、SNSは学生の意見聴取を重視したい。

3. 本年度予算を踏襲するも「会場型進学説明会」や「紙媒体」は経費も高いことから、前年度の実績評価を行うことで費用対効果を検証する。

平成３０年度　「紀要・図書委員会」年次報告書

区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

氏名：古賀　克彦（委員長）

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．図書館利用者の増加を目指す。その取り組みの一環として授業での図書館利用を増やすため、教職員への協力依頼を行う。

２．紀要について、掲載内容など執筆要綱と電子公開などについて平成 29 年度同様とする。また、紀要発行のタイムスケジュールについては、平成 28 年度と同様とする。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．運営委員会および教授会において、授業関係で図書館での学びも取り入れてもらうようお願いする。また、学内の電子掲示板で、月ごとに図書館からのお知らせや、新刊案内を掲載し利用者数増加の成果をねらう。

２．教員へはメールにて投稿を呼びかけ、６月頃に教授会等で周知し、10 月頃投稿を希望する教員を調査し、12 月頃に業者へ見積もりを依頼する。１月の初旬頃に投稿１回目を締め切り、３月初旬に完成予定。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ⓑ・Ｃ・Ｄ 」

2018 年度（2 月末迄）の図書館利用者数は 2017 年度と比較と比較して 87.4%に減少した。この理由として①これまで利用頻度が高かった栄養士コースの１年生の利用頻度が下がった点、②他学科コースの利用頻度が上がらなかった点、③学生数減少などが理由として考えられた。貸し出し数に関しては、2018 年度（2 月末迄）は 4998 冊であり、2017 年度と比較して 2.7%増加した。これらのことより普段から図書館を利用する学生に関しては貸し出し冊数が増加したが、利用しない学生が増加してきていることが問題になっていると思われた。

利用者別／年度		2014(H26)年度	2015(H27)年度	2016(H28)年度	2017(H29)年度	2018(H30)年度(2 月末迄)
入館者	学生	12007	8640	6538	8779	7141
	教職員	1183	746	878	1085	1233
	学外者	91	31	37	161	383
	合計	13281	9417	7453	10025	8757

利用者別／年度		2014(H26)年度	2015(H27)年度	2016(H28)年度	2017(H29)年度	2018(H30)年度(2 月末迄)
貸出数	学生	5445	3447	2446	4087	4254
	教職員	872	570	643	777	739
	学外者	12	0	5	6	5
	合計	6329	4017	3094	4867	4998

２．自己評価「 Ｓ・Ⓐ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」

2018 年度紀要は投稿件数が 25 件で、前年度と比較して 2 件減少した。昨年度の紀要は再課程認定の関係で投稿数が増加したが、今年度も同等の投稿数であった。

紀要の作成に関しては、例年通りの 2 月末日発行のスケジュールに戻り特に問題は見られなかった。これは教職員の協力があったことによると思われる。ただ、新しく来られた教員への紀要編集スケジュールの説明が不十分な点があったのでその点は改善していきたい。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．　入館者数の増加対策を実施する。具体的には①授業での図書館利用の推進、②学生が図書館を利用するシステム作り、③図書館利用者増へのイベント実施などを実施する。

２．　投稿の呼びかけと、執筆に注意・喚起を促す。執筆要綱、電子公開については本年同様とする。

平成30年度 紀要・図書委員会 年次報告

Plan 計画

1. 図書館利用者の増加を目指す。その取り組みの一環として授業での図書館利用を増やすため、教職員への協力依頼を行う。

2. 紀要の円滑な発行を目指す。執筆要綱と電子公開のルールついて平成29年度同様とする。また、紀要発行のタイムスケジュールについては、平成28年度と同様とする。

Do 実行

1. 授業関係で図書館での学びも取り入れてもらうよう教授会等でお願いする。学内の電子掲示板で、月ごとに図書館からのお知らせや、新刊案内を掲載し利用者数増加の成果をねらう。

2. 教員へは教授会およびメールにて投稿を呼びかける。１月の初旬頃に投稿1回目を締め切り、3月初旬に完成予定。

Check 検証

1. 2018年度（2月末迄）の図書館利用者数は8757名で、2017年度と比較と比較して12.6%減少。貸出数に関しては、2018年度（2月末迄）は4998冊であり、2017年度と比較して2.7%増加。これらのことより普段から図書館を利用する学生に関しては貸し出し冊数が増加したが、利用しない学生が増加してきていることが問題になっていると思われた。

2. 2018年度紀要は投稿件数が25件で、前年度と比較して2件減少。紀要の編集に関しては、特に問題は見られなかった。これは教職員の協力があったことによると思われる。

Act 改善

1. 入館者数の増加対策を実施する。具体的には下記の内容を実施する。
   1. 授業での図書館利用の推進
   2. 学生が図書館を利用するシステム作り
   3. 図書館利用者増へのイベント実施などの実施

2. 投稿の呼びかけと、執筆に注意・喚起を促す。執筆要綱、電子公開については本年同様とする。

平成３０年度　「教務委員会」年次報告書

区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

氏名：山口　ゆかり（委員長）

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．授業力の更なる向上と改善　　（平成 30 年度本学努力目標の具体的取組より）

① 教育システムに対応したシラバスの見直しとチェックの徹底
② 新規に整備した教室および機器等の効果的活用の推進
③ アクティブラーニングを導入した授業の推進と検証
④ 学生による授業評価結果を踏まえた授業改善の推進

２．ＧＰＡ制度に係る規程の整備　　（平成 29 年度教務委員会の総括より）

①進級・卒業判定基準に達しない学生が生じた場合の対策

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．① シラバスの作成要領を改訂し、作成者とチェック担当者にチェック・修正の徹底を呼びかける。
シラバスはスケジュールに沿って作成・チェック・修正し、一般後期入試の合格発表までには、ホームページで公開する。

② 新規に整備した教室の利用状況（補講含む）は、教務課が管理する。
消耗品等を含めた教室環境整備について、審議する時間を設ける。（学科・コースの意見を教務委員会が集約する。）

③ アクティブラーニングの実施状況は、平成 30 年度より授業評価報告書に明記する。
平成 31 年度より、シラバスの授業方法欄にアクティブラーニング導入の有無を明記する。（シラバス作成要領の改訂）

④ 平成 30 年度の実施要領を作成する。
授業評価報告書は、学務システムを使って作成できるようにする。

２．① 成績評価については、学科・コースごとに過去の事例や現状を確認し、対策を考える。
教務委員会では学科・コースの意見を集約し、入学から進級、卒業判定までの学修支援について流れを整理する。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・$\boxed{\text{A}}$・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」

① シラバスの作成要領は、平成 30 年度私立大学等改革総合支援事業調査票（タイプ１）を基に改訂し、第６回（10 月）教授会で承認を受けた。その後、第９回（12 月）教授会には、2020 年４月より始まる高等教育段階の教育費負担軽減新制度に対応するため、運営委員会より実務家教員用シラバス様式（様式２）の提案がなされ、学務システムに組み込まれた。シラバスの作成、チェック、修正作業については、ほぼスケジュール通りに進み、昨年度より充実したシラバスが完成した。また、次年度の新入生には２月末、教務課が作成したシラバス公開の通知文を送付し、入学前に学習内容の確認を勧めることができた。なお、様式２に関する事項を追記した作成要領は、第７回教務委員会で確認し、委員会のフォルダに保存した。

② 新規に整備した教室は、授業、定期試験、行事等で活用の場が拡がっている。教室環境整備については、教務課が各教室設備・環境整備要望一覧を作成し、事務局長に提出した。

③ アクティブラーニングの導入については、授業評価報告書に実施状況記入欄を設けたこと、シラバスの授業方法欄にキーワードの記入をお願いしたことで、情報共有が可能となり、能動的学習の推進につながった。

④ 学生による授業評価アンケートの実施要領は、第２回（５月）教授会に提案し、承認を受けた。アンケートは、設問ごとに選択肢を変えたことで回答しやすくなった。また、授業評価報告書は、様式を見直し、前期分より学務システムでの作成が可能となった。なお、次年度は、集計業者を新たに見つけなくてはならない。

２．自己評価「 Ｓ・$\boxed{\text{A}}$・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」

① ＧＰＡ制度に係る規程の整備については、「ＧＰＡ制度の運用に関する内規」の作成（第 14 回（３月）教授会で承認予定）と「免許及び資格取得のための学外実習の制限」の改正（第６回（10 月）教授会で承認）に取り組んだ。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．学生による授業評価アンケートの実施方法（Ｗｅｂ調査）を再度検討する（無線ＬＡＮ設置が望ましい）。

２．近年、規程等の整備は進んだものの、問題を抱えた学生との向き合い方については課題が残る。
学科・コースをはじめ、各種委員会と連携を図りながら、委員会としてできることを見つけていきたい。

平成30年度 教務委員会 年次報告

Plan 計画

１．授業力の更なる向上と改善
（平成30年度本学努力目標の具体的取組より）

①教育システムに対応したシラバスの見直しとチェックの徹底
②新規に整備した教室および機器などの効果的活用の推進
③アクティブラーニングを導入した授業の推進と検証
④学生による授業評価結果を踏まえた授業改善の推進

２．ＧＰＡ制度に係る規程の整備
（平成29年度教務委員会の総括より）

①進級・卒業判定基準に達しない学生が生じた場合の対策

Do 実行

１．①シラバスの作成要領を改訂し、作成者とチェック担当者に確認・修正の徹底を呼びかける。
スケジュールに沿って作業を進める。
②教務課が利用状況（補講含む）を管理する。
教室環境整備について、学科・コースの意見を集約する。
③平成30年度より、実施状況を授業評価報告書に明記する。
平成31年度より、導入の有無をシラバスに明記する。
④平成30年度実施要領を作成する。
授業評価報告書は、学務システムで作成できるようにする。

２．①成績評価について、学科コース内で審議した後、教務委員会で入学から進級・卒業判定までの流れを整理する。

Check 検証

１．①作成要領は、タイプ１の調査票を基に改訂した。
実務家教員向けの様式は、運営委員会から提案を受けた。
完成までのスケジュールは、概ね予定通りに進んだ。
次年度の入学生にシラバス公開の通知文を送付したことで、学習内容の事前確認を勧めることができた。
②新規に整備した教室の稼働率は、これまでより高まった。
各教室整備・環境整備要望一覧を作成し、事務局長に提出した。学生数の減少により、予算確保が難しい。
③シラバスや授業評価報告書に明記することで、情報共有が可能となり、能動的学習の推進につながった。
④アンケートは、設問ごとに選択肢を変えたことで、回答しやすくなった。
次年度は、集計業者を新たに探す必要がある。

２．①「ＧＰＡ制度の運用に関する内規」を作成した。
「免許及び資格取得のための学外実習の制限」を改正した。

Act 改善

１．学生による授業評価アンケートの実施方法を再検討する。
（Ｗｅｂ調査は、無線ＬＡＮ設置が望ましい）

２．問題を抱えた学生との向き合い方について、学科・コースや各種委員会と連携を図りながら委員会としてできることを見つけていく。

平成３０年度　「学生委員会」年次報告書

区分：　学科コース　・ 委員会等 ・ 事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

氏名：蛯原　正貴（委員長）

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1.【学生生活の支援】学生生活全般並びに学友自治会活動に関する事項について、学生の自主性を尊重しながら支援活動を行なう

2.【地域との関係】社会の一員として地域に貢献し、地域に愛される短大を目指す

3.【学友自治会運営】学友自治会役員から各担当学生委員への報告・連絡・相談を徹底させる。また学友自治会への適切な教育・指導を行い学友自治会の円滑な運営を支援する。

4.【学生委員会運営】学生委員間のコミュニケーションも緊密にし、効率的な活動ができるように協力体制を確立する。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

1.　週１回の総務委員会を中心に、学生同士の話し合いで物事を決めることに努めた。総務委員会では、現状から判断して実現が難しいこと、禁止事項等にだけは触れないよう助言し、学生が納得のいくかたちを尊重した。

2.　バスマナー向上を目指しクラス会や各行事等で学生が集まった際にバスマナー向上について呼びかけたり、バスマナー向上に関するポスターを作成し呼びかけを繰り返し行ったりした。

3.　学友自治会役員から各担当学生委員への報告・連絡・相談については、同学年はもちろん、上級生から下級生への伝達をサポートすることや、学友自治会役員が下級生同士の伝達に関して助言するなど、状況に応じた対応を行った。

4.　定期的に行われる学生委員会を中心に、学生委員間の情報共有を行った。効率的な活動ができるよう、不必要な議題や検討事項は可能な限り排除し、限られた会議の時間を有効活用するよう努めた。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ⓐ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
基本的な活動内容は紙面にて指示をし、内容の検討は学生同士の話し合いにおいて自治会活動を進めることができた。学科・コースの違う学生同士が互いにサポートしながら進められた結果であり、大きな問題等もなく円滑に活動を進めることが出来た。

２．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ⓒ・Ｄ 」
バスマナーに関して、学友自治会長からの呼びかけをはじめ、適宜各役員が注意をするなどバスマナー向上に努めていたが、学生全体の意識を変えるまでは至らなかったように思う。しかしながら、年度当初と年度末を比較するとバスマナーに関する苦情は減少した。

３．自己評価「 Ｓ・Ⓐ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
年間を通して大きな問題なく運営が出来たと思われる。特に、学友自治会長の細やかな連絡・報告・相談が役員同士及び役員と教員のコミュニケーションを円滑にしていた。

４．自己評価「 Ｓ・Ⓐ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
学生委員間の情報共有については、定期的に開催される委員会において十分図ることができたと思われる。会議の内容に関しては、報告事項をさらに減らすことは可能であるため、検討事項を見極めたうえで議題としていきたい。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．今年度同様、禁止事項等の確認を行いつつも、学生の主体性を尊重するかたちで来年度も活動していきたい。
２．年度当初のバスマナーについて、オリエンテーション等で厳しく注意しておく必要がある。また、バスマナーへの指摘があった際は、学生同士の注意を含め、繰り返し指導する必要がある。
３．コミュニケーションツールを有効活用し、学生間及び学生と教員間の連絡を密に行っていく必要がある。
４．報告事項は事前にまとめておき、検討事項を中心に会議の議題とすることが求められる。そのため、精選した議題を発議することが必要である。

平成30年度 学生委員会 年次報告

Plan 計画

1．【学生生活の支援】学生生活全般並びに学友自治会活動に関する事項について、学生の自主性を尊重しながら支援活動を行なう
2．【地域との関係】社会の一員として地域に貢献し、地域に愛される短大を目指す
3．【学友自治会運営】学友自治会役員から各担当学生委員への報告・連絡・相談を徹底させる。また学友自治会への適切な教育・指導を行い学友自治会の円滑な運営を支援する。
4．【学生委員会運営】学生委員間のコミュニケーションも緊密にし、効率的な活動ができるように協力体制を確立する。

Do 実行

1．週1回の総務委員会を中心に、学生同士の話し合いで物事を決めることに努めた。総務委員会では、現状から判断して実現が難しいこと、禁止事項等にだけは触れないよう助言し、学生が納得のいくかたちを尊重した。
2．バスマナー向上を目指しクラス会や各行事等で学生が集まった際にバスマナー向上について呼びかけたり、バスマナー向上に関するポスターを作成し呼びかけを繰り返し行ったりした。
3．学友自治会役員から各担当学生委員への報告・連絡・相談については、同学年はもちろん、上級生から下級生への伝達をサポートすることや、学友自治会役員が下級生同士の伝達に関して助言するなど、状況に応じた対応を行った。
4．定期的に行われる学生委員会を中心に、学生委員間の情報共有を行った。効率的な活動ができるよう、不必要な議題や検討事項は可能な限り排除し、限られた会議の時間を有効活用するよう努めた。

Check 検証

1．基本的な活動内容は紙面にて指示をし、内容の検討は学生同士の話し合いにおいて自治会活動を進めることができた。学科・コースの違う学生同士が互いにサポートしながら進められた結果であり、大きな問題等もなく円滑に活動を進めることが出来た。
2．バスマナーに関して、学友自治会長からの呼びかけをはじめ、適宜各役員が注意をするなどバスマナー向上に努めていたが、学生全体の意識を変えるまでは至らなかったように思う。しかしながら、年度当初と年度末を比較するとバスマナーに関する苦情は減少した。
3．年間を通して大きな問題なく運営が出来たと思われる。特に、学友自治会長の細やかな連絡・報告・相談が役員同士及び役員と教員のコミュニケーションを円滑にしていた。
4．学生委員間の情報共有については、定期的に開催される委員会において十分図ることができたと思われる。会議の内容に関しては、報告事項をさらに減らすことは可能であるため、検討事項を見極めたうえで議題としていきたい。

Act 改善

1．今年度同様、禁止事項等の確認を行いつつも、学生の主体性を尊重するかたちで来年度も活動していきたい。
2．年度当初のバスマナーについて、オリエンテーション等で厳しく注意しておく必要がある。また、バスマナーへの指摘があった際は、学生同士の注意を含め、繰り返し指導する必要がある。
3．コミュニケーションツールを有効活用し、学生間及び学生と教員間の連絡を密に行っていく必要がある。
4．報告事項は事前にまとめておき、検討事項を中心に会議の議題とすることが求められる。そのため、精選した議題を発議することが必要である。

平成３０年度　「障がい学生支援委員会」年次報告書

区分：　学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（　　）

氏名：光武　きよみ（委員長）

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．　障がい学生の把握を早期に行い、委員会で情報共有ができる。

２．関係教職員は 支援内容を理解して、学生への配慮を行う。

３．年度途中で学生に問題が生じた場合は、その都度対応を協議する。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．年度当初に申請書を回収する予定であったが、遅延があり 4 月 18 日の初回委員会で情報共有を行い、配慮が必要な学生の絞り込みを行った。

２．　各学科・コース別の配慮が必要な学生の一覧表を作成し、年度当初の学科会議等で情報の共有を図った。非常勤講師への対応は事務局で行った。

３．30 年度中に前期・後期　各期 2 回の会議を開催して、現在の状況や対応の追加について協議した。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・(Ｂ)・Ｃ・Ｄ 」
数名は入学前に保護者面談を行い情報を得ることができたため、その後の対応もスムーズにできた。また申請書の提出日が守れない学生が数名おり、一覧表作成に時間がかかった。4 月中旬には委員会を開き情報は共有できたが、入学前の情報共有が望ましいと考える。

２．自己評価「 Ｓ・Ａ・(Ｂ)・Ｃ・Ｄ 」
初回学科・コース会議等で支援内容の確認はできたが、途中の連携が十分ではなく、支援内容にも限界があった。また結果的に退学者が出た。学科・コース教員が主体となって関わっていくため、委員会との連携は難しい部分がある。

３．自己評価「 Ｓ・Ａ・(Ｂ)・Ｃ・Ｄ 」
問題が生じた場合の協議までには至らなかったが、年度 4 回の会議で配慮内容の変更や追加などの情報交換はできた。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．　合理的配慮申請書の配布を課題等と一緒に郵送し、早い段階で一覧表を作成する。

２．入学前には教職員の情報共有が行われ、入学後すぐに対応できるように準備する必要がある。

３．学生に問題が生じた場合は、各学科・コースなど関係教職員で対応し、後日委員会で報告を行う。

平成30年度 障がい学生支援委員会 年次報告

Plan 計画

1． 障がい学生の把握を早期に行い、委員会で情報共有ができる。

2． 関係教職員は 支援内容を理解して配慮する。

3． 年度途中で学生に問題が生じた場合は、その都度対応を協議する。

Do 実行

1． 年度当初に申請書を回収する予定であったが、遅延があり4月18日の初回委員会で情報共有を行い、配慮が必要な学生の絞り込みを行った。

2． 各学科・コース別の配慮が必要な学生の一覧表を作成し、年度当初の学科会議等で情報の共有を図った。非常勤講師への対応は事務局で行った。

3． 30年度中に前期・後期　各期2回の会議を開催して、現在の状況や対応の追加について協議した。

Check 検証

1． 数名は入学前に保護者面談を行い情報を得ることができたため、その後の対応もスムーズにできた。また申請書の提出日が守れない学生が数名おり、一覧表作成に時間がかかった。4月中旬には委員会を開き情報は共有できたが、入学前の情報共有が望ましいと考える。

2． 初回学科・コース会議等で支援内容の確認はできたが、途中の連携が十分ではなく、支援内容にも限界があった。また結果的に退学者等が出た。学科・コース教員が主体となって関わるため、委員会との連携は難しい部分がある。

3． 問題が生じた場合の協議までには至らなかったが、年度4回の会議で、配慮内容の変更や追加などの情報交換はできた。

Act 改善

1． 合理的配慮申請書の配布を課題等と一緒に郵送し、早い段階で一覧表を作成する。

2． 入学前には教職員の情報共有が行われ、入学後すぐに対応できるように準備する必要がある。

3． 学生に問題が生じた場合は、各学科・コースなど関係教職員で対応し、委員会で後日報告を行う。

平成３０年度　「学生相談室」年次報告書
区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）
氏名：福井　謙一郎（室長）
ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。
１．学生に対する相談室の周知を行う ２．障害を有する学生に対するより細やかな支援を行う
ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。
１．　本年度は、新入生オリエンテーションならびに二年生オリエンテーションにおいて、学生相談室の周知をおこなった。そして学生相談室ではなく、福井研究室で相談を行うことを知らせた。 ２．　１件につき 50～60 分の時間を設定し、丁寧に面談を行った。そして親族・家族、医療機関、行政との連携を行いながら支援した。
ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。
１．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 結果、来談件数は 62 件（一件あたり 50 分）となった。しかし、学生に対する周知は、口コミで広がっているようである。 ２．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 家庭に関する問題が多く、本人だけでは解決できない問題が多かったが、障害や症状に関して家族の理解が得られる場面が多く見られ、学生本人も来談したことを肯定的に捉えている発言が多くあった。
ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。
１．　学生相談室（福井研究室）の場所を明記し、相談内容の具体例を含め、ポスター化して掲示することで更なる周知を図る。 ２．職員や家族、他機関との連携を図りながら、充実した支援を実施する。

平成30年度 学生相談室 年次報告

Plan 計画

１．学生に対する相談室の周知を行う

２．障害を有する学生に対するより細やかな支援を行う

Do 実行

１． 本年度は、新入生オリエンテーションならびに二年生オリエンテーションにおいて、学生相談室の周知をおこなった。そして学生相談室ではなく、福井研究室で相談を行うことを知らせた。

２． １件につき50～60分の時間を設定し、丁寧に面談を行った。そして親族・家族、医療機関、行政との連携を行いながら支援した。

Check 検証

１．自己評価「Ａ」
結果、来談件数は62件（一件あたり50分）となった。しかし、学生に対する周知は、口コミで広がっているようである。

２．自己評価「Ａ」
家庭に関する問題が多く、本人だけでは解決できない問題が多かったが、障害や症状に関して家族の理解が得られる場面が多く見られ、学生本人も来談したことを肯定的に捉えている発言が多くあった。

Act 改善

１． 学生相談室（福井研究室）の場所を明記し、相談内容の具体例を含め、ポスター化して掲示することで更なる周知を図る。

２．職員や家族、他機関との連携を図りながら、充実した支援を実施する。

平成３０年度　「食品加工研究センター」年次報告書

区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

氏名：橋口　亮（センター長）

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．　食品加工センターと本学の組織との関わりを検討する。

２．　学生と共にできる食品加工について検討する。

３．　学内の行事などで加工食品を提供する。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．食品加工センターに求められるものは何か、設置した目的は何か、不明な点が多いので今年度も引き続き検討する。

２．学生と共に実行できるのは、卒業研究以外に考えられない。テーマに加工食品を選び、食品加工について学ぶ機会とする。

３．　教育懇談会でカステラの提供のほか、オープンキャンパス、学園祭などでも提供する。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「　Ｓ・Ａ・Ⓑ・Ｃ・Ｄ　」

栄養士コースの特徴として、加工食品の開発に取り組むことが目的と思われるが、明確ではない。また、加工食品の研究開発は、容易なものではない。

２．自己評価「　Ｓ・Ａ・Ⓑ・Ｃ・Ｄ　」

卒業研究のテーマとして学生と共に「びわの加工食品の研究」に取組んだ。学生の向き合い方や時間的な制約もあり、担当教員に負担がかかることが多かった。

３．自己評価「　Ｓ・Ⓐ・Ｂ・Ｃ・Ｄ　」

学園祭での提供はなかったが、その他の場面では、加工食品を提供できた。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．引き続き活動の目的を明確にし、食品加工センターと栄養士コースとの関係を検討したい。

２．　次年度も卒業研究のテーマに加工食品を取り入れ、学生と共に実験・実習に取り組みたい。

３．　前年度と同様、機会があれば積極的に提供したい。

平成30年度 食品加工研究センター　年次報告

Plan 計画

1. 食品加工センターと本学の組織との関わりを検討する。

2. 学生と共にできる食品加工を検討する。

3. 学内行事や授業などで加工食品を提供する。

Do 実行

1. 食品加工センター設置の目的、期待されることなど不明な点を検討する。

2. 卒業研究において加工食品をテーマとした取組みを行う。

3. 授業、オープンキャンパス、公開講座、教育懇談会などで加工食品を提供する。

Check 検証

1. 栄養士コースの特徴となるような加工センターの役割は果たせていない。

2. 学生との関わりで、卒業研究において加工食品の研究は実施できた。

3. 授業、オープンキャンパス、公開講座、教育懇談会などで加工食品を提供することができた。

Act 改善

1. 引き続き、活動の目的を明確にし、食品加工センターと栄養士コースとの関係を検討したい。

2. 次年度も卒業研究のテーマに加工食品を取り入れ、学生と共に活動したい。

3. 前年度と同様、機会があれば加工食品を提供したい。

平成３０年度　「地域連携推進センター」年次報告書
区分：　学科コース　・ 委員会等 ・ 事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）
氏名：山本　尚史（センター長）
ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。
１．本学の学術資源の地域への発信に努める。 ２．プラットフォーム事業を意識した、公開講座の取り組みを進める。（食育、子育て、高校生キャリア教育、高齢者福祉の４分野）
ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。
１．公開講座を通じて、地域に発信できたものと考える。 ２．公開講座において、実施した。いずれの講座も満足度が高く、地域及び学内外の関係者から評価を得たものと考える
ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。
１．自己評価「 Ｓ・A・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 満足度等も高く、地域からの信頼を得た、短大運営に資することにつながったと考える。 ２．自己評価「 Ｓ・A・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 学内外、地域からの評価も高く、今後も継続した実施を検討したい。
ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。
１．　公開講座の講座内容、講師の人選等、学内外に広く呼びかけたい。 ２．地域、学内外の関係者にさらに満足していただけるように、事業関係者への呼びかけを行い、他大学事業も実施していただけるようにしたい。その際、教職員の参加数や参加率は問われるが、任意参加とし、講座や運営方法の見直しに資するデータ収集に努めたい。

平成30年度 地域連携推進センター 年次報告

Plan 計画

１．本学の学術資源の地域への発信に努める。

２．プラットフォーム事業を意識した、公開講座の取り組みを進める。（食育、子育て、高校生キャリア教育、高齢者福祉の４分野）

Do 実行

１．公開講座を通じて、地域に発信できたものと考える。

２．公開講座において、実施した。いずれの講座も満足度が高く、地域及び学内外の関係者から評価を得たものと考える

Act 改善

１．　公開講座の講座内容、講師の人選等、学内外に広く呼びかけたい。

２．地域、学内外の関係者にさらに満足していただけるように、事業関係者への呼びかけを行い、他大学事業も実施していただけるようにしたい。その際、教職員の参加数や参加率は問われるが、任意参加とし、講座や運営方法の見直しに資するデータ収集に努めたい。

Check 検証

１．自己評価　Ａ
　満足度等も高く、地域からの信頼を得た、短大運営に資することにつながったと考える。

２．自己評価　Ａ
　学内外、地域からの評価も高く、今後も継続した実施を検討したい。

平成３０年度　「地域子育て支援センター」年次報告書

区分：　学科コース　・ 委員会等 ・ 事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

氏名：本村　弥寿子（室長）

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．　公開講座の内容を工夫し、親子で参加しやすい子育て支援を目指す。

２．「親育ち講座」にディスカッションの場を設ける等、受講者が主体的に取り組める内容の改善を図る。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．「親子の絆と遊び」のテーマで、長崎幼稚園において 2 度の講座を開いた。2 回とも「かたり音」に協力を依頼し、親子ともに楽しめる講座を模索した。

２．「親育ち講座」に加え、福井講師による「パパの会（父親とのディスカッション）」と「ママの会（母親とのディスカッション）」を開催した。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 S ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」

１度目は約 25 組の親子、2 度目も約 25 組の親子に加え、近隣の中央保育所から 4 歳児 20 名と付き添いの保育士が参加した。講話と遊びの実践や「かたり音」による歌とおはなしといった様々な内容により、参加した 0 歳児から 4 歳児まで飽きることなく過ごせた。長崎幼稚園に常備してある未就園児用の遊具等も参加者に開放していることも、小さな子どもを抱えた親子にとって安心して参加できる要因となっている。

２．自己評価「 S ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」

講座の内容は毎回好評だった。「パパの会」「ママの会」で保護者同士・講師と保護者のつながりが密になったと感じている。

栄養士コースより講師を招いて、食育について開講できた。受講者の要望に応じた取り組みがなされた。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．　アンケートから要望の多かったものを取り入れるなど、公開講座の内容に広がりを持たせる。

２．「親育ち講座」の内容の充実を図る。

平成30年度 地域子育て支援センター 年次報告

Plan 計画

1.公開講座の内容を工夫し、親子で参加しやすい子育て支援を目指す。

2.「親育ち講座」にディスカッションの場を設ける等、受講者が主体的に取り組める内容の改善を図る。

Do 実行

1．「親子の絆と遊び」のテーマで、長崎幼稚園において2度の講座を開いた。2回とも「かたり音」に協力を依頼し、親子ともに楽しめる講座を模索した。

2．「親育ち講座」に加え、福井講師による「パパの会（父親とのディスカッション）」と「ママの会（母親とのディスカッション）」を開催した。

Check 検証

1.1度目は約25組の親子、2度目も約25組の親子に加え、近隣の中央保育所から4歳児20名と付き添いの保育士が参加した。講話と遊びの実践や「かたり音」による歌とおはなしといった様々な内容により、参加した0歳児から4歳児まで飽きることなく過ごせた。長崎幼稚園に常備してある未就園児用の遊具等も参加者に開放していることも、小さな子どもを抱えた親子にとって安心して参加できる要因となっている。

2、講座の内容は毎回好評だった。「パパの会」「ママの会」で保護者同士・講師と保護者のつながりが密になったと感じている。
　栄養士コースより講師を招いて、食育について開講できた。受講者の要望に応じた取り組みがなされた。

Act 改善

1．アンケートから要望の多かったものを取り入れるなど、公開講座の内容に広がりを持たせる。

2．「親育ち講座」の内容の充実を図る。

平成３０年度　「寮務委員会」年次報告書

区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

氏名：昆　正子（委員長）

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．寮生がルールに沿って安全に気持ちよく過ごせる。
２．個別に対応が必要な学生へ支援ができる。
３．短大と高校が情報を共有し、寮運営をサポートする。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

寮生の相談にこまめに応じ、体調面の気がかりな寮生や寮則違反者等については、呼び出して状況確認、適宜指導・助言する等のサポートを行った。

１．今年度は特定の学生による違反が相次ぎ、寮務委員も指導に追われた。精神不安定による体調不良や違反行為を繰り返す寮生が多く、改善に向けてこまめに聞き取りや面談を行った。また月一回の寮生役員会へ寮務委員長が出席し、寮生活への助言を行った（計８回開催）。その他年度始めに寮生集会を実施し、２年生としての自覚を促したり、行事の安全面に関する助言・施設利用のサポートを行った。
２．合理的配慮を要する学生について、学生部長を中心に情報収集（合理的配慮事項申請書の確認）及び障がい学生支援委員・学科・寮務委員との共有を行い、対応の早期検討に務めた。また犯罪被害についても学生部長より警察への連絡や本人の指導が行われた。

３．高校を交えての委員会を２回開催。とくに高校生のマナーについて苦情が出ている現状を寮監より報告して頂き、今後高校側の指導に反映して頂くように投げかけた。高大生による他室訪問・金銭盗難が起こり、短大・高校それぞれで寮生の指導を行ったが問題の解決まで時間を要した。
修繕・購入が必要な設備については寮務委員会で確認し、事務局長より必要性・現実性の高いものから順次予算を組み、計画的に見直しをされる方向である。高校のテレビ室のソファの移動やロビーのソファの入れ替え、エアコン・冷蔵庫の設置が完了し、非常口カバーも見積もり済。防犯面の設備の充実も今後進められる。また寮監より寮食に関する寮生アンケートや試食を実施され、委員長名で改善に向けての報告書を本部へ提出した。また高大合同の避難訓練を実施した（防犯講座は短大寮生のみで実施）。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・[Ｂ]・Ｃ・Ｄ 」
うまく人間関係を構築できない・ルールを守れない学生が多く、違反者が常習化した。違反の度に寮監から注意し、目立つ場合は学生部長・寮務委員長が面談し指導・助言する、改善が見られない場合は寮務委員会で今後の指導の方向性や措置を検討する等してきたが、学生の改善が長続きせず退寮となるケースもあり、学長を交えての寮務委員会開催が続いた。違反者への聞き取りからは、寮則が意識されていない実態も浮かび上がった。また学生は基本的に受け身であり、寮の自治についても寮長はじめ他力本願さが見受けられた。掃除の徹底については役員会を通じて注意を行ってきたが、全体的な改善が見られなかった。スムーズな役員引継ぎの為、寮長らとの資料の見直しと新旧役員の会議参加を実施したが、新役員の様子から役職の意識が備わっているか心配なところが見受けられる。寮生のモチベーションやリーダーシップ、モラルの向上については、「寮生集会を開催し、全体の意識を高める」、「1・2年生によるチューター制の強化」、「掃除のやり方を実演しながらレクチャーする」等の対策が考えられる。他者への思いやりが、今の寮生にはもっとも必要な指導である。

２．自己評価「 Ｓ・[Ａ]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
特別な配慮事項が必要な学生について、基本的な対応を３月中に寮と学科とで把握することができた。次年度は書類の回収時期を早め、チューター面談や部屋割り等に活かせるようにしたい。また学生相談室が関与する案件もあり、結論が確実に寮監に伝わるよう、全学的な連絡体制の見直しを学科長・事務局長通じ学長に提案する。

３．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・[Ｃ]・Ｄ 」
臨時の寮務委員会開催の他、指導の内容や経過について、よりこまめに連絡し合うことが反省点となった。高大いずれも特別な配慮を要する寮生の情報を、速やかに現場に報告する体制を整える必要がある。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．寮生が安全に、気持ちよく寮生活を過ごせる。（寮則の順守、環境美化、設備・食事の充実）
２．個別に対応が必要な生徒や学生の情報を把握し、速やかに支援ができる。
（情報の把握と対策、大学の連絡体制の見直し）
３．短大と高校が連携し、寮運営をサポートする。（高大参加の委員会開催、日頃の報告・連絡体制整備）

平成30年度 寮務委員会 年次報告

Plan 計画

１．寮生がルールに沿って安全に気持ちよく過ごせる。
２．個別に対応が必要な学生へ支援ができる。
３．短大と高校が情報を共有し、寮運営をサポートする。

Do 実行

1. 体調不良者・違反行為常習者のこまめな聞き取りや面談。寮生役員会への出席（計8回）。寮生集会実施。行事の安全面に関する助言・施設利用のサポート
２．合理的配慮を要する学生について学科・寮務委員との共有を行い、対応の早期検討に務めた。また犯罪被害についても警察への連絡や本人の指導を行った。
３．高校を交えての委員会開催。施設整備・避難訓練実施による安全管理・指導。寮食改善にむけての要望書提出。

Check 検証

１．寮則への意識が乏しく、注意しても改善が長続きしない学生の実態。掃除の徹底については全体的な改善が見られなかった。寮生の意欲やリーダーシップ、モラルの向上のために
「寮生集会を開催し、全体の意識を高める」
「1・2年生によるチューター制の強化」
「掃除のやり方を実演しながらレクチャーする」
２．特別な配慮を要する学生の学基本的な対応を3月中に寮と学科とで把握できた。学生相談室が関与する案件は室と連携し辛い場面があった。
３．高大生の他室訪問・金銭盗難が起きたが解決に時間を要した。臨時の寮務委員会開催の他、指導の内容や経過について、よりこまめな連絡が必要。高大いずれも特別な配慮を要する寮生の情報を、速やかに現場に報告する体制を整える必要がある。

Act 改善

１．寮生が安全に、気持ちよく寮生活を過ごせる。
２．個別に対応が必要な生徒や学生の情報を把握し、速やかに支援ができる。
３．短大と高校が連携し、寮運営をサポートする。

平成３０年度　「事務局」年次報告書
区分：　学科コース　・　委員会等　・ 事務局等 ・　教職員個人　・　その他（　　）
氏名：前田　功（事務局長）
ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。
１．施設設備の充実 ２．　教務システムの構築完成 ３．個々の事務習得とレベル向上
ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。
１．　年度の当初に、設備の状況を把握し計画的に見直しを進めていく ２．システム開発企業との連携を強化して、常に情報交換を行いシステムを完成させる ３．ＦＤ、ＳＤ研修の計画的な実施を図る。事務職員個々の知識習得と一人で複数の部署を担当できる能力の育成。
ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。
１．自己評価「 Ｓ・ A ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 執行計画計上分については、計画通りの実行がなされた。若竹寮の冷蔵庫、空調機の設置、更新、メールサーバーの更新　等々 ２．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・ C ・Ｄ 」 システム開発先のノウハウに問題があったが、少しずつ本学の修正事項等に即した対応が図られているように感じられる。 ３．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・ D 」 人数的には本来の体制が確保されつつあるが、個々の仕事をこなすのに手いっぱいとなっており、計画的なＳＤ研修会の実施にまでは至っていない。
ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。
１．計画通りに執行できた。 ２．システム構築に向けた方向性の再検討を行う。 ３．　事務職員のレベル向上から喫緊の課題であるので、ＳＤ研修会の実施並びに一人二役体制の構築を目指す。

平成30年度 事務局 年次報告

Plan 計画

１．施設設備の充実

２．教務システムの構築完成

３．個々の事務的能力習得とレベル向上

Do 実行

1.年度当初に、設備の状況を把握し計画的に見直しを進めていく。

２．システム開発企業との連携を強化して、常に情報交換を行いシステムを完成させる。

３．ＦＤ・ＳＤ研修の計画的な実施を図る。事務職員個々の知識習得と一人で複数の部署を担当できる能力の育成。

Act 改善

１．今後とも計画的に執行していく。

２．システム構築に向けた方向性の再検討を行う。

３．事務職員のレベル向上が喫緊の課題であるので、ＳＤ研修会の実施並びに一人二役体制の構築を目指す。

Check 検証

１．執行計画計上分については、メールサーバーの更新、若竹寮の冷蔵庫空調機の設置・更新、など計画通り執行。

２．システム開発先のノウハウに問題がありそう。少しずつ本学の修正事項等に即した対応が図られている？

３．本来の体制が確立されつつあるが、個々の仕事をこなすのに手いっぱいとなっており、計画的なＳＤ研修会の実施にまで至らず。

平成２９年度

「個人別報告書」

平成３０年度　「玉島　健二」年次報告書

区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

部署名：大学運営	職名：学長

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．　2018 年度の学長運営方針における４つの努力目標について、実現に向けた取組を推進する。
２．「現代社会と女性」及び「生涯学習論」の授業を通して、学生の基礎学力・社会人基礎力等の向上を目指す。
３．学生募集につながる業務・取組等に積極的に関わり、2019 年度入学生 200 名を目指す。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．　４項目の努力目標の実現
　運営委員会、入試委員会及び教授会における協議の徹底・情報の共有により、その実現を図る。
２．授業運営
　「現代社会と女性」においては、学科・コース担当教員との協議や共通理解を図りながら、教材の準備・運営等を実施する。「生涯学習論」においては、長崎新聞社の協力を得て、３回にわたり新聞を活用した取組を実施する。また、独自の自主教材を作成して目標の実現を図る。
３．　学生募集
　進路ガイダンス、高校訪問、高校からの本学見学会等に積極的に関わり、本学の良さ・強み等をアピールする。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・[Ｂ]・Ｃ・Ｄ 」
　施設設備では、2 号館ロビーの机・椅子の取り換え（卒業記念品によるもの）、照明の LED 化、ソファーの撤去及び 2 号館ロビー入口に手すりを設置できた。2019 年度の認証評価に向けた取組（自己点検・評価報告書の作成等）を行った。学生募集については、前年度より上回る可能性が大きくなったが、定員 200 名に対し 169 名（充足率 84.5%）となった。
２．自己評価「 Ｓ・Ａ・[Ｂ]・Ｃ・Ｄ 」
　「現代社会と女性」における初年次教育（基礎学力の把握）及び「生涯学習論」における長崎新聞社からの出前講座（３回）は実施できた。社会人基礎力が身についたかどうかは各種調査結果を待つ必要があるが、「現代社会と女性」（2 年生）の感想では有益であったとの感想が多かった。
３．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・[Ｃ]・Ｄ 」
　進学ガイダンスやオープンキャンパス等には積極的に関わったが、学生募集については、前年度より上回る可能性が大きくなったが、定員 200 名に対し 169 名（充足率 84.5%）となった。特に、生活創造学科の学生確保が当面の課題である。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．ほとんど進展しなかった項目について、再度チェックを行い、原因や理由の把握に努める。教職員の意識改革も重要な課題であるので、このことも念頭に置きながら、2019 年度の対策を考える。

２．「現代社会と女性」については、すでに 2019 年度のシラバスを作成した。また、「生涯学習論」のシラバスも作成を完了した。「生涯学習論」の受講者が１桁（6 名）に落ち込んでいる。受講者増に向け、学科・コースの教員の協力を得て、学生に受講してもらえるように説明等に取り組む。

３．幼児教育学科は定員の約１１０％程度を確保できる状況に対し、生活創造学科が約６０％程度に止まる見通しである。生活創造学科、特に栄養士コースの特色化について早急に検討させ、実施できるもの（栄養士実力認定試験対策、卓袱料理試食会、SNS 活用による広報等）から実行に移す。

平成３０年度　「橋口　亮」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：栄養士コース	職名：教授

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．今すぐ実行の行動で仕事にあたる。

２．報告、連絡、相談を心がけ、ラインとスタッフの関係を良好にする。

３．期限厳守を心がける。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．学生への対応、業務への対応を迅速に行い、心に余裕をもたせる。

２．ラインとスタッフの関係を意識し、報告、連絡、相談を心がけた行動をする。

３．　期限厳守のため、今すぐ実行する。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ⓑ・Ｃ・Ｄ 」

学生への対応は、学生の向き合う姿勢にも差があるため、教員に負担がかかる場面が多かった。休学、退学の学生と保護者、成績不振の学生、卒業研究の進め方など負担の偏りがあった。したがって、余裕のある対応が出来たとはいいがたい。

２．自己評価「 Ｓ・Ⓐ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」

組織におけるラインとスタッフを意識し、報告、連絡、相談を心がけて行動した。学生同様、向き合う姿勢により評価は変わるので、十分であったとはいえない。

３．自己評価「 Ｓ・Ⓐ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」

今すぐ実行は、意識して行動したが、満足していない。さらに意識を高めたい。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．　学生への支援の程度を検討する。自立支援を心がけたい。

２．　組織におけるラインとスタッフを大事にし、報告、連絡、相談を密にするため、スタッフへの働きかけを強化したい。

３．　今すぐ実行は、持ち続けなければならない課題である。次年度も意識を持って取り組みたい。

平成３０年度　「森　弘行」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：ビジネス・医療秘書コース	職名：教授

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．学務システムへの移行を支援すると共に、不足する機能を独自データベースで補完する。

２．導入後７年を経過するインターネットサーバーの更新など、学内情報システムの安定運用。

３．授業への学生のより積極的な参加を目指す。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．　学生データベースの機能強化、学務システムとのデータ同期。

２．インターネットサーバー更改、学務システムサーバー設置、図書館情報システム更改。
Windows 7 サポート終了に伴う情報演習室設備更新計画。

３．　情報処理論で、ロボット組み立てなどの作業を組み込み、自ら学習を進める環境を作る。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・$\boxed{\text{B}}$・Ｃ・Ｄ 」
学生データベースに高校マスター、出身高校別学生記録、高校訪問記録など、学生募集の支援機能を追加。
学務システムに柔軟なデータ抽出機能がなく、学生データベースとのデータ同期は手作業に頼るところも残っている。

２．自己評価「 Ｓ・$\boxed{\text{A}}$・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
インターネットサーバーは H31 年 3 月に更新。システムのバージョン変更により、若干のプログラムの書き換えを行い、移行済み。
学務システムについては、開発が継続中であり、現状維持。
図書館情報システムは、H31 年 4 月中にクラウドへの移行が決定し、環境構築中。

３．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・$\boxed{\text{C}}$・Ｄ 」
ロボットに履修した学生は全く興味を示さず、予定した到達目標に達することができなかった。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．学生データベースの機能強化と情報分析

２．　学内情報システムに関する将来構想（情報演習室、ネットワーク分離）

３．学修成果をフィードバックする授業の試行

平成３０年度　「織田　芳人」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：幼児教育学科	職名：教授
ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
１．保育者に必要な知識や技能として興味・関心をもてるように、幼児用玩具に関する授業内容の工夫を行う。 ２．幼児教育におけるメディア活用に関する調査研究を行う。	
ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。	
１．　幼児用玩具に関する図書・文献を収集した。それらを参考にして、幼児も保育者も興味をもって製作できるようなおもちゃの教材を発案・試作し、教材としての可能性を確認した後、学生たちに課題として提示した。 ２．すでに収集した文献によって、保育者が幼児の活動を支援するために活用するメディア、及び、保育者が園務を合理化すために活用するメディアについて考察した。	
ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
１．自己評価「 Ｓ・Ａ・$\boxed{\text{B}}$・Ｃ・Ｄ 」 製作プロセスの明確な記録を画像とともに残しておく必要があった。 ２．自己評価「 Ｓ・$\boxed{\text{A}}$・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 ほぼ当初の計画通りに進められたので、論文として平成 30 年度の本学紀要に発表することができた。	
ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
１．今年度に発案・試作した教材の製作プロセスを画像とともにまとめる。 ２．保育者養成校のカリキュラムにおいて幼児教育に関わるメディア活用がどのように取り上げられているかを調査研究する。	

平成３０年度　「中澤　伸元」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：幼児教育学科	職名：教授
ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
１　指導者の言葉と思考の使い方とそれに対する学生の思考、捉え方。 ２．目的設定に対するイメージを作る。 ３．学生の行動を生む実践テクニック。	
ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。	
１．自分の興味関心のラスとスコトーマの理解と潜在意識活用法実践。 ２．高い自己イメージ、アファメーションにてコンフォートゾーンを上げ、ゴール設定の効果を上げる。 ３．理想の自分を描き臨場感を使いリアル習慣を身に付ける。	
ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
１．自己評価「 Ｓ・Ⓐ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 ２．自己評価「 Ｓ・Ⓐ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 ３．自己評価「 Ｓ・Ⓐ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」	
ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
１.自分にとっての自己確立のためのアファメーション言葉を習慣化する。 ２.他者からの価値観でなく、自分のイメージでゴール設定し、理想の自分に近づく。 ３．臨場感、リアリティある行動を意識する。	

平成３０年度　「松尾　公則」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：幼児教育学科	職名：教授　　特専教授　　松尾公則

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．「環境」「ヒトと生物」「栄養士の科学」などは現場で役立つ内容とし、関心興味を持たせる。

２．卒研では環境教育が実践できるような人材の育成を目指す。

３．中庭庭園の池の管理を行い多様性を高めていく。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．毎時間、講義内容に関する資料やプリントを準備し、90 分間学生が集中できるような内容とした。

２．毎時間自然と触れ合う内容とした活動を実践した。特に、野外観察を重視した。

３．池の清掃を行なうと同時に池に生息する動物たちを観察した。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 S・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
　学生の関心も高く十分に達成できたと思う。特に、ヒトと生物や環境においては、フィギア、本物、ＤＶＤなど、説明だけに終わらないように工夫できた。

２．自己評価「 Ｓ・A・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
　幼稚園や保育園において、生き物担当になれるような人材の育成を目指したが、一部の学生は苦手意識を払拭できずに卒業してしまった。しかし、程度の差はあれ一年間の成長には目覚しいものがあった。

３．自己評価「 Ｓ・Ａ・B・Ｃ・Ｄ 」
　美しい池の景観を維持するまでには至らなかったが、ビニールや紙くずなどの撤去を実施した。ゼミ生全員での清掃活動も１回だけ実施した。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．内容の精選をを行い、学生が必要としていることの講義を展開していきたい。

２．卒研の時間だけ自然に親しんでも本当の力にはなりえない。日頃の生活の中に、卒研と関わる内容のものを取り込み、大きな成長を遂げさせたい。

３．今年度の池の全体清掃は１回だけだったので、次年度は、複数回実施したい。

平成３０年度　「長尾　久美子」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：介護福祉士コース	職名：特別専任教授
ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
１．　国家試験対策の改善 ①国試に照準を合わせた年間計画と授業展開の工夫を行う。 ②学生自身が自ら計画的・継続的に取り組み、段階的に理解力・問題解決力をつけていくように支援する。 ２．学生への個別支援をより丁寧に行う。 ①各学生に個別に関わり。それぞれの課題に取り組むよう、継続的に支援する。 ②一部の成績低位学生にはよりきめ細かな指導を行う。	
ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。	
１．国家試験対策の改善 ①キャリアアップセミナーで毎回データ分析と学生への戻しなど、正解率アップに努めた。 ②「介護福祉士国家試験合格への Guide」を作成し、年間計画、受験への姿勢を周知するとともに、問題集の自己学習の結果を記入できるようにして配布した。 ２．学生への個別支援をより丁寧に行う。 ①過去問のテスト結果を、毎回、個人別に分析し、そのつど、返して、各自の課題を明確に示した。 ②学力の極めて低い学生について、本人が研究室に着やすい雰囲気を作り、個別に支援した。	
ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
１．自己評価「　Ｓ・Ａ・$\boxed{\text{B}}$・Ｃ・Ｄ　」 国家試験の自己採点では２名の不合格者がおり、合格率 88.9%で全員合格に至らなかった。 ２．自己評価「　Ｓ・$\boxed{\text{A}}$・Ｂ・Ｃ・Ｄ　」 ・テストごとの成果を必ず分析評価し、フードバックして丁寧な支援に努めた。 ・学力の極めて低い学生への個別指導を１年間続けたが、応用力向上には至らなかった。	
ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
１．担当する福祉系科目に学生が関心を持ち、理解を深めることができるような授業を行う。	

平成３０年度　「白石　景一」年次報告書

区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

部署名：幼児教育学科	職名：特別専任教授

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．「幼児音楽指導法」では、新入生が定員 100 名のところ、120 名と 20 名も多く入ってくる為、授業の内容及び方法について、更に改善していきたいと考える。特に簡易伴奏法及び保育内容領域「表現」の指導法について工夫する。
２．「保育と音楽表現」では、レッスンカルテの記入チェック確認を心がけ、一人ひとりの性格や進度に合った指導を心がけたい。
３．特別専任となり、限られた時間の中でなるべく効率的な学生対応を心がけたい。また、試験前など補習の希望学生の対応について工夫したい。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．　２０１９年度からスタートする科目、保育内容領域（表現）「子供と表現（音楽）」について、これまでの３０時間の内容を１５時間で、いかに効果的に凝縮して、あるいは割愛したりして、より効果的に教えることができるかを検討しながら、現在までの「幼児音楽指導法」の授業に取り組んだ。やはり、音楽経験に大きな差がある学生が入学してくる現状から、どこに焦点を当てて教えるべきかが、先ず、大きな課題である。このことに対しての対策の一つとして、なるべく個々の課題チェックを毎回の授業の中で行うことを心掛け、①読譜の基礎、②伴奏法の基礎、③保育内容領域「表現」の育成にかかる音楽的指導法の３本柱での凝縮を検討した。今年度も、定期試験において、実技と筆記を同時に実施した。
　また、入学後の格差を少しでも少なくする効果も狙った、入学前教育及び学生募集の一環として「ピアノサポートレッスン」にもかかわった。
２．　ピアノの演奏が苦手な学生や初心者にも簡易な伴奏楽譜についてのアドバイスや、弾きやすいように編曲したりして楽しいレッスンになるよう心掛けた。
３．学生の要望に応え、試験前など、出勤日ではない日に出勤し指導を行ったりした。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ⓐ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
　前期については、90 分単独の担当のため、個々のチェックがある程度丁寧にできたと思うが、後期は 45 分の中での個別チェックはかなり厳しい状況ではあった。授業でチェックした課題を授業終了時にすべて提出することを求めたことはよかったと思う。
２．自己評価「 Ｓ・Ⓐ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
　一人ひとりの性格や進度に合った指導を心がけ、ピアノの演奏が苦手な学生や初心者にも簡易な伴奏楽譜についてのアドバイスや、弾きやすいように編曲したりして楽しいレッスンになるよう心掛けた結果、学生自ら質問にきたりレッスンの依頼に来たりした学生が多くいたことは良かったのではないかと思う。
３．自己評価「 Ｓ・Ⓐ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
　週に 2～3 日の出勤日の中で昼休み・授業の前・放課後などでの補習はその対価があってしかるべきではないか。また、プランにはなかった事柄ではあるが、教育実習の巡回指導にも携わったが、それに加えて年度の途中から（予定外の）就職先への巡回訪問指導にも携わることとなった。これについても対価があってしかるべきではないか。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．領域に関する専門的事項に関する科目「子どもと表現　（音楽）」（1 単位 15 回）については、平成 30 年度までは「幼児音楽指導法」（2 単位 30 回）において行ってきたがこれを半分の時間で消化するのはほとんど不可能に近い。したがって、効率的に行うだけでなく、割愛しなくてはならない内容も絞る必要がある。したがって今回は、簡易伴奏法に関するコードや楽典の一部を省略する方向で計画をたてる。
２．　次年度も、今年度と同様に初心者にも楽しく学生自ら学ぶ姿勢を大切にしたいと考える。
３．　次年度も、環境整備も含め学生の要望にできるだけ答えられるよう心掛けたいと考える。

平成３０年度　「武藤　玲路」年次報告書

区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

部署名：ビジネス・医療秘書コース	職名：准教授

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．【学修支援について】
担当科目の学生の到達度と満足度が、80%以上「4 と 5」の評価になることを目標とする。

２．【進路支援について】
Ｌの就職率が 90%以上になることを目標とする。

３．【研究活動について】
短期大学のキャリア教育に関して、紀要や学会等で 3 本以上発表することを目標とする。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．【学修支援について】
アクティブラーニングを目的として、心理学の講義科目では毎回の授業の最後に理解度と感想を確認するミニレポートの提出を求め、さらに、授業の冒頭では前回の授業に関する質問をして、授業への関心を高めた。また、エクセルの演習科目では応用問題や自由課題を与えて、主体性や問題解決能力、学修意欲の育成に努めた。

２．【進路支援について】
１・２年生合同の就活ピュアサポート活動を年４回実施し、就職未決定者に対する働き掛けや指導を強化した。

３．【研究活動について】
職業・キャリア教育における学習成果の可視化と体系化をテーマとした研究活動を行った。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・[A]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
学生による授業評価アンケートの結果は、全体的に 5 段階評価の 4 前後であり、満足度は高い方ではあるが、アクティブラーニングによる、深い学び、対話的な学び、主体的な学びの修得は、十分であるとは言えない。

２．自己評価「 Ｓ・[A]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
卒業生 28 名中 2 名だけが未就職で、残り 26 名はほぼ全員正社員として内定し、90%以上の就職率を収めた。

３．自己評価「 Ｓ・[A]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
研究の本数は 6 本で妥当であると言えるが、研究のレベルが研究報告やノートであり、学術性に欠けている。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．【学修支援について】
今後は、アクティブラーニングの教授法や学修成果のフィードバックの手法を用いた授業を展開したい。

２．【進路支援について】
今後は、就職状況の量的な面に留まらず、質的な面でも学生の満足度が高まるように支援していきたい。

３．【研究活動について】
今後は、職業・キャリア教育に関する先行研究や多次元の統計処理を踏まえた学術論文を執筆していきたい。

平成３０年度　「濵口　なぎさ」年次報告書

区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

部署名：ビジネス・医療秘書コース	職名：准教授

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．アクティブラーニングへの取り組み
担当授業において、アクティブラーニングの手法を積極的に取り入れ、学生の実践力の強化を図る。
２．日商 PC 検定・MOS 試験への合格対策と登録販売者試験への対応
上記検定試験の受験者を増やし、受験者全員合格を目指す。登録販売者試験については、受験対策講座の充実を図る。
３．問題を抱える学生への対応
心身に問題を抱える学生や基礎学力の低い学生に対し、可能な限りきめ細かな対応を行うと共に、コース内での情報共有を図る。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．「ゼミナール」では学生による能動的な活動のサポートに徹し、資料提供と授業開始時と終了時での指導を心掛けた

２．日商 PC 検定試験の２級受験の呼びかけと問題集の貸し出しを行い、検定前には対策講座を実施した。データベース演習２の受講者に MOS Access2016 の問題集を貸し出し、受験を促した。登録販売者試験の対策講座を前後期９回実施した。

３．配慮的事項申請書を提出した学生について、授業などで配慮が必要か個別に確認した。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・[A]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
「ゼミナール」については、学生達の満足度が非常に高く、終了時の自己評価でも「最後までやり抜いた達成感が得られた」という項目では全員が 5 を付けていた。「ゼミナール」以外では、学生の意見を聞く場面を設けることができなかった科目もあった。

２．自己評価「 Ｓ・Ａ・[B]・Ｃ・Ｄ 」
日商 PC 検定（文書作成）２級の受験者は 16LA が２名受験し 100%の合格率に対し、17LA は８名受験し上位級への挑戦が顕著であったが、合格率は 50%であった。また、３級は 17LA の取得率 89.3%と、16LA の 81.5%より上昇したが、受験者全員合格とはならず、１名が不合格後再受験に至らなかった。MOS には２名が挑戦し、合格率は 100%であった。登録販売者試験については、受験対策講座のみでは合格は難しく、全員が不合格であった。

３．自己評価「 Ｓ・[A]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
配慮的事項申請書を提出した４名の学生のうち、２名についてはチューターとして関わることが多かったこともあり、きめ細かく対応し、コース内での情報共有もできており、本人達からも卒業時に対応に感謝するとの言葉をもらった。申請書を出していないが気になる学生への対応については検討が必要だと感じている

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．学生の実践力の向上を図ることを目的として、検定試験の受験対策に力を入れるとともに、コース内で能動的に学習するような雰囲気を作る

２．心身に問題を抱える学生や基礎学力の低い学生の入学が見込まれており、コース内で協力して対応できるよう心がける

平成３０年度　「山口　ゆかり」年次報告書

区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

部署名：栄養士コース　　職名：准教授

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．　引き続き、栄養士実力認定試験において担当科目の正解率を上げる努力をする。
２．卓袱料理試食会の主担当者として企画立案を行い、取り組みを成功に導く。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．　前期授業（給食経営管理論実習Ⅱ、学外実習総合演習）と後期対策講座において、出題率の高い分野の練習問題を解かせ、理解度を高める。
２．　４年前の実施要領を見直し、授業（長崎食育学、卒業研究）の中で実施する計画を立てる。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」

今年度の栄養士実力認定試験における「給食管理論」の結果は、短大平均をわずかに上回ったが、全国平均を超えることはできなかった。また、本学学生の内、全国平均を越えた者は昨年より増加（４点以上：平成 29 年度 46.6%→平成 30 年度 52.4%）したが、６点以上が減少（平成 29 年度 23.3%→平成 30 年度 7.1%）していた。原因としては、１年前期の講義で深く触れなかった問題が１問出題されたこと、試験勉強を行う際、科目全体に目を向ける者が減っていることの２点が考えられる。今後は、衛生管理以外にも大切な内容があることを伝えるとともに、再び全問正解者が出ることを期待したい。

表１ 本学学生の「給食管理論」における得点分布

		７点	６点	５点	４点	３点	２点	１点	０点
平成 30 年度	人数（名）	0	3	7	12	14	5	1	0
本学受験者数：42 名	割合（%）	0	7.1	16.7	28.6	33.3	11.9	2.4	0
平成 29 年度	人数（名）	2	8	6	4	13	6	3	1
本学受験者数：43 名	割合（%）	4.7	18.6	14.0	9.3	30.2	14.0	7.0	2.3

表２　「給食管理論」の平均点および正解率

	本学		短期大学		全国	
	平均	正解率(%)	平均	正解率(%)	平均	正解率(%)
平成 30 年度	3.7	52.4	3.5	49.4	3.8	53.7
平成 29 年度	3.8	53.8	3.4	48.9	3.7	53.4

２．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」

本試食会は７月 20 日（金）、長崎食育学と卒業研究を同日開講し、２年生（43 名）が１年生（28 名）、学園関係者（４名）および外部評価委員（４名）を招待する形で実施した。もてなす側の役割分担については、特に大きな問題もなく、２年生の８割以上（３６人、83.7%）が連帯感や達成感を感じていた。また、もてなされる側の満足度（4.9）は、実施前の期待度（4.5）より高く、９割以上（33 人、91.7%）が大変満足していた。詳細は、今年度の卒業研究報告書にまとめている。なお、次年度は、もてなす側の人数が 15 名減るため、調理班と配膳班の人員配置やタイムテーブルの見直しが必要となる。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．栄養士実力認定試験ガイドラインを再度確認し、不足部分は後期実施予定の対策講座（講義）で説明を加える。
２．調理班は１品担当から複数担当に変更し、配膳班は調理の下準備を担当した後、配膳業務に当たることとする。

平成３０年度　「島田　幸一郎」年次報告書

区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

部署名：幼児教育学科	職名：准教授

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．障がい児保育について、講義内容を精選し学生自身の主体的な学びの時間を広げる。

２．学生の進路希望に即した保育実習Ⅲの実習先の選定と実習指導に努める。

３．保育・教育現場における障がい児等の実情と「合理的配慮」の研究に取り組む。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．毎授業の導入時にテーマに沿った映像を視聴させ、その内容についてのグループ協議や発表をとおして障がいのある子どもの関わりについて考えさせる。授業で学んだことをA4プリント１枚に記入させ、授業後に提出させる。

２．保育実習Ⅲを希望した一人ひとりの学生の思いを重視し、学生の進路実現に沿った実習指導の内容展開と施設実習を具現化する。

３．学生が実習する幼稚園と保育所において、３歳児以上の担当クラスを対象に障がい児や気になる子どもの在籍状況や障がい区分、また支援ニーズに沿った特別な配慮の有無とその具体的内容について実習後の学生アンケートの調査結果をもとにして分析する。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ⓑ・Ｃ・Ｄ 」

前期に関しては、グループ協議やプリント提出によりある程度主体的な学習活動を行うことができた。しかし、後期については講義する内容が多くなりすぎ、アクティブ・ラーニングが十分にはできなかった。

２．自己評価「 Ｓ・Ⓐ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」

保育実習Ⅲは２名の学生が受講した。１名は児童養護施設への就職意思が明確で、実習指導や施設実習に意欲的取り組み進路実現に繋げることができた。１名は児童養護施設を希望していたが、意思が明確でなく実習状況も不十分で保育所に就職することになった。

３．自己評価「 Ｓ・Ⓐ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」

本年度、調査対象を実習で担当した３歳児以上のクラスに限定したことにより、障がい児及び気になる子どもの在籍状況や配慮の有無・内容について、保育所・幼稚園双方のデータを比較検討することができ、より明確な調査結果と考察を紀要に掲載することができた。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．ビデオ視聴、グループ協議・発表、講義・まとめを効率的に行いアクティブ・ラーニングを充実する。

２．学生の進路希望に即した保育実習Ⅲの実習先の選定と実習指導の一層の充実に努める。

３．保育・教育現場と連携し「合理的配慮」の実践研究に取り組む。

平成３０年度　「古賀　克彦」年次報告書

区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

部署名：栄養士コース	職名：講師

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. 栄養士養成施設協会が実施する栄養士実力認定試験において、担当科目である臨床栄養学と栄養教育指導論の成績向上
2. 学外実習Ⅰおよび学外実習Ⅱにおいて、実習先の評価向上

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. 栄養士実力認定試験において、担当科目である臨床栄養学と栄養教育指導論の成績向上
   - 毎回授業前に栄養士実力認定試験問題出題し、解説を実施
   - 授業において頻出分野の解説強化
   - 定期試験に栄養士実力認定試験を一部採用

2. 学外実習Ⅰおよび学外実習Ⅱにおいて、実習先の評価向上
   - 学外実習総合演習での指導強化
   - 学外実習Ⅰおよび学外実習Ⅱの直前指導および事後指導強化
   - 学外実習担当助手との連携強化

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ⓒ・Ｄ 」

平成 30 年度栄養士実力認定試験の結果、臨床栄養学、栄養指導論共に全国平均および短期大学平均の点数より低い結果となった。この理由として今まで行ってきた教え方や試験対策が、学生の変化についていけていないことが考えられる。これまでの過去問を解くタイプの対策で点数向上は限界に達していると思われた。

科目名	全国平均(正答率)	短大平均(正答率)	本学(正答率)
臨床栄養学（6 点満点）	3.3 点（55.3%）	2.9 点（48.9%）	2.7 点（44.4%）
栄養指導論（6 点満点）	4.8 点（80.4%）	4.6 点（76.8%）	4.4 点（73.4%）
全体（85 点満点）	50.2 点（59.1%）	45.7 点（53.7%）	44.8 点（52.7%）

２．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ⓑ・Ｃ・Ｄ 」

今年度の学外実習Ⅰ及び学外実習Ⅱの評価は以下のとおりとなった。学外実習Ⅰでは実習先からの評価はＡ評価が昨年度と比較して増加したが、学外実習ⅡではＡ評価は減少し、B、C 評価が増加した。学外実習ⅡでＢ評価が増加した理由として、学生の良い意味での緊張感が減少したためだと思われる。

	S	A	B	C
学外実習総合演習	8 名(19.05%)	23 名(54.76%)	10 名(23.81%)	1 名(2.38%)
学外実習Ⅰ	12 名(28.57%)	23 名(54.76%)	5 名(11.90%)	2 名(4.76%)
学外実習Ⅱ	10 名(23.81%)	13 名(30.95%)	10 名(23.81%)	9 名(21.43%)

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. 平成 30 年度は担当科目の得点を可能な限り全国平均に近づけるため、授業内容の見直しを行うと同時に、教えている内容の取捨選択を行い、重要な部分は確実に修得させていきたい。また過去問を用いた試験対策に合わせて、授業内容の理解度を上げていきたい。

2. 平成 30 年度の学外実習Ⅰ及び学外実習ⅡではＣ評価を減らしＡ評価を増やすため、学生にはなぜ学外実習を行うのか理由や目的納得するまで説明していきたい。また、学外実習直前指導を密に行えるように各教員を支援していきたい。

平成３０年度　「中村　浩美」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：幼児教育学科	職名：講師

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．ピアノ初心者及びそれに近い技術レベルの学生への対応と指導の在り方を研究し、進度や達成度を高める。
２．声や歌唱にコンプレックスを持っている学生、また声の出し方特にチェンジ音域の悩みや疑問を持ち自信がない学生への個別指導を行う。
３．保育者になる自覚と意識向上を常に持つための、学生が自ら積極的な取り組みを行える指導をする。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．緊張感をほぐし信頼関係を築きながら、個人の性格を早く把握してレベルに沿った指導した。試験前にはグループで発表会をしながら、それぞれの良い点・課題点を述べながらグループでも協力し合って上達するための方法も促すようにした。
２．声にも個性があって当たり前であることを気付かせ人前での声を出す羞恥心を少しずつ取り除くためのレッスンを試みた。声を出す事・歌う事に必要な要素を個々に見合った方法を工夫した。特にチェンジの声がそれぞれ違うため一音一音丁寧に直接体に触れながらの指導を強化した。
３．「先生」と言われる立場上人前に出ると言うことに対して何を意識してどう振舞うかを考えさせそれぞれに実践させた。学生オリジナルの手あそび歌をグループ活動で完成できるようポイント・アドバイスを行った。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・$\boxed{\text{A}}$・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
緊張感をほぐしながらピアノへの抵抗を少しずつ除去していく指導に神経をかなり使った。授業外でも教員学生間のスケジュールを検討しながらレッスンを行った。担当学生全員での発表会をして、それぞれの良い点・課題点の話し合いもできアクティブラーンニングにも繋がった。進度状況を優先するより基本的な技術を重点的に指導した事は、2年次での授業に活かされると考える。
２．自己評価「 Ｓ・$\boxed{\text{A}}$・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
自分の声や出し方にコンプレックスを持っている学生が多く、個人での練習ではその発声法が正しいかを確認できないためなるべく多くの学生への個人レッスンを行った。コンプレックスを個性として受入れて発声の基礎を確認しながら改善できた。子どもの歌を歌うためにはミックスボイスや地声からチェンジして自然にファルセットに移行できる声、地声のまま子どもの歌の音域を歌える声、またはファルセットでもぶれのない声が理想的ではあるが、地声で歌っていた声をどの音からファルセットに移行すれば良いのか、またファルセットを安定させるにはどうしたら良いのかが難しい事ではあるが、学生個人の癖を早く知ることができその指導方法を研究できた。
３．自己評価「 Ｓ・$\boxed{\text{A}}$・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
人の前に出て話す機会がない学生に、「先生」に成りきる授業に取り組んだことで、学生達も何が必要なのかを次第に感じるようになり消極的な学生もすこしずつ積極的に取り組めるようになってきた。オリジナルの手あそび歌はグループが一丸となり、基礎コードの復習から調や拍子の変化にもアドバイスを加える事で、その楽しみを感じながらの授業ができ発表も学生が達成感と喜びが持てた授業となった。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．研究室でのレッスンはマンツーマンで行うため、緊張している学生が殆どなので、緊張感を緩和させながらこれからも一層のの丁寧なレッスン指導をし、学生と共に達成感や成長を喜んでいきたい。
２．学生が自分の声に未知の発見や成長が少しずつでもあること、コンプレックスを解消できて楽しむ歌になる学生が増えるよう、今までの指導の在り方を生かしつつ学生によっての工夫を強化したい。
３．保育者になるための意識改革や実践に力をいれてきたが、授業内容や人の前にでることには何が大切かを理解しながらも消極的で実践でき難い学生への配慮や積極的な受講に早く取り組ませたい。
グループ活動のオリジナル手あそび歌では一人ひとりの達成感と喜びが感じられ、独自のアンケートでは100%の満足度を得られたため、次年度も学生の個性を見極めながら続ける予定である。

平成３０年度　「本村　弥寿子」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：幼児教育学科	職名：講師

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．　保育の基本を押さえつつ、現場での様々な保育のありように臨機応変に対応できる実践力を学生が身に付けられるよう、授業内容を工夫する。

２．他科目や学外実習の実態を捉え、学生の学びの連続性に配慮した授業内容の改善を図る。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．保育の基本や大切にすべきことを、事例を挙げて伝えることに加え、VTR も活用して視覚的に捉えられるようにする。

２．体験学習の取り組みをカリキュラム論の指導案作成に活用できるようにする。また、学外実習での学びが２年次後期の授業で活用できるようにする。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」

子どもの主体性を大切にした保育のあり方や取り組みについて、VTR で先進的な取り組みを見せることで刺激を受けた学生が約９割いた。自分の保育に取り入れたいという思いを持っており、そのような気持ちを抱いたこと自体が大きな成果であると捉えられる。

２．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」

「カリキュラム論」における指導案作成で、「体験学習」の報告書の振り返りに取り組ませることで、保育をシミュレーションしながら作成を進めることができた。作成上の約束の把握もできており、全員が授業内での指導案作成に問題なく取り組めた。

保育・教職実践演習では、実習での子どもとの関わりについてエピソード記録にまとめ、子どもの内面を読み取る取り組みを行った。体験学習で客観的に子どもの言動を記録に残したことを振り返る機会となり、一つではあるが全員が事例を書き上げることができ、現場に出てからの日々の記録をまとめる作業のよい練習になったと考える。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．常に子どもの主体性を大切にした保育を考える習慣を身に付けるには、保育者自身が保育のねらいを明確に持つことが必要である。ねらいと実践の関連性について理解を進めるような授業のあり方の模索が課題であると考える。

２．　一度の取り組みでは、事例の書き起こしができるようになったと言い切ることはできないと考える。実習を振りかえりながら短くとも事例を多く書き、考察を深める訓練をいかに授業に取り入れていくか考えたい。

平成３０年度　「荒木　正平」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：幼児教育学科	職名：講師
ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
１．幼児教育学科、介護福祉士コースにおける各担当授業の内容充実と、学習成果の向上 ２．幼児教育学科における実習指導体制の確立と内容の充実 ３．学会・研究会に向けて研究成果をまとめ、報告を行う	
ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。	
１．各科目、教科書を中心に講義形式で知識の定着を図りつつも、学生が興味を持って取り組めるよう工夫した。現場での支援を具体的に想定しつつ、実践力を身につけることが出来るよう、資料配付やDVDなどの教材を効果的に活用し、より能動的に考える授業となるよう、レポートなども課しながら授業を行った。 ２．他の担当教員とも連携しながら、指導内容を検討し充実を図ることができた。 ３．前年度に引き続き、幼児教育学科における社会的養護の授業における学生レポート分析の結果についても、簡単にまとめて授業研究の成果として論文化した。また、インクルーシブ教育・保育についても、共著にて論文として研究制覇を報告することができた。	
ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
１．自己評価「 Ｓ・$\boxed{\text{A}}$・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 昨年に引き続き、テーマごとに当事者の思いを聞けるよう映像資料を可能なかぎり用いることで、意欲的な取り組みにつなげることができた。演習形式での実践やロールプレイも取り入れたほか、時事課題についてのテーマ学習の実施により、学生自ら考える姿勢を促すことが出来た。 ２．自己評価「 Ｓ・$\boxed{\text{A}}$・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 実習依頼施設の状況把握のための情報収集や、受け入れ困難時の対応に向けた新規施設の開拓等もスムーズに行なうことが出来た。学内授業と実習の連動性を意識づけることもでき、より効果的な指導につなげられた。 ３．自己評価「 Ｓ・$\boxed{\text{A}}$・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 研究成果の報告については、社会的養護に関する成果の報告だけでなく、インクルーシブ教育・保育についてもまとめることが出来た。	
ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
１．担当授業の内容充実と、学習成果の向上 ２．実習指導体制の確立と実習指導内容の充実 ３．学会・研究会に向けて研究成果をまとめ、報告を行う	

平成３０年度　「福井　謙一郎」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：幼児教育学科	職名：講師
ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
１．　ICT を用いたアクティブラーニングの授業方法について模索する ２．　演習（RP 等）のより効果的な実践について研究する	
ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。	
１．　昨年同様、二つの視点からの演習撮影を行い、またそれを学生にフィードバックする時間を増やした。 ２．本年度は、全学生の RP を発表する形式ではなく、まずは家庭で起こりうる子育ての問題提起と改善のプレゼンテーションをグループで行わせ、代表が RP を行うこととした。	
ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
１．自己評価「 Ｓ・$\boxed{\text{A}}$・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 ICT 技術に関するアクティブラーニングは概ね良好で、その理由の一つに、大幅な教室環境の改善（241 教室）が挙げられる。これにより、ICT を用いる制限がなくなり、スムーズな授業展開ができるようになった。 ２．自己評価「 Ｓ・$\boxed{\text{A}}$・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 プレゼンテーションの時間を設けたことにより、単純な実践ではなく、問題の背景について学生が考える時間ができた。また、RP に関しては、映像を通したモニタリングにより、ただ観察するだけでなく、より詳細な面談の動きを把握することができたと考えられる。	
ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
１．2018 年度で蓄積した映像教材を用いた授業展開を試みる。 ２．より効果的な演習を展開する。	

平成３０年度　「光武　きよみ」年次報告書

区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

部署名：幼児教育学科　　職名：講師

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．資料にはない重要部分の書き取りができるよう、言葉かけを行う。

２．自ら考え、たくさんの人の前で発言できる機会を増やす。

３．今後も質問しやすい環境づくりを行う。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．基本はパワーポイントで授業を行うが、重要なことを話す際は、明確に伝えながら書き取りができるよう配慮した。発達障害などの項目は、当事者が書いた本や生活の様子のDVDを視聴し、その後は特徴的なポイントの振り返りを行いながら、授業を勧めた。

２．グループワークを通して発表する機会を設け、保育者を目指す者として人前で話す機会を多く作った。また演習では、人形１体に対して学生２名の割り振りを行い、共にアドバイスや協力しながら演習を進めていけるように配慮した。

３．授業終了時には必ず質問タイムを設け、不明なことはその日のうちに解決できるよう配慮した。理解が不十分な学生には、授業外で質問や演習指導を行う事を伝え、相談しやすい環境を作ってきた。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
最終的にはノートやプリントの提出を行い、授業のポイントがつかめているか確認を行ったところ、ほとんどの学生がきちんと書き取りはできていた。ただ、ノートの取り方が成績と結びついていなかったように感じる。

２．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
グループワーク等で発表する機会を設けたが、年度当初と比較すると年度末には堂々とした態度で発表ができるようになっている。但し、中には成長の幅が小さい学生も見られた。

３．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
この点については、質問を受け付けてその解答を全員で共有することもできた。さらに振り返り表の導入も始めており、その確認で個々の課題も明確になった。

学生による授業評価アンケートの結果

科　目　名	対象学生	学生の学習意欲	内容やレベル	授業目標の達成度	教員の教え方	全体的な満足度
子どもの保健Ⅱ	17Y	4.4	4.5	4.0	4.5	4.6
卒業研究	17Y	4.9	4.9	4.5	4.9	4.9
乳児保育	18Y	4.4	4.5	4.0	4.5	4.5
子どもの保健Ⅰ	18Y	4.4	4.5	4.0	4.5	4.5

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．ノートの取り方や授業の内容は、現在のままで継続するが、授業の理解度を高めるために、小テストを取り入れる。

２．課題を抱えた学生の話を傾聴して、どのような支援が必要かを考え行動する。

平成３０年度　「山本　尚史」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：幼児教育学科	職名：講師
ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
１．アクティブラーニング型授業の開発・実践 ２．長崎の保育史に関する教育・研究 ３．　保育教職実践演習のカリキュラム開発	
ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。	
１．　担当授業のすべてで、学生が自ら課題を設定し、調査・研究を進める取り組みを実施した ２．　長崎、東京において調査を実施した ３．本村教員と協力して、学生の主体的な学びを深める取り組みを実施した	
ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
１．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 　学生がよく学んでくれた。しかし、１００人規模の授業であったため、各学生の学びの深度に合わせた指導が難しかった。 ２．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 長崎、東京において調査を実施した。新たな知見の発見には至らなかったが、従来の枠組みを補強する資料を得ることができた。 ３．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 本村教員と協力して、学生の学びを深めることができたと考える。	
ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
１．学生規模に合わせた指導方法の研究 ２．　さらなる調査と現場とのネットワーク構築 ３．学生授業アンケートの振り返り	

平成３０年度　「玉記　雷太」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：栄養士コース	職名：講師

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．【教育】IT ツールの積極的活用による授業の効率化を図り、学生の知識・理解度の視える化に基づく、学生の進捗に合わせた柔軟な授業スタイルを実践する（教員側の授業の management）。

２．【教育】Evidence based education を基本とする教育実践（学生側の授業の management 支援）。

３．【研究】科研費の最終年度であるため、成果としての論文発表を行う（自身の業績 management）。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．Google form など即時性のある interactive tool を活用して、各授業の最後に、その授業の小テストを行い、即自的に結果の集計と解答・解説を実施する。さらに、その結果に基づいて授業のスピードや難易度を調整する。

２．実践１：中休み 5 分を設けて、学生の授業への集中力の維持に努める。実践２：時間と分量のミスマッチから、アクティブラーニングの実践しにくい科目である「公衆衛生」「栄養学」等に対しては、ICT 教材（ビデオやアニメーション）などを積極的に活用し、文字媒体をなるべく減らして、頭に残りやすい形で授業を実践する。

３．論文執筆を行い、年内に peer review 紙に 2 報発表する。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・$\boxed{\text{B}}$・Ｃ・Ｄ 」
　想定していた学生の IT リテラシーとの乖離から、前期は IT を積極的に使ったが、後期はアナログ方式に戻すこととした。しかし、多くの大学や専門学校が導入している現状から費用対効果は高く、その効率性から、全学的な IT システムの導入が期待され、最初は学生も教員も敷居が高いが、長い目で見て教員の労力や採点ミス（そもそも採点が不要）などが低減でき、ひいてはただでさえ忙しい教員が時間を作って学生に向き合える時間につながるであろう。

２．自己評価「 Ｓ・$\boxed{\text{A}}$・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
一般的な大学の教授方式である、パワポによる授業と、さらに視覚にうったえる映像を時事問題を絡めながら導入し、さらに効率よく栄養士実力試験の全項目をカバーできるように、配布資料に穴埋めを作成し、授業の鮮度と網羅性を担保したが、個人的なアンケートから、少数のできる学生には良いが、できない学生には、やはり範囲が広く、ついてくるのが大変だったようである。思い切って、全項目がカバーできなくとも、ターゲットを低くし、ペースを落としたり、自学自習を期待しないやり方が重要であろう。また、ActiveLearning として、学生が発表する形式を導入し、個人やチームのプレゼン能力の向上を図ったが、こちらも個人間の差が大きく、基礎力が圧倒的に低いため、何らかのエクストラな授業やインプットが必要であると考える。

３．自己評価「 $\boxed{\text{S}}$・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
　４本の論文が発表された。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１　退職のため省略

平成３０年度　「江頭　万里子」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：ビジネス・医療秘書コース	職名：特別専任講師

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．授業改善：学生の実践力の向上を図る。引き続き授業外での実践を行わせ、授業内容の定着を図る。

２．授業改善：講義科目においてアクティブラーニングを実施する。

３．学生支援：授業時など日常的に声かけをし、引き続き研究室を訪問しやすい環境づくりに努める。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．「マナー学」「秘書実務１」の授業において、コミュニケーションを行う上で身につけておくことが重要と筆者が考えるマナー５項目を指定し、学生に日常実践させ、毎回の授業時に自己評価と振り返りを課し、15 回の授業終了時まで続けさせた。全１年生対象。

２．「秘書概論」の授業時に、授業内容の定着を図ること、学生が主体的な学びを行うこと、まとめ・伝える力の育成を目的とし、学生が、他の学生に対して教員から指定された秘書検定の問題を模造紙の資料を使って解説し、他の学生からのコメントをもらい振り返りを行った。グループワークで実施。

３．疑問点などがあれば研究室を気軽に訪問するように日常的に声かけをし、訪問しやすい環境づくりに努めた。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 $\boxed{\text{S}}$・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」

身に付けておくべきマナー５項目の自己評価の全体の平均点は、実践前が４点満点で 2.70 点、実践後の平均点は、3.62 点、事前評価と事後評価の平均点の差は 0.92 点であり、有効回答者 140 人のうち-0.4 点であった１人を除く 139 人は自己評価が上がっていた。下がった１人は、事前評価を５項目満点としており、マナー学の授業でマナーを学びマナーの意識が向上し、自己評価の評価基準が上がったことも考えられる。

２．自己評価「 Ｓ・$\boxed{\text{A}}$・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」

学生は集中して発表（解説）の準備に取り組んでおり、他グループの発表時には、資料については、見易さ、内容の分かりやすさ、図やイラストの類使用の有効性、プレゼンテーションについては、理由が明確であること、話すスピード、指示棒の使い方、実際にやってみせるなどの表現の仕方、役割分担などについてのコメントをしており、準備、発表、振り返りの実践により主体的な学び、まとめ・伝える力を育成することに一定の効果があったものと思われる。授業内容の定着については、授業後のインタビューによれば、自分たちで調べて発表したので、理解が深まったとの声が多かった。

３．自己評価「 Ｓ・$\boxed{\text{A}}$・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」

学生の訪問目的は、授業内容に関する質問及び就職活動についての相談がほとんどであった。履歴書に書くことが何も無いと白紙の履歴書を持って相談に来た学生には、じっくりと話しを聴き、本人の持っているものを引き出す手伝いをし、就職も卒業前に決めることができた。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．　授業改善：授業内容の定着を図る授業法の検討

２．研究活動　：学生の言葉遣いに対する意識と知識の調査を行う

３．学生支援　：授業時など日常的に声かけをし、引き続き研究室を訪問しやすい環境づくりに努める。

平成３０年度　「植木　明子」年次報告書

区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

部署名：介護福祉士コース	職名：特別専任講師　　植木　明子

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．　こころとからだのしくみ関連の基本事項が全員理解できる。

２．全授業においてアクティブラーニングを展開させ、学生が意欲的に授業に取り組める。

３．課題を抱えた学生に傾聴の姿勢で関わる。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．こころとしくみ関連授業のなかでも担当するこころとからだのしくみ、発達と老化の理解、障害の理解、医療的ケアに関する授業において国家試験問題に準拠した問題をする。授業時間のない発達と老化の理解の問題も取りくめるようにこころとからだのしくみの中で実施した。夏期講習・介護総合演習の時間も使いこころとからだのしくみ分野の問題に取り組ませた。

２．基本問題の理解ができるように、学生全員に他の学生に教える課題を課した。具体的には、担当学生と相談し、理解させたい国家試験問題をえらび、そのテーマについての５分間の学生による解説を実施してもらい、つづけて国家試験問題を解くことを行った。また、できるだけ、話し合い学習法の要素を各授業の中に取り入れ、能動的な学習を増やした。（危機管理のトレーニングの教材を利用したりして話し合いが進むよう設定した。）

３．問題でわからないところがあったらいつでも聞きに来るようには声をかけた。また、自己の課題を抱えている学生へもそれとなく声をかけるようにし、できるだけ全員の学生に同じように授業以外でも声をかけるよう努めた。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「　Ｓ・Ａ・$\boxed{\text{B}}$・Ｃ・Ｄ　」

国家試験結果は２名が不合格となった。特に他の学生に比べ10～40%科目での得点が低くかった。こころとからだのしくみ関連の問題は後半であるが、前半に比べ後半の得点率が著しく低く、他の学生に比べ10点以上の開きがあった。こころとからだのしくみに関しては、２名の学生は読解力が低く、内容の理解まで十分にはさせることができなかった。ほかの学生に関しては、低かった学生の理解度はある程度は底上げできたと考えられる。国家試験に落ちた学生に関しては、問題を丸暗記するといったことは繰り返していたようであるが、個別に意味が分からないところを聞きに来るように言っても聞きに来ることはほとんどなかった。教員の関わりとして初期の段階でわからないところをもっと一緒に取り組めるような関わりが必要であったと考えられる。また、問題の傾向もかわってきており、細かい言葉の意味を伝えらていなかった（正解率の低い問題は問題69、70、73、92で正解率は10～20%台、）

２．自己評価「　Ｓ・Ａ・$\boxed{\text{B}}$・Ｃ・Ｄ　」

「国家試験問題の解説&試験問題」の取り組み自体については、学生全員がプレゼンテーションを実施した。小テストの解答率がさらに悪かった「嚥下」に関する問題に関しては、小グループでさらにお互いに理解できるよう解説させあった。また、終末期の絵本を題材としたグループでの読み合わせは、学生の興味関心をあげ学生の意見交換の機会になった。ほかの授業でも話し合い学習の機会を増やし、教材研究を進める必要がある。

３．自己評価「　Ｓ・Ａ・$\boxed{\text{B}}$・Ｃ・Ｄ　」

今年度は、学生とのトラブルはなく、学生間の関わりでのもめごとはなかった。全員の教員が揃っている日は限られたが、ほかの教員と連携を心がけた。またクラスの親睦を図れる様、弥生祭での学生への協力や、国家試験後の親睦会の実施もおこなった。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．低学力の学生に対する、個別指導は早めに始め、どこでつまずいているかを本人にもっと表現させ、つまずきに早く気付けるようにする。あわせて訂正ノートでの学生の自己省察の強化

２．アクティブラーニングの強化

平成３０年度　「田川　千秋」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：介護福祉士コース	職名：特別専任講師
ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
１．卒業年度を迎え専門科目の知識、技術の習得の確認をすることにより、国家試験対策に結びつける。 そのために考える力と応用力が求められる。介護過程、生活支援技術には習得すべき専門知識の幅広い知識が求めれらるため前期・後期の授業を同時に進めるなどの工夫とノートの整理、根拠のある生活支援技術のマニュアルつくりとそのチェック、専門科目を統合した知識と技術の習得の更なる確認と徹底を図る	
ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。	
１．　知識と技術の習得についてノート作りと技術試験することを１年次より伝え、模範マニュアルの一部を示した。提出期限厳守を伝え、個別に指導した。 ２．　特に事例研究作成については参考文献についてアドバイスし、図書館利用を勧め、マニュアル作成については参考文献の記載を確認した。 ３．　ノートについて必要項目、留意点を示し再三チェックし、訂正を求めた。	
ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
１．自己評価「 Ｓ・Ａ・$\boxed{\text{B}}$・Ｃ・Ｄ 」 入学年次から、実技試験を実施したが真剣に取り組む必要性・重要性を伝えられず、期限厳守についてもその重要性や責任・義務があることを伝えられなかった。 ２．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・$\boxed{\text{C}}$・Ｄ 」 図書館で参考文献検索をして終わってしまう、携帯を使いネット検索利用が目立った。 ３．自己評価「 Ｓ・Ａ・$\boxed{\text{B}}$・Ｃ・Ｄ 」 必要項目の記載がないもの、留意点など再三のチェックにより各自で工夫が見られるようになり、分かりやすく、学生自身が就職してから役に立つと言うようになる。	
ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
１．　知識（根拠）のある介護技術習得のため、２年次の時間数を増やす。 ２．参考文献を読み、文言の意味を理解させるため、福祉に関する映画・アニメなど視聴覚教材を利用し、その内容を要約する。 ３．一人の工夫を模倣することで他の学生がもっと工夫していったことから、良いと思われる事例に関して了解を得て公開し、工夫する楽しみを共有する。	

平成３０年度　「昆　正子」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：幼児教育学科	職名：助教
ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
１．短大生の一般教養科目としての美術鑑賞活動について、教員と学生が双方向的、共同的に意味を生成し合うことを促すような指導形態を心がける。 ２．実習で活かせる製作物の紹介について、内容を充実させる。	
ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。	
１．写真・映像を用いて学生と作品について対話しながら作品・作者の理解を深めていくことを心がけた。また紙工作・アートセラピー体験等の実技を取り入れて、学習内容の興味・理解を促すようにした。 ２．実習先で「自己紹介絵本」を実践できた学生による園での発表の再現とビデオ記録、ビデオの分析および学生の感想から、養成校内での発表やシラバス分析からは読み取れない学生の学びの実態を考察する。	
ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
１．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 学生の感想からは興味が持てた、面白かった、もしくは作るのが楽しくなった等の意見があり、また質問についても感想用紙上で対応する仕組みがとれ、意志疎通を図る仕組みはできた。作品についての捉え違い等が感想から見られた学生もいたが、次回の授業の冒頭で前時の振返りとして確認・意識の修正等対応できる体制はとれた。 ２．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 取り組み内容、学生の反応についての詳細は平成 30 年度本学紀要に掲載。学生からは、実践を通し造形の知識・技術やコミュニケーション力の向上、教材研究と保育実践への意欲の向上が見られ、実習を控えた学生にとって有意義な実践となることが確認できた。また、短時間のミニバージョンであっても十分創意工夫できることが確かめられた。	
ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
１．「絵本を介した保育造形指導」の実践成果についても考察を加え、一斉保育での造形指導における学生の実践力向上をはかる。 ２．保育者も扱える画材を中心とした作品制作に取り組む。	

平成３０年度　「蛯原　正貴」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：幼児教育学科	職名：助教

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．模擬保育の重要性、必要性等に関して説明を詳しく行い、模擬保育行った際の指導案に関してもフィードバックを行う。
２．技能テストに関して、技能習得のポイントを口頭で説明できるよう要点をまとめ、レポート等にまとめさせる。
３．アクティブラーニング形式の授業回数を増やし、学びを実践へとつなげられる授業内容とする。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．「運動遊びの実践」及び「保育内容『健康』」の授業を中心として、模擬保育の重要性、必要性に関して詳細に説明を行うことができ、アクティブラーニングも充分に取り入れることが出来た。
２．　技能テストの際に、「コツ」を学生どうしで話し合い、それぞれの感じや方法を共有することで、技能の向上に繋げることが出来た。
３．担当授業全体を通して、学生が主体的に活動できる環境を設定することが出来た。そのため、学生の授業満足度も高く、意欲的に授業に取り組ませることが出来た。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ⓐ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」

模擬保育の重要性等については詳細な説明を行うことができたが、指導案等のフィードバックに関しては不十分であったと感じる。指導案の共有はできていたものの、その内容に関して意見交換等の考察が出来ていれば、さらに内容理解が深まったのではないかと考えられた。

２．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ⓑ・Ｃ・Ｄ 」

技能力向上に特化してしまい、自身で修得した技能について説明を行う時間が不十分であったと感じる。実際の現場では、自身の技能を基に指導を行う場面が増えるため、技能修得につながる「コツ」の共有に、さらに時間を割くことが必要と考えられた。

３．自己評価「 Ｓ・Ⓐ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」

アクティブラーニングとして、遠足や園外保育等の実践をすることができ、より現場に近い取り組みを行うことができた。計画、実践までは問題なく進めることが出来たため、今後は振り返りに重点を置き、新たな課題を見つけるところまで取り組みたい。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．　模擬保育における指導案のフィードバックを行うために、フィードバックに特化した時間を確保する必要がある。そのため、シラバスの授業計画を綿密に立て、充分な時間が確保できるような全体計画を作成していきたい。
２．技能テスト後の振り返りの時間及び技能テストにいたるまでの記録をとらせ、自身の技能が向上していく過程を学習へと繋げていきたい。そのため、技能練習時点から自身の練習法や感覚などを書き込めるようなシートを作成し、活用してみたいと思う。
３．アクティブラーニングに関しては問題なく進めることが出来たため、そのフィードバックについての時間を確保する必要がある。そのため、計画、実践、振り返りを１セットとした学習クールを構築したい。

平成３０年度　「太田　智子」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：栄養士コース	職名：実習助手
ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
１．　調理実習の効率化を図る。。 ２．業務の効率化を図る。	
ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。	
１．調理工程の細分化とタイムスケジュールの立案および学生の時間管理に対する意識を高める。 ２．実習助手間における学生状況の把握や書類におけるひな形の作成を行なう。	
ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
１．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 自分自身が考えたタイムスケジュールと学生の能力に差が生じ、計画通りに進めることができなかった。 ２．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 授業後や学生との会話から、学生の状況をその都度報告し合うことができた。 ９割程度書類のひな形を作成した。	
ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
１．作業のどこに時間がかかっているのか見極め、適切な助言や指導を行なう。 ２．全学生同じようにコミュニケーションを取ることは大変難しいので、個人の特性に応じて積極的に働きかけを行なう。	

平成３０年度　「桑原　真美」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：栄養士コース	職名：実習助手
ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
１．実習助手間での情報共有の徹底 ２．　授業およびその他担当業務（栄養士実力認定試験、管理栄養士国家試験受験対策講座、キャリア支援等）の実施についての記録を確実に残し、担当者が変更になっても業務がスムーズにできるようにする。	
ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。	
１．　日々の業務の中で気がかりな点等は、専任教員への報告相談だけでなく、必ず助手室でも共有をする。 ２．　授業での準備物および試薬の調製方法、授業内で急遽変更があった事項等を事細かに記録し、誰が見ても理解できるような記録を残す。また、その他の業務も同様に記録を行なう。	
ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
１．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 助手室内での情報の共有はほぼ徹底できたが、授業内での学生の問題など細かい点については報告し忘れていることもあった。報告し忘れている部分に関しては、小さい事項でであってもそれが後々の問題に発展する事もあるため、必ず報告をしたほうがよいと感じた。 ２．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 業務内容の流れ等を記載したファイルを作成することができた。しかし、他者がそれを見て業務を行った場合、不明な点も多々あると考えられる。そういった細かい部分に関しては、今後、追加して記載していく必要がある。	
ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
１．問題点はその大小に関わらずメモを取り、必ず他教員、助手と共有する。 ２．　業務内容の流れを記載したファイルを助手室の共有フォルダに残し、担当者が変更点および追加点を記載する。また、今後も自身が追加するべき事項は随時追加を行う。	

平成３０年度　「桑原　倫子」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：栄養士コース	職名：実習助手
ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
１．　昨年度の実習科目の内容を踏まえ、より細やかな準備を行う。 ２．実習助手間での学生情報の共有を徹底する。	
ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。	
１．　昨年度、準備中や授業中に気づいた改善点を整理し、授業に活かす。 ２．学生について、些細な事でも変化があれば、情報を報告し合う。	
ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
１．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 気づきを整理して授業に臨めたが、勤務１年目とは別の視点での改善点が浮き彫りにされた。 ２．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 他助手室２名が、意見を交換しやすい環境を整えてくれたせいもあり、情報の共有は上手く行えていた。	
ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
１．業務を経験すればするほど見えてくる改善点を見逃さず、授業中の細かい観察と記録を続けていく。 ２．引き続き、助手間での学生の情報共有を徹底し、意見交換しやすい環境づくりにも取り組む。	

平成３０年度　「前田　功」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・ 事務局等 ・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：事務局	職名：事務局長
ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
１．円滑な事務局運営に向けた各取組の推進 ２．　教務システムの構築完成 ３．ＳＤ研修の計画的実施	
ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。	
１．　教育研究活性化設備整備費補助金交付手続、幼教再課程認定申請、教育訓練給付制度手続等の円滑な事務手続きの実施 ２．システム開発先と連携を強化し、常に情報交換等を行いシステムの構築完成をめざす ３．計画的に課題に向けたＳＤ研修会を実施し、個々の事務職員のレベルアップにつなげる。	
ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
１．自己評価「 Ｓ・A・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 教育研究活性化設備整備費補助金については、今年度より交付補助金に一本化され、この名称での補助金はない。幼教再課程認定申請、教育訓練給付制度手続等については円滑に事務手続きが行われた。 ２．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・C・Ｄ 」 システム開発先のノウハウに問題があったが、少しずつ本学の修正事項等に対応してもらっているように感じられる。 ３．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・D 」 昨年度に比較すると、育休職員も職場復帰し、人数的には本来の体制が確保されてきている。しかし、個々の仕事をこなすのに手いっぱいとなっており、計画的な課題克服のためのＳＤ研修会の実施にまでは至らなかった。	
ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
１．次年度は自己点検評価報告書を作成し、短期大学基準協会の認証評価を受ける必要があるため、事務部門におけるしっかりした対応をしていくとともに、さらに事務手続きの効率化や正確化を期していく。 ２．システム構築のスピードを上げて本格的な運用のできる体制を整えていく。 ３．事務職員のレベル向上が喫緊の課題と言えるので、ＳＤ研修会の強化並びに一人二役体制の構築をめざす。	

平成３０年度　「髙井　達司」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：事務局	職名：入試広報室長
ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
１．過去の経験を活かし、課題に直面した職員へのサポートを積極的に行う。 ２．高等学校（進路指導部）への情報提供を緊密に行い、信頼関係を構築する。 ３．入学生の現況把握に可能な限り努める。	
ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。	
１．事務局職員への目配りを心がけるとともに、質問には丁寧に対応した。 ２．特に長崎女子高校及び向陽高校進路指導部との情報共有を綿密に行った。 ３．担当する高等学校の状況把握に極力努め、学生の動向を追跡した。	
ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
１．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 自身の仕事も手探りのなか右往左往したので、積極的には向き合うことが出来ず最小限の対応に終わった。 ２．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 長崎女子高校８回、向陽高校へは５回の訪問を果たす。特に向陽高校においては、進路指導部の信頼を得たことで志願者の大幅増加に繋がった。 ３．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 長崎女子高出身学生の動向には常に関心を払い、進路指導部との間で学生の情報を共有したが、休退学抑制には繋がらなかった。	
ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
１．何れの部署に対しても、的確なサポートが可能となるよう改めて関係法令を再確認したい。 ２．漸減傾向にある長崎女子高への対応を、進路部長や学年主任を中心に懇切丁寧に行うとともに、その他全ての職員に対する本学の情報提供を並行して実施したい。 ３．学生との接点が少ないことから、学生の状況把握が乏しい。特に高校在籍時、進学ガイダンス等で大きく関わってきた学生への対応は常に意識していきたい。	

平成３０年度　「原田　実輝」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・ 事務局等 ・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：キャリア支援センター	職名：キャリア支援センター長

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．学生が利用しやすいキャリア支援センターの環境整備を行う。

２．学生が相談しやすい雰囲気を作り、個々に合ったタイミングで支援を行う。

３．学務システムの運用による業務の効率化を図る。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．　本人の方向性が定まらず、何をしたら良いのかわからない状態で訪れる学生の為に、過去の先輩の就職先や活動時期、活動方法、過去の求人等、学生が知りたいと思うデータを各学科・コース別にまとめ、自由に閲覧できるように作成した。

２．　一人ひとりの学生のデータを頭に入れ、話を聞き、よく観察して、その学生が必要とするタイミングで的確なアドバイスができるよう心がけた。

３．　システム開発当初から業務上の問題点は伝えてあるが、キャリア関係まで手が回らない状況のようで、システム開発自体が遅れ気味であった。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ⓑ・Ｃ・Ｄ 」

後期に入り繁忙期になると、求人票の掲示やファイリングすら追いつかない状況であった。
幼児教育学科の求人は締切が何度も延長され、掲示した求人票を外す事が出来ず、後半は掲示スペースがない状態となった。あまりにも掲示が多すぎるとかえって求人が埋もれて見つけにくい状況となり、学生も掲示板を見るより、学科・コースより配信される求人メールを見てセンターを訪れるケースが多かった。

２．自己評価「 Ｓ・Ⓐ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」

学生をよく観察し、見守ったり、励ましたり、概ねその学生が必要とするタイミングで支援できたのではないかと思う。

３．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ⓑ・Ｃ・Ｄ 」

証明書に関しては学務システムにより容易に発行できるようになった。
しかし、「就職状況総合分析」は学生がきちんと内定届を記入し提出して各項目の入力が完璧でないと完成せず、提出の遅れや、未記入部分をひとつひとつチェックするのに時間がかかってしまう。
「進路内定届」自体を学生に直接入力させるよう開発を依頼しているが、1年経っても何の進展も得られていない。その他微調整が必要な部分がいくつかあり、改善を依頼し業務の効率化を図る。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．他部署との連携を深め学生の情報を共有し、満足度を上げる、きめこまやかな学生支援を行う。

２．認証評価訪問調査に向けて、キャリア支援センター内の環境整備を行う。

平成３０年度　「宮﨑　伸一郎」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・ 事務局等 ・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：事務局	職名：事務（会計）
ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
１．会計業務の遂行および効率化 ・学外実習、実験実習費など担当する業務の更なる理解、それに伴う処理等の効率化に努める。 ２．事務室内の連携 ・事務職員の減員、事務局長新任にによる事務室内での連携、協力に心掛ける。 ３．事務職員の体調管理	
ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。	
１．学外実習の担当者との事前確認を行うことで、遅延をなくす。 ２．事務職員の減員をカバーするため協力体制を確立する。 ３．各自調整を行う。	
ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
１．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 現在担当している会計業務については、２年目であることもあってスムーズかつ合理的に処理を行えたと感じている。 ２．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 事務職員の減員による業務遂行について大枠では特に問題はなかったと思われるが、人手不足により手が回らない業務が見られる。また、事務局内の連絡・報告の不徹底により共通理解がされていない。 ３．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」	
ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
１．２．３ともに引き続き、実行・検証を行い、また事務局内における不具合の解消に努め、よりパフォーマンスを上げれるよう心掛けていく。	

平成３０年度　「一瀬　章子」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・ 事務局等 ・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：事務局	職名：事務（会計）
ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
１．　会計業務（通常業務等）について、知識を深めるとともに、マニュアル作成に取り組む ２．会計業務（監査・決算）について、求められる資料作成について作業の簡略化、データ化に取り組む ３．事務局内業務（学校行事を含む）について、事前準備を入念にする	
ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。	
１．年間データとして必要な資料は別ファイルを作成した この他特に必要な資料はタグをつけるなど資料整理に努めた ２．日頃より監査･決算にかかる資料収集を行った ３．2 週間から１ヵ月程前に直近の手控え資料の見直しを行った	
ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
１．自己評価「 Ｓ・Ⓐ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 支払いの種類(10 日払･23 日払)､引落しがわかるように工夫する 支払等、ファイル(綴り)のみで処理内容がわかるような資料作りに取り組む ２．自己評価「 Ｓ・Ⓐ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 会計ソフトから出せる資料がわかりやすくなったことにより､作成する時間を抑えることができた ３．自己評価「 Ｓ・Ⓐ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 繁忙期に重なることが多いため、通常業務を先に行うなど優先順位を考え取り組んだ	
ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
１．会計業務については､これまでの業務の重要度を理解した上での新しい体系づくりに取り組む ２．パソコンのスキルアップを図る ３．事務局内業務については､本来の業務理解と実行、業務共有ができるような資料作成に取り組む	

平成３０年度　「森口　和美」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・ 事務局等 ・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：事務局	職名：事務（教務）
ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
１．　学務システムを活用し、改善点等模索しより活用しやすいシステムの変更改善に努める ２．他部署との情報共有を行い、迅速かつ効率的に業務を遂行する	
ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。	
１．実際学務システムを活用し、改善点や要望等を業者と連携を取りながら、より活用しやすいよう変更改善に取り組んだ。 ２．他部署との連携を取りながら、情報共有を行い、業務を遂行するように心がけた。	
ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
１．自己評価「 S ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 課内や教員からの要望や改善点を業者へ伝え、変更改善を実施できた。まだまだ、システムの円滑な活用については改善等必要であるとも同時に感じた。 ２．自己評価「 Ｓ・A ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 年度途中からの復職で、課内の仕事で精いっぱいになることもあり、連携を取りながらの迅速かつ効率的な業務の遂行は難しかった。学務システムが導入されたこともあり、情報共有という部分だけは、以前よりは格段に効率的になったかと思う。	
ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
１．　学務システムをよりよく活用するために、継続的に見直し改善変更に努める。 ２．　課内の仕事だけでなく、他部署の仕事のサポートを行い、事務局内のフォローアップ体制の強化に努める。他部署の人が休みでも業務が滞りなく円滑に遂行できるよう、連携するよう努める。	

平成３０年度　「林田　翔太郎」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・ 事務局等 ・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：事務局	職名：事務（教務）
ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
１．今年度１年間の業務経験を参考に、よりスムーズな業務遂行を目指す。 ２．　他部署への業務分担依頼も視野に入れつつ業務を遂行する。 ３．　学務システム活用について業者との窓口となり更なるシステムの改善と業務の効率化を図る。	
ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。	
１．業務分担者と相談しながら分担内容を取り決めて業務に取り組んだ。 ２．教務課内で処理できない作業等が発生した場合は応援を要請する。 ３．学務システム使用時の気づき等を基に業者に要望を伝え、改善に導く。	
ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
１．自己評価「 Ｓ・ A ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 各種業務の担当の棲み分けができ、昨年度より比較的順調に業務を遂行することができたのではないかと考える。 ２．自己評価「 S ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 教務課内での業務分担を比較的順調に行うことができたため、結果として他の課の職員への分担依頼はほぼ必要ない形となった。教員免許状更新講習の受付業務については、受講者増加のため、他の課の職員に応援をお願いし、滞りなく業務を遂行することができたと考える。 ３．自己評価「 S ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 学務システムを使用する上で必要だと感じた点や、教員からの要望は逐一業者への依頼を行うことができた。	
ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
１．　他の課の業務の担当を視野に入れ、事務局内の業務への理解を広げる。 ２．効率的に業務遂行が可能となるよう事務処理方法等を見直す。 ３．学務システムについて、未対応分も含め、要望の整理と優先順位を決めながら改善を進める。	

平成３０年度　「櫻井　縁」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・ 事務局等 ・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：事務局	職名：事務（学生）
ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
１．奨学金事務の知識を増やし、関連業務を円滑にかつ正確に行う ２．これまでの業務のやり方を見直し、エクセル等によるツール作成や他大学との情報共有を通して、業務の効率化を図る	
ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。	
１．奨学金関係の説明会に参加し、業務知識を付ける。奨学金関係の相談等にも積極的に関わるようにする。 ２．昨年までに行った事務作業の中で、なかなか効率の上がらなかったものを洗い出し、編集しやすいファイルを作成する。	
ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
１．自己評価「 Ｓ・A・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 奨学金に関しての知識も増え、JSAA やスカラ AC などのツールも使いこなせるようになった。 学生や教員からの奨学金に関する相談事項に関しては、的確に回答することができるようになってきた。 ２．自己評価「 Ｓ・Ａ・B・Ｃ・Ｄ 」 奨学金に関してのファイル等の整理を行い、目的の情報を探しやすい環境に変えることができた。 エクセル等を使って、より簡便化したツールの作成ができ、業務の効率化ができた。	
ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
１．　奨学金に関して、次年度からはシステム面で大きな変更があるので、ミスをしないように、処理完了前の確認作業を重点的に行うようにする。 ２．業務をやっているうちに、新たに煩雑な業務が出てきたりするので、そのような問題に対して逐一対応していくようにしたい。次年度に困らないように一つ一つの仕事を丁寧に行い、業務情報を残すようにしたい。	

平成３０年度　「藤田　紫織」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・ 事務局等 ・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：事務局	職名：事務（入試広報）

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．チェックリストを作成し、繁忙期における業務の効率化を図る。

２．学生募集に係る最新情報を収集し、資料として整理する。SNS を活用し、より充実した広報活動、募集活動を行う。

３．優先順位の高い業務から、迅速かつ効率的に処理するように努める。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．昨年度のデータを参考にスケジュールを確認し、早くから準備に取り掛かる。

２．HP の新着情報の更新頻度を多くする。インスタグラムを開設する。

３．予測できる業務は早めに準備し業務に遅れがでないよう取り組む。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
　早くから取り組むことはできたが、これまで入試広報室職員と庶務課職員の２名で行っていた業務を１人で行わなければいけなかったり、繁忙期が被ったりと限界があった。次年度は他部署の職員の協力を得たい。

２．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
　各学科コースの協力を得てインスタグラムを開設し運営することができた。しかし、HP の更新頻度は時期によってバラつきがあった。今後は高校生が本学をチェックするツールとしてインスタグラムを活用し、そこから HP に誘導するようにしていきたい。

３．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
　行事の案内状やお礼状など早くから準備し、例年通り行うことができたが、発送時期が遅いものもあるので次年度は時期を相談しながら進める。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．SNS を上手く利用した広報活動、募集活動を行う。

２．HP の内容見直し、新着情報の更新頻度をあげる。

３．自分の業務内容だけでなく、他部署の業務も把握しサポートを行い、他部署の人が休みでも対応できるよう事務局内の連携に努める。

平成３０年度　「伊藤　理恵子」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・ 事務局等 ・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：図書館	職名：司書
ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
１．　学生･教職員の読書活動および学習(実習)活動の支援 ２．　学生･教職員の図書館利用促進	
ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。	
１．　前後期各１回ずつ学生及び教職員に直接書店へ出向いて選書してもらう、学生選定図書の実施。学生が実際に読みたい本、教員が学生に薦める本を購入し、ＰＯＰを書いてもらい展示した。 介護福祉コースの教員・学生とともに、障がい者施設や認知症カフェ・高齢者サロンなどでお話会を開催した。(8/20・8/22・2/20・3/27　計4回) ２．　長崎県図書館協議会　ライブラリーラバーズ合同企画　参加型ゲームイベントの実施。10/16～11/12 まで。 参加者 28 名 学内電子掲示板及び図書館ブログの毎月の更新。イベント告知や新着推薦図書などの情報を提供。 季節ごとのテーマに沿った図書の展示・館内の飾りつけ。 学生がゆっくりくつろぎ、気軽に本を読める環境作りとして、キャンプ用テントを設置。テント内も飾り付けたり、本を置いたりして、楽しめる雰囲気を作った。	
ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
１．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 学生選定図書で購入した本が貸し出されることも多く、学生・教職員の読書活動や学習活動の支援につながっていると思う。引き続き、実施していきたい。 今年度から地域に出てお話会を実施している。高齢者や障がいのある子どもに喜んでもらえたと思う。 ２．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 参加型ゲームイベントの開催や、季節に合わせた館内の飾りつけやテーマに沿った図書の展示・キャンプ用テントの設置などはおおむね好評と感じる。ただし、学生数の減少や本離れの影響か、なかなか来館者数増加に結びついていない。利用者サービス改善のため、古い図書の除籍や介護福祉士コース関連の蔵書・雑誌の見直しなども含め、館内整備をしていきたい。	
ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
１．教員の先生方と連携し、授業で図書館を利用していただいたり、学習や実習活動に役立つ図書の情報提供情報交換を行い、充実した選書へつなげる。 ２．学生・教員と連携して、地域貢献活動として読み聞かせボランティアを行い、読書活動の楽しさを伝える。 ３．図書館利用拡大のため、引き続き逐次イベントを開催する。学生・教職員に利用してもらいやすい図書館にするため、古い図書の廃棄など館内整備に努める。	

平成３０年度　「海保　佐知子」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・ 事務局等 ・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：寮	職名：寮監長
ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
１．　寮生の共同生活に於ける基本的な規則の重要性・自治能力の育成。 ２．役員に於けるリーダーシップの育成。 ３．短大・高校・職員間の情報共有の徹底	
ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。	
２．　寮務委員と連携を図りながら共同生活の振り返りをさせ、自治能力の育成の為のミーティングを実施。 規則違反を起こした寮生に対しては個別に学生部長・寮務委員長に指導を依頼した。、 ２．　月１回の代表者会議を寮務委員長出席下実施。特に寮長・副寮長については個別に学生部長・寮務委員長に指導を依頼した。 ３．短大・高校の寮務委員との会議を実施。情報交換を図った。	
ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
１．自己評価「 Ｓ・ A ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 指導を受けた寮生については少しづつではあるが成長が見られた。 ２．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・ C ・Ｄ 」 指導を受けた事に因って少しは理解はできたようだが、日常の自分の事で精一杯の感があり、長として成長させる事ができなかった。 ３．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・ C ・Ｄ 」 合同の寮務委員会が日程の調整がとれないで２回しか開催する事が出来なかった事から事案が発生した件についてきちんとした報告が徹底されなかった。	
ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
１．　寮生にとっての共同生活に於ける基本的な規則の重要性・自治能力の育成 ２．役員のリーダーシップの育成。 ３．短大・高校・職員間の情報共有の徹底。	

平成３０年度　「海保　都惠子」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・ 事務局等 ・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：寮	職名：副寮監

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．　寮生の環境美化に対する意識つけの育成。

２．寮生の共同生活に於ける規則遵守の意識の育成。

３．日常生活に於いて環境に馴染めない寮生を早目に把握して積極的にコミュニケ―ションを図る。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

３．　日常の生活に於いて、不可欠な掃除の徹底ができるよう指導サポートした。

２．共同生活をとおし、規則遵守の重要さを認識できるよう、違反者が出ると軽度の違反であれば、罰当を科し違反が度重なる寮生については、学生部長・寮務委員長に指導を依頼した。

３．入寮時に把握。問題がある寮生に対しては、逐一積極的に声掛けをして、相談しやすいよう常にコミュニケ―ションを図った。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
家庭環境の違いから、きちんとできる・いい加減・しないの３パターンがあり、徹底できなかった。
２年間をとおし根気強い指導が必要と感じた。

２．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
指導を受けた寮生は少しの改善は見られるが、違反をする寮生は年度末には大体顔ぶれが決まっていた。
やはり、これも根気強い指導が必要と感じられた。

３．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
今年の入寮生は問題を抱えた寮生が多く対応に大変苦慮した。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．　寮生の環境美化に対する意識づけの育成。

２．寮生の共同生活に於ける規則遵守の重要性の意識づけの育成。

３．　コミュニケ―ションをとるのが苦手な寮生を把握して相談しやすいよう積極的な働きかけの実施。

平成３０年度　「大場　恵美」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・ 事務局等 ・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：寮	職名：副寮監
ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
１．　寮生への支援の強化 ２．他の職員・先生方との連携を正確にする。 ３．業務を円滑に出来るようデータ・ファイルの管理の整備	
ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。	
１.寮生の支援については、寮のルールを元に指導と、学生部長や寮務委員会の先生方の面談等の指導を元に指導をしてもらって、寮生が自らルールを守って行くようにして行く。 ２．引継書、メモ等に記録を残し、また、口頭でも連絡をする。 ３．寮務の書類はファイルをわかりやすいよう、作成し、ファイル漏れがないようにする。	
ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
１．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 ２年生に中の悪いグループがあり、公平に接しないといけないので、かなり苦慮した。 ２．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 引継書には出来るだけ、詳しく記入し、口頭でも伝えるようにしているが、年度末がどうしても、引継書が詳細にかけなかった。 ３．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 ファイル分けは分かりやすく、分類出来たが、年度末のファイルが遅れがちだった。	
ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
１．　寮生の個性に合わせて、対応をして行きたいと思う。 ２．年度初めと年度末がどうしても、連絡が簡素になるので、早くから段取り等、決めておきたい。 ３．　年度末等、多忙な時期にも、すぐにファイルが出来るよう、準備をしておきたい。	

平成３０年度

「研究活動報告書」

平成26年度～30年度（過去5年間） 専任教員の研究活動状況表

氏名	職位	研究業績				国際的活動の有無	社会的活動の有無	頁
		著作数	論文数	学会等発表数	その他			
橋口　亮（S）	教授	2	5	0	2	無	有	90
森　弘行（L）	教授	0	8	0	0	無	有	91
織田　芳人（Y）	教授	0	6	3	0	有	有	92
中澤　伸元（Y）	教授	0	0	0	15	無	有	93
松尾　公則（Y）	教授	0	6	3	0	無	有	94
長尾　久美子（F）	教授	0	4	0	3	無	有	95
白石　景一（Y）	教授	0	0	0	0	無	有	96
武藤　玲路（L）	准教授	1	13	8	0	無	有	97
濵口　なぎさ（L）	准教授	0	8	1	0	無	有	98
山口　ゆかり（S）	准教授	0	8	0	0	無	有	99
島田　幸一郎（Y）	准教授	0	4	0	0	無	有	100
古賀　克彦（S）	講師	0	7	0	0	無	有	101
中村　浩美（Y）	講師	0	4	0	0	無	有	102
本村　弥寿子（Y）	講師	0	9	2	0	無	有	103
荒木　正平（Y）	講師	1	15	4	1	無	有	104
福井　謙一郎（Y）	講師	1	9	1	1	無	有	105
光武　きよみ（Y）	講師	2	11	5	5	無	有	106
山本　尚史（Y）	講師	0	7	2	0	無	有	107
玉記　雷太（Y）	講師	2	16	4	1	有	有	108
江頭　万里子（L）	講師	1	9	1	0	無	有	109
植木　明子（F）	講師	0	4	1	0	無	有	110
田川　千秋（F）	講師	0	3	0	0	無	有	111
昆　正子（Y）	助教	0	6	3	0	無	有	112
蛯原　正貴（Y）	助教	1	8	4	0	無	有	113

平成 30 年度（2018 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】生活創造学科　栄養士コース　【職名】　教授　　【氏名】橋口　亮
【研究の題目】トランスグルタミナーゼを用いたクジラソーセージの研究
【研究の概要】

１．目的

これまで、クジラの赤身肉にトランスグルタミナーゼを添加し、ソーセージパテを製造する実験を重ねてきた。その結果、ソーセージパテの肉の結着性、弾力性など物理的性状において改善がみられた。しかし、風味の面で問題があり、クジラ肉特有の臭気を薄くする必要がある。そこで、今回、冷凍されたクジラ肉を解凍する際、ドリップがなくなるまで水晒しを行い、脱水した肉にトランスグルタミナーゼを配合しソーセージパテを製造した。

２．方法

冷凍のクジラ赤身肉は、10℃の流水で解凍した後、ミートチョッパーにかけ、10 倍量の氷水で３分間撹拌する水晒しを４回行い、さらし綿袋に入れてかるく脱水した。これに重量の 3.7％の塩漬剤を擂り込み、真空包装して熟成（５℃、３日間）させた後、トランスグルタミナーゼ（0.3％）、デンプン（1.0％）、卵白（1.3％）およびクラッシュアイス（15％）を加えて乳化肉を調製した。調製後の乳化肉は、高さ２㎝、縦横３㎝に成型し、プラスチックフィルムで包装した後、坐り（10℃、48 時間）の工程をとった。坐り後のソーセージパテは、温湯（75℃）で 30 分間加熱（中心温度 68℃以上）し急冷乾燥後、実験試料とした。ソーセージパテの品質試験は、前報と同様に、水分率、水分活性、断面の色および食感の測定を行った。なお、ソーセージパテに調製したクジラ赤身肉のｐＨは、トランスグルタミナーゼの至適ｐＨである 5.66 を示していた。

３．結果

(1) 解凍後のクジラ赤身肉は、チョッパーにかけ水晒しした結果、ほぼ完全に臭みを除去できた。
(2) ソーセージパテの製造は、10℃以下で行った結果、粘ちょう性のあるペーストができた。
(3) 坐り直後と加熱後の物理的性状は、脆さと弾力性は変わらないものの、硬さは加熱後に高くなった。

表１　ソーセージパテの物理的性状

試料 測定項目	坐り（10℃、48hr）	加熱後
硬　さ（N）	18.3	33.9
脆　さ	6.2	6.2
弾力性	16.3	16.4

(4) 加熱後のソーセージパテの断面の色は、明るさが増し亜硝酸塩による発色がみられた。

表２　塩漬前後のクジラ赤身肉および加熱前後のソーセージパテの色

試料 測定項目	クジラ赤身肉		ソーセージパテ	
	塩漬前	塩漬後	加熱前	加熱後
L＊	33.4	33.6	59.9	61.4
a＊	6.8	14.3	12.4	12.3
b＊	2.7	5.4	8.0	7.4

(5) 加熱後のソーセージパテの風味は、クジラ赤身肉特有の臭いがなく、官能的に好ましい状態であった。

次年度は、生産性、経済性、衛生面の観点から、高温坐りを含め、クジラ肉に適した条件作りについて検討する。

平成 30 年度（2018 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】生活創造学科ビジネス・医療秘書コース　【職名】教授　【氏名】森　弘行

【研究の題目】

情報処理教育に関する研究

【研究の概要】

・ 学修支援のためのデータベース構築

2013 年より、学生の学修支援のためのデータベース構築を継続している。整備が待ち望まれていた公式の学務システムは、2017 年度より運用が始まった。しかし、2016 年度以降の入学生データしか収録されておらず、2019 年 1 月現在もシステム自体の改修、開発作業が継続している。学務システムは、教職員が業務上使用する機能から順次開発されており、学生が利用できる機能は履修登録とその確認程度でまだ限定的である。

これに対し、本システムでは学生も自分の単位取得状況、成績、検定試験などの資格取得状況、就職活動等が確認できるようになっている。同時に全学的な学務システムの整備も行われているが、データや機能が未整備のものもあり、相互のデータ移行作業を行うことで、業務を補完するような形態で利用している。

本研究の最終的な目的は、学生の様々なデータをリンクし、横断的に分析、学生支援や教育改善に活用する IR（Institutional Research）の構築であり、本システム、学務システムとデータ分析システムとの連携、そしてそれを学生や教職員へフィードバックし、更なる教育の質の向上、学生の目標達成に貢献することである。

今年度は、学務システムに備わっていない新たな機能として、高等学校基本情報の検索機能、高等学校訪問記録の検索機能、出身高等学校別の学生記録検索機能を追加した。これにより、学生募集業務における情報共有に資することができると考えている。

また、軽微なデータベースの保守を行うための簡易データテーブル閲覧・更新機能を開発した。これは、テーブル内のフィールドやキーの属性をデータベースの定義情報から自動的に抽出し、それに従って適切な SQL 文を生成、実行することで、特定のテーブルに限定されることなく汎用的に利用できる。また、ブラウザのアドレスバーに直接操作コマンドを指定することもできるが、セキュリティ上、管理者権限が与えられていないユーザーは利用できないよう制限している。

本システムには学生ポートフォリオを試験実装しており、学習成果の到達目標について学生による自己評価、教員による評価、本システムによる評価の比較を行った。その結果、いずれの目標についても教員による評価が高いのに対し、学生による自己評価は低い傾向が認められた。

本システムは、Windows サーバー上の仮想計算機で稼働する Ubuntu システムで運用しているが、Windows サーバーのサポートが既に終了しているため、Windows 2008 サーバーに移行した。しかし、Windows 2008 サーバーもサポート終了の期日が迫っており、さらにデータベース管理システムである MySQL の開発も終了していることから、早期に学務システムへの移行、もしくは本データベースシステムの新サーバーへの移行を検討する必要がある。

平成30年度（2018年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】　幼児教育学科　　【職名】　教授　　【氏名】　織田芳人

【研究の題目】幼児教育におけるメディア活用に関する国内の研究概観―保育者によるメディア活用

【研究の概要】

既報（織田芳人, 2018, 幼児教育におけるメディア活用に関する国内の研究概観, 長崎女子短期大学紀要, 42, 192-202）において、幼児教育におけるメディア活用に関する研究が国内でどのように推移してきたかを文献から概観するためCiNiiを利用して全文を入手できる文献を収集した。既報では幼児によるメディア活用に焦点を当てた。本稿では収集文献をもとに保育者によるメディア活用に焦点をあてて考察した。保育者によるメディア活用には、①幼児活動支援のためのメディア活用、②園務のためのメディア活用、の二つがある。

①幼児活動支援のためのメディア活用に関する文献数を1989年～1997年と1998年～2007年で比較すると、約4倍に増加しており、2000年前後からパソコンが急速に普及し始めたことによると推測された。2008～2017 年になると減少しているように見えた。掲載誌別に分類して文献数の推移を整理すると、文献が学会誌よりも各大学の紀要に多く掲載されているのは、各学会それぞれの専門性を活かした研究段階までには至っていないとも推測された。新谷ほか（2001）はPC、液晶プロジェクター、デジタルカメラ、スキャナー等を用いることで保育者自身によるコンテンツ作成も可能とするデジタル紙芝居を試みた。芝野ほか（2008）はビジュアルプログラミング言語ビスケット（VISCUIT）を用いてキャラクターが動き変化する「絵本」を製作し、保育の場で実践した。この「動く絵本」の長所は、大人数の幼児に対して大型スクリーン等で対応できる、保育者がキャラクターの動きをコントロールできる、話の内容を変更できる点であると指摘した。青木ほか（2013）は、保育者を対象としてNHKテレビ番組『にほんごであそぼ』に対する視聴実態と意識をアンケート調査して、子どもの遊びに「じゅげむ」「ややこしや」「わらべうた」が見られたとの結果を得た。小林ほか（2014）はNHKラジオ番組『お話でてこい』を取り入れた保育実践を行い、「ラジオ番組は視覚情報をもたない分、子どもの創造をより豊かにし、効果音や音楽もあって子どもたちを夢中にする独特の楽しさがある」という結果を得た。

②園務のためのメディア活用に関する文献数を1989年～1997年と1998年～2007年で比較すると、幼児活動支援のためのメディア活用に関する文献数と同じように増加していたけれども、2008～2017 年においても増加の傾向が見られた。掲載誌別に分類して文献数の推移を整理すると、情報処理学会誌に1998年～2007年で4編と2008～2017年で4編掲載されており、教育工学会誌には2008～2017年で2編掲載されていた。このことから、幼稚園や保育所等における業務に関わるメディアがより専門的になってきていることが推測された。新谷ほか（2003）は、「保育所における幼児の保育記録は、幼児の発達段階に応じた保育計画作成等に欠かせないツールであるが、作成工数が大きく、センサ等による自動化が望まれる」として、保育所における幼児の活動記録を自動化する速度センサとTVカメラからの動画像処理によって特定する手法を提案した。新谷ほか（2007）は、幼児の発達を的確に捉えるために新しく提案している客観的評価方法と各年齢を跨いだ視点を有する新しい発達記録を内部に組み込んだ発達記録システムを開発した。このシステムを保育園で実地調査した結果、肯定的な評価が得られた。河田ほか（2008）は、ロボットインタフェースを利用して保護者と保育士の間、及び保護者と子どもの間のコミュニケーションを促進・支援する「メルロボ連絡帳」システムにおいて、保育士に装着されたセンサの活用による機能拡充を行い、システムが提供するサービスを保育状況に合わせて切り替えられるようにした。保育園での実証実験を行った結果、保育状況によっては有効性が認められた。

保育者による幼児活動支援のためのメディア活用では、幼児にとってメディアの安全性が第一に確保されなければならない。保育者にとってはメディアの操作性がより簡便であることが望ましい。保育者による園務のためのメディア活用では、幼児が直接関わるわけではないので、保育者にとってメディアの操作性が最重要課題になると考えられる。近年、いろいろなメディアが急速に軽量化、小型化さらには高性能化されていることから、それらの安全性あるいは操作性は容易に解決されることが期待される。しかし、幼稚園の園務情報化が進まない理由として挙げられる幼稚園の教員養成課程における情報教育の機会や現職研修等の不十分さは、メディアが急速に変化していくために、なかなか改善されないと推測される。今後の困難な課題として残されている。

平成 30 年度（2018 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】　幼児教育学科　【職名】　教授　【氏名】中澤　伸元

【研究の題目】「できないかもという意識から、できる！意識に変わるまでの変化」

【研究の概要】

大学に入学するまでの自分？

学生は、様々な環境で一人一人が育ってきた。様々な環境が学生一人一人の性格、価値観をつくりだしてきたのは、学生一人一人が育った環境なのだ。人生と言う器の中で、一番近い影響力を持つのは、まず両親である。次に先生、兄弟、仲間などが影響の対象となる。学生たちは、出会った人々の「貴女には無理！」「馬鹿じゃないの！」「駄目だよ！」このような否定的な言葉を何回耳にしてきただろうか？他人の価値観の影響によって、自分の正しさを作りあげてきたために、本当の自分と言うものが分からないまま生きてきた。

自分の本当の価値を自分が見つける。

大学に入るとそれぞれの学生の価値観の違いに、唖然とし、人と話すことが怖くなり、「嫌われない自分」「好かれる自分」を演じるようになる。二年生の卒業研究で、毎年ビックリすることは、１０人の卒研メンバーの中で、今まで何人の人と話をしたことがあるのか？という質問に、毎年学生たちは、２～３人と答える。ほとんどの学生がお互いに話したことが無いという。そしてほとんどの学生が、このメンバー最悪、うまくやっていける自信ない！と１回目の授業で思うようである。したがって前半の授業は同じ卒研発表のゴールに向かって理解しあえる仲間づくりから始まる。

中澤卒研のメンバーについての意識改革！

メンバーは、「無限の可能性を持って生まれてきている一人一人である」ことを認めあうことから始める。そのメンバー全員が、目的とするところは一つ。全員の一致したゴールを設定することである。

今年の学生たちのゴールは、全員が、「本当の自分らしく変わること！」仲間の意見も素敵な意見として受け入れ、自分の意見も素敵な意見として取り入れてもらえる。全員が共通した成りたい自分とは、全員の観客を感動させることを目的にした。このことを全員がなりたいというゴールにした。常にポジティブな言葉を使いネガティブな言葉は自分の中からは削除する。学生が徹底したことは「やりたい！」と言う言葉。ミュージカルの仕事は限りなくある。大道具、小道具、衣装、台本作り、ピアノ伴奏、セリフ、歌の稽古、などである。これを乗り越えるためには、生半可な覚悟ではできない。「やらなければならない！」ではなく「やりたい！」に切り替え楽しんで表現する習慣を身に付けるしかない。メンバーが肝に銘じて毎回言っていたことは、「意識、イメージすれば→姿勢が変わる→姿勢が変われば態度も変わる→態度が変われば行動も変わり→行動が変わると結果、ゴールにたどり着く」ということである。

好きなことには本気で取り組む

結果学生は、好きなことには本気で取り組み、素晴らしいミュージカルを作り上げた。それは学生にとって辛いことではない。お互いを批評、評価しながら、楽しそうに、やり遂げる姿に指導者は感動する。頑張らなくては、努力しなくては等は気にもならない。やりたい事に対しては努力は不要なのであり、寝食を忘れて取り組む姿勢ができるのである。

ゴール設定したことは、自分たちに向かって流れてくる

「人々を感動させたい！」この目標、目的はパワーが出た。無限の可能性を持った学生一人一人のパワーが、未来から現在の自分に流れてくると信じているのだから、学生たちもウキウキワクワクである。過去のマイナス思考は、未来からのエネルギーには成り得ないのである。同じことをしても結果が良ければ過去の解釈はまったく違ってくるのである。固定観念とは思考と思考をくっつけ成り立つものである。歌・ピアノが上手に成りたいという観念とピアノ・歌下手という観念がくっついても願いは叶わない。私は歌・ピアノが大好きという観念と歌・ピアノが上手になると言う観念は、願いが叶うのである。今後も学生の可能性を信じ、夢を叶えられるよう尽力していきたい。

平成 30 年度（2018 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】幼児教育学科　　【職名】　特別専任教授　　【氏名】松尾公則

【研究の題目】　長崎女子短大敷地内に生息する小動物

【研究の概要】

長崎女子短大に勤務し始めてから８年になる。その間、敷地内に生息する両生類や爬虫類を調べてきた。今年度は、そのまとめを「長崎女子短大敷地の両生爬虫類相」として紀要に発表するため、より詳しく調査を実施した。調査の方法は、日々の目撃記録の集積であるが、両生類に関しては庭園内の池を、爬虫類に関しては敷地内の竹林や雑木林内を、春夏秋冬の４季に渡って詳しく調査した。

長崎女子短大敷地内に生息する両生類は、有尾類はアカハライモリ、無尾類はニホンヒキガエル、ツチガエル、シュレーゲルアオガエルの合計４種である。有尾類は、県本土には３種が生息し、長崎市においても同様の結果である。短大内に生息するアカハライモリは一生をほぼ水中で過ごす種であり、短大内に池は生息可能である。以前、誰かが持ち込んだ個体が生き残っていると思われる。カスミサンショウウオとブチサンショウウオの成体は山中の陸上で生活し、産卵は渓流や水田で行なわれ、数ヶ月の幼生期間は水中で育つ。敷地内には、庭園の池以外に水場がないため生息は不可能と考えられる。無尾類については、県本土には 11 種、長崎市内には 10 種が分布している。敷地内には水田や湿地、河川等がないため、生息できるカエルは限られており、庭園内にある人工の池を繁殖場所として利用できる種だけが生息することになる。一生を水場から離れないツチガエルは年間を通して池の中で生活し、ニホンヒキガエルとシュレーゲルアオガエルは春先に産卵し、幼生として約２ヶ月を池内で過ごした後は、上陸して、校舎の周りにある雑木林や竹林で過ごしている。

長崎女子短大敷地内に生息する爬虫類は、有鱗目トカゲ亜目３種、ヘビ亜目６種の合計９種である。県本土に広く分布するカメ目は生息していない。トカゲ亜目の３種に関しては、ヤモリ類を除くと県本土とまったく同じニホンカナヘビ、ニホントカゲが見られる。ヤモリ類は、海岸付近の岩場だけに分布するニシヤモリは生息せず、市内の人家周辺にみられるニホンヤモリだけが数多く見られる。ヘビ亜目は県本土や市内に８種が生息しており、その内の６種を確認することができた。個体数の多い種は、ヤマカガシ、シマヘビ、ジムグリの３種であり、毎年のように構内に出没し、学生も見る機会が多い。この中で、ヤマカガシは近年毒ヘビとして注目されており噛まれる危険性もないわけではない。しかし、ヘビの側から攻撃することはなく、手で掴まない限り噛むことはないので、注意を呼びかける程度にしている。竹林と雑木林内で１回ずつ、ヒバカリとアオダイショウを目撃したことがある。ヒバカリは竹林の落ち葉の下、アオダイショウは、雑木林の木の上での確認であるが、環境的に考えるとある程度の個体数は生息しているものと思われる。ニホンマムシは、自らの確認ではなく、用務員の方からの聞き込みである。ニホンマムシは毒ヘビであるため気をつけなければならないが、目撃場所は学生が入り込むような場所ではないので心配する必要はないだろう。確認できていないヘビは、タカチホヘビとシロマダラの２種である。これらはともに夜行性で非常に個体数が少ないので発見できなかったと思われる。生息する可能性はあるので、今後も調査を継続していきたい。

長崎女子短大は三方を竹林や雑木林に囲まれた自然豊かな環境である。しかし、敷地は尾根付近にあるため自然の水場はなく、人工的に作られた庭園内の池だけが唯一の水場である。この水場を利用して３種のカエルが命をつないでいる。爬虫類相については豊かな自然環境の下、市内とほぼ同じであり、未確認種が今後発見される可能性もある。

平成 30 年度（2018 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】　生活創造学科介護福祉士コース　【職名】特別専任教授　【氏名】長尾久美子

【研究の題目】１　介護福祉士国家試験全員合格と実践力の修得に向けた教育方法・対策について

【研究の概要】

目的

介護福祉士国家試験への全員合格に向け、自己学習の取り組みを勧めるとともに、キャリアップセミナーの成績データ等を基に課題や効果的な方策を検証し、国試に向けた授業方法の構築に役立てる。

方法

１　国試対策の過去問などの成績を毎回分析し、正解率のアップのために、対策の在り方を検証した。

２　成績低位学生の年間の学習進捗状況や課題の把握を行った。

結果

平成 30 年度（第 31 回）介護福祉士国家試験自己採点結果　(H31.1.27　長崎県立体育館)

	人数	平均得点（125 問中）	平均正解率（100%）	最高得点（125）	最低得点（125）
全　　体	１８	９０．９点	７２．７%	１１２点	６１点
(一般学生)	１０	８４．２点	６７．４%	９９点	６１点
(養成科生)	８	９９．３点	７９．４%	１１２点	８８点

まとめ

①介護福祉士国家試験（H30 .1. 27、長崎県立体育館）は 18 名全員が受験した。

3 月 27 日発表　　自己採点では２名が不合格

②総合的評価

・基礎学力が極めて低い学生の指導を行ったが応用力をつけるまでに至らなかった。この学生は、言葉の意味、文章を読み取る力が極めて低く、良く学習し、過去問題など１度した問題は解答を暗記し、良く解けるが、問題が少し変わると応用ができないという限界があった。

・また、社会人と一般学生の学力に差があり対策の進め方が難しかった。社会人は限られた時間の中で、自分で、理解を深める取り組みができ、授業でその疑問を解いていくということができるが、一般学生の多くは、漫然と授業に参加し、積み上げができていかないという課題があった。

【研究の題目】２　介護福祉士養成教育を振り返って

【研究の概要】

目的

介護福祉士コースは、本年度末で閉じることとなるため、18 年間の本学介護福祉士養成課程の歩みと養成教育の制度改正を振り返り、本学における介護福祉士養成教育の足跡を残す。

方法

法制度改正関連資料、本学の介護福祉士養成に関わる国への提出資料、介護福祉士養成課程の入学生・卒業生・就職先等のデータ、介護福祉士養成施設協会の資料や先駆的研究を参考にしてまとめた。

結果

・入学生の減少には、社会環境の変化と合わせ、法制度の改正も影響しているのではないかと考えられた。介護人材は極めて不足しているのに、法改正により資格取得が難しくなり、敬遠されるという状況が考えられた。

・本学卒業生の専門就職率は極めて高く、長崎県の介護人材として貢献していることが分かった。

・１８年間ではあったが、本学介護福祉士養成教育の理念・目的は果たすことができたのではないかと考える。

平成 30 年度（2018 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】　幼児教育学科
【職名】特別専任教授
【氏名】白石景一

【研究の題目】
１．音楽表現における感性・知性・理性・思想などの運動・音色感などとの関係について。
研究概要：チェロ奏法・指導法およびアンサンブル法などによる。

２．保育者養成校の音楽教育における教材研究および指導法について。
研究概要：（１）音楽教育におけるＤＴＭなどの利用について。
（２）保育者養成校における音楽初心者への基礎能力教育などについて。

【研究の概要】
２．チェロ奏法の研究については、昨年の２月頃より、左手中指の「ばね指」の発症により、あまりできない状態が続いているが、エルガーの「愛のあいさつ」、モリコーネの「愛のテーマ」、John Williams の「シンドラーのリストのテーマ」などの小品について多少取り組むことができた。
今後は、演奏から楽曲のアナリーゼや編曲・作曲などに軸足を移していきたいと考えている。

２．（１）DTM などを利用したマルチメディアによる教育システムについてはハード、ソフトの両面において刻々と進化し続けており、何年かするとまた、格段と優れたシステムが開発され、システムごと変更しなくては追いつかないような状況になる可能性が高いため、導入は、非常に難しいようである。ノーテーターソフトの「シベリウス」(AVID)「フィナーレ」(Make Music)「スコアメーカー」(KAWAI)の利用についてそれぞれの汎用性、特徴、スキャン機能、ＤＡＷソフトとの相性などについて、実際に使用しながら、引き続き簡単な方法を探っていきたい。
（２）この一年間は、２０１９年度からスタートする科目「子供と表現（音楽)」について、これまで３０時間での講義内容を１５時間で、いかに効果的に凝縮してあるいは割愛したりして、より効果的に教えることができるかを検討しながら、現在までの「幼児音楽指導法」の授業に取り組んだ。
やはり、音楽経験に大きな差がある学生が入学してくる現状から、どこに焦点を当てて教えるべきかが、先ず大きな課題である。このことに対しての対策の一つとして、なるべく個人個人の課題チェックを毎回の授業の中で行うことを心掛け、①読譜の基礎、②伴奏法の基礎、③保育内容領域「表現」の育成にかかる音楽的指導法の３本柱での凝縮を検討した。
また、入学後の格差を少しでも少なくする効果も狙った入学前教育の一環として「ピアノサポートレッスン」にもかかわった。
直接ではないが長崎県青少年育成県民会議発行、長崎県福祉保健部子こども政策局こども未来課協力の子育て応援フリーマガジン「ココロン」2018.11Vol4 特集子どもと音「おとからひろがる子どもの世界」にインタビューの形で『親子で一緒に音を楽しむ時間を共有しましょう』というコンセプトで本学での講義「幼児音楽指導法」の内容をもとに「子どもは母親の感情に共感」「音は音楽的能力以外の発達も」「音を一緒に楽しんで幸福感を共有」「心に残るふるさとの音」のサブテーマにて掲載された。

以上

平成 30 年度（2018 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】ビジネス・医療秘書コース　　【職名】准教授　　【氏名】武藤　玲路

【研究の題目】**「長崎女子短期大学における 3 つの方針の検証」**

【研究の概要】

本研究では、長崎女子短大のビジネス・医療秘書コースの学生について、3 つの方針の妥当性を検証し、今後の内部質保証システムの改革・改善に役立てるために、既存の IR データの分類・集計を行った。

4.1 卒業認定・学位授与の方針（DP）の妥当性の検証

卒業時の GPA の順位が短大入学後の社会人基礎力に反映していること、また、卒業時の GPA の順位が学習成果の教員評価と学生評価と就職先評価に関連があることから、卒業認定・学位授与の方針（DP）による GPA の算出法はある程度妥当であると言える。

しかし、GPA の中位群と下位群の社会人基礎力に明確な差が見られないことから、評価基準等の見直しが必要ではないかと思われる。

4.2 教育課程編成・実施の方針（CP）の妥当性の検証

学習成果の 6 項目のバランスが十分取れていないことから、教育課程編成・実施の方針（CP）と学生支援の方法の見直しが必要ではないかと思われる。

また、学習成果の 6 項目のバランスが十分取れていないことから、教育課程編成・実施の方針（CP）と学生支援の方法の見直しを行い、教員評価と学生評価を就職先評価に近づけるような評価基準や学生支援等の見直しが必要ではないかと思われる。

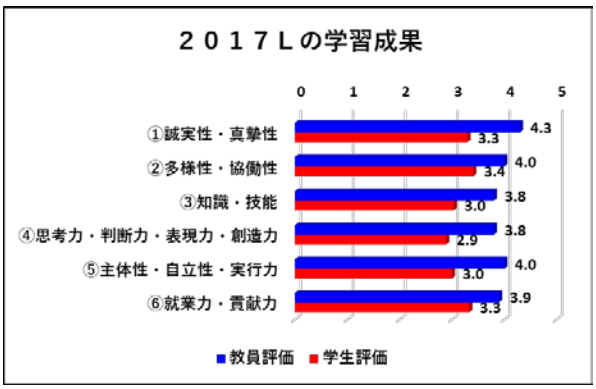
4.3 入学者受入れの方針（AP）の妥当性の検証

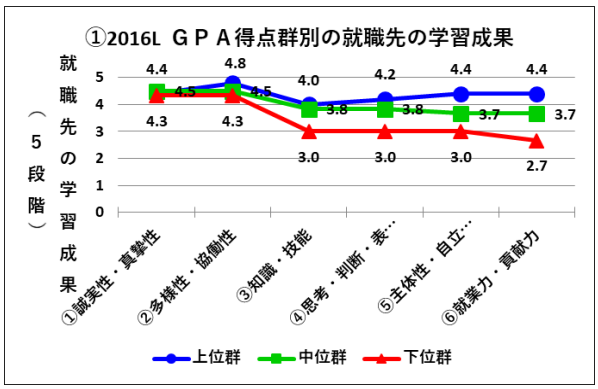
入試得点の順位が短大入学後の学業成績や学習成果に反映していること、また、入試得点の順位と短大入学後の学業成績には緩やかな正の相関の傾向が見られることから、入学者受入れの方針（AP）による入試得点の算出法はある程度妥当であると言える。

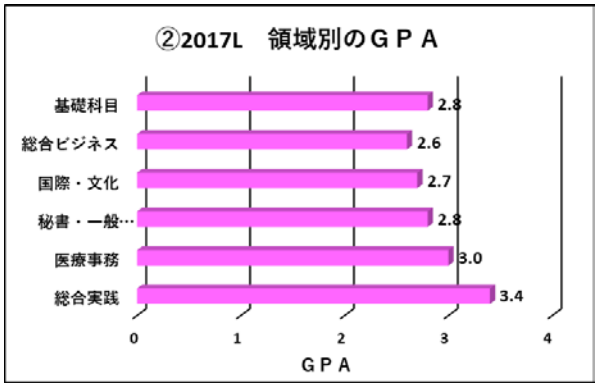
しかし、数名の学生がこの相関関係から著しく外れた分布を示しているため、評価基準等の見直しが必要ではないかと思われる。

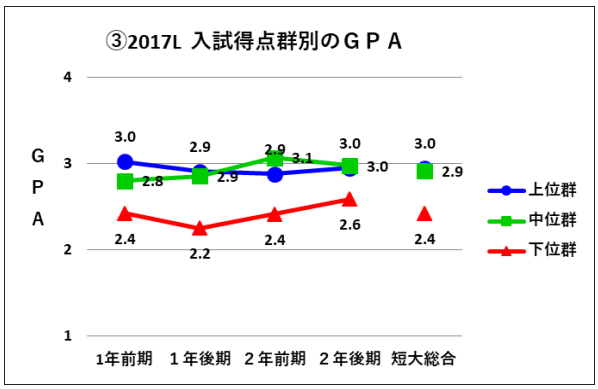
4.4 今後の展望

これまでは、短期大学のインスティテューショナル・リサーチ（IR）システムの構築に力点を置いてデータの収集・分類・整理を行ってきた（武藤他、2016、2017、2018）。今後は、短期大学のエンロールメント・マネージメント（EM）システムの策定と運用に取り組み、学生支援の向上・充実と短大教育の改革・改善に努めたいと思う。









平成 30 年度（2018 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】　ビジネス・医療秘書コース　【職名】　准教授　【氏名】　濵　口　なぎさ
【研究の題目】能動的学修の実践に関する研究
【研究の概要】
(1) 目的
　担当する授業において、学生が受け身ではなく能動的に参加し、学んだ知識を実践できるための教材と指導法を研究している。
(2) 方法
①「ゼミナール」では平成 28・29 年度から引き続き「長崎と猫」をテーマとし、調査研究した結果をまとめ、リーフレットとしてまとめたが、内容を充実させるとともに、初級編・初級編の英訳版・上級編の 3 種類を作成した。

②「登録販売者試験」対策講座の実施

(3) 結果
①今年度のゼミナールでは、配属された学生達のモチベーションが高かったこともあるが、導入時に教員が教材として提示したビデオでの学習が非常に効果的で、知識や経験不足を補うためことを目的として、自主的に外部のボランティア団体にコンタクトを取り、土日にボランティア活動に参加するなど非常に積極的であった。
　昨年度の先輩たちが作成したリーフレット「にゃがさきまっぷ」は、追加配布を希望されるなど取材先での評価も高く、継続を望む声が多かったことから、バージョンアップ版を作成した。昨年度と同様、猫関連グッズを販売する店や看板ねこの紹介を掲載したが、ボランティア活動等で体験し、感じたこと、考えたことも掲載したことで内容の充実を図ることができた。時間割上のゼミの時間での活動は、前期は連絡調整と進捗状況の確認が主となり、後期は取材内容の整理、リーフレットの編集が主となった。教員は授業のはじめに今日のポイント確認、終わりに次回までの活動内容の確認を行い、調査研究活動の軌道修正を主とし、学生が見落とした点の修正に徹することができた。
　学生達は自主的に役割分担を行い、各自が責任を持って自分の役割を果たし、全員で力を合わせて 3 種類のリーフレットを完成させることができており、能動的な学修ができていたと評価している。このことは、ゼミの最終回に実施した自己評価でも明らかであり、「最後までやり抜いた達成感」は全員が 5 段階評価で 5 を付けており、総合評価でも 100 点満点で 80 点以上であった。
　また、9 月と 3 月に長崎新聞日曜版「とっとって」にゼミ活動についての記事が掲載されたことが、夏休み後の活動への意欲の継続や、リーフレット完成後の達成感につながったと考えている。次年度は、年度当初に自己評価を行い、最終回で同じ項目の自己評価を行うことで、ゼミ活動によってどのような力が身に付いたのか学生・教員双方が確認できるような取り組みを考えている。

②今年度から新たに「登録販売者試験」受験希望者を対象とした対策講座を実施した。1 年生 4 名が参加し、能動的学習の手法としては反転学習を基本とし、貸与したテキストで試験項目ごとに各自で学習したのち、模擬試験で実力を確認し、結果をもとにフィードバックを行った。
　紀要第 42 号でも報告したが、残念ながら自学自習の習慣がついていない学生がほとんどで、反転学習は効果的ではないということが明らかになった。また、試験内容は薬効や成分名などを暗記することが求められるため、暗記することが苦手な学生にとっては、どのように学習すればよいのか分からなかったのではないかと思われる。
　次年度については、導入時は講義形式とし、学習方法について十分に解説し、指導した後、ミニッツペーパー等を用いて、要所要所で学生の躓きを確認し、個別に対応できるような方法を検討したいと考えている。

平成30年度（2018年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】 生活創造学科 栄養士コース 【職名】 准教授 【氏名】 山口 ゆかり
【研究の題目】 トランスグルタミナーゼ製剤の添加がクジラ肉のソーセージパテに及ぼす効果について
【研究の概要】

１．目的

私たちは、結着力が弱く、独特の臭みを持つクジラ肉を原料としたソーセージの製品化を目標として、実験を重ねている。昨年度は、水晒しの工程を加えたクジラ肉に結着力の強いトランスグルタミナーゼを配合したソーセージパテを製造し、反応時間の違いによる物性や風味の検査を行った。その結果、反応時間の延長が弾力性を高めることがわかった。しかし、水晒しを行っても特有の臭いが残り、製品化できる状態には至っていない。そこで今年度は、風味の改善と弾力性の向上を目的として、クジラ肉のドリップを完全に除き、トランスグルタミナーゼ、デンプンおよび卵白を配合したソーセージパテを製造し、その効果を検討した。

２．方法

冷凍のクジラ赤身肉は、10℃の流水で解凍した後、ミートチョッパーにかけ、10倍量の氷水で３分間撹拌する水晒しを４回行い、さらし綿袋に入れてかるく脱水した。これに重量の3.7%の塩漬剤を擂り込み、真空包装して熟成（５℃、３日間）させた後、トランスグルタミナーゼ（0.3%）、デンプン（1.0%）、卵白（1.3%）およびクラッシュアイス（15%）を加えて乳化肉を調製した。調製後の乳化肉は、高さ２㎝、縦横３㎝に成型し、プラスチックフィルムで包装した後、坐り（10℃、48時間）の工程をとった。坐り後のソーセージパテは、温湯（75℃）で30分間加熱（中心温度68℃以上）し急冷乾燥後、実験試料とした。

ソーセージパテの品質試験は、前報と同様に、水分率、水分活性、断面の色および食感の測定を行った。なお、ソーセージパテに調製したクジラ赤身肉のｐＨは、トランスグルタミナーゼの至適ｐＨである5.66を示していた。

３．結果

(1) 解凍後のクジラ赤身肉は、チョッパーにかけ水晒しした結果、ほぼ完全に臭みを除去できた。
(2) ソーセージパテの製造は、10℃以下で行った結果、粘ちょう性のあるペーストができた。
(3) 坐り直後と加熱後の物理的性状は、脆さと弾力性は変わらないものの、硬さは加熱後に高くなった。

表１ ソーセージパテの物理的性状

試料／測定項目	坐り（10℃、48hr）	加熱後
硬 さ（N）	18.3	33.9
脆 さ	6.2	6.2
弾力性	16.3	16.4

(4) 加熱後のソーセージパテの断面の色は、明るさが増し亜硝酸塩による発色がみられた。

表２ 塩漬前後のクジラ赤身肉および加熱前後のソーセージパテの色

試料／測定項目	クジラ赤身肉		ソーセージパテ	
	塩漬前	塩漬後	加熱前	加熱後
L＊	33.4	33.6	59.9	61.4
a＊	6.8	14.3	12.4	12.3
b＊	2.7	5.4	8.0	7.4

(5) 加熱後のソーセージパテの風味は、クジラ赤身肉特有の臭いがなく、官能的に好ましい状態であった。

今後は、生産性、経済性、衛生上の観点から、高温坐りを含め、クジラ肉に適した条件作りを検討したい。

平成30年度（2018年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】幼児教育学科　　【職名】　特別専任准教授　　【氏名】島田幸一郎

【研究の題目】　障害のある子ども、気になる子どもの教育・保育的支援ニーズへの配慮について
～学生の実習後アンケートの分析をとおして～

【研究の概要】

１．目的

インクルーシブ教育・保育の進展と共に、「合理的配慮」に繋がる支援ニーズへの対応は喫緊の課題である。本学学生の教育実習・保育実習後のアンケート分析をとおして、障害のある子ども・気になる子どもの支援ニーズへの配慮がどのようになされているのかを、3歳児以上の子どもを対象に幼稚園・保育所での取り組みを比較検討して、「人的な配慮」「特性に応じた配慮」「物理的な配慮」「連携による対応」に区分して考察する。

２．方法と内容

⑴ 方法

2018年度の本学幼児教育学科2年生の教育・保育実習後に、障害のある子ども・気になる子どもの在籍状況、また支援ニーズに即した必要な配慮の実施有無と配慮があった場合その内容について、学生が担当した3歳児以上のクラスを対象にアンケート調査を行う。

⑵ 内容

障害のある子どもは、「発達障害」「身体障害」「知的障害」「病弱「その他」に大別し、気になる子どもについては、「落ち着きがない、多動等」「対人関係が築けない等」「言葉の遅れ、指示が通らない等」「身辺自立が遅れている等」「忘れ物が多い等」「その他」に大きく区分する。配慮事項の内容については、「人的な配慮」「特性に対応した配慮」「「物理的な配慮」「連携による対応」の4点に大別する。

３．結果

⑴ 障害のある子どもの在籍状況については、幼稚園3歳児が28%と低く4歳児で45%と急増している。保育所では3～5歳児とも32～33%とほぼ変化がない。障害区分については、幼稚園・保育所共に発達障害児が突出し、他障害についてもその比率に大きな差異はない。

⑵ 配慮の有無に関しては、幼稚園3歳児が44%と低く4歳児で63%、5歳児で71%と急増している。保育所では、3～5歳児73～83%と安定している。配慮内容については、幼稚園・保育所共に人的な配慮が57%で半数を超えている。その他の配慮については大きな差異はない。

⑶ 気になる子どもの在籍率は、幼稚園・保育所双方とも各年齢を通じて50%を超えている。幼稚園は3歳児で74%であるが、4歳児以降漸減している。保育所では、3～4歳児は60%台で5歳児は52%と減少している。行動内容については、幼稚園・保育所共に「落ち着きがない・多動等」が30%と1位を占め、他の行動内容についても0～4%の差異にとどまっている。

⑷ 配慮の有無に関しては、幼稚園3歳児で47%と低い。保育所では、各年齢とも在籍率と配慮率が一致しており、安定した関わりが持続している。配慮内容については、人的な配慮で幼稚園65%保育所47%、連携による対応で幼稚園8%保育所18%と両者にやや差がみられる。

４．まとめ

3歳児以上を対象にしたため、0歳児から受け入れている保育所と3歳児入園の幼稚園では子どもの理解と関わりにおいて若干の差がみられた。しかし、双方に多くの障害児・気になる子どもが在籍し、共に子どもの実態把握に努め支援ニーズに沿った関わりを工夫していることが理解できた。特に保育所において、連携による対応等により個に応じた保育が実践されていることを窺い知ることができた。近年、子ども虐待や貧困家庭の増加などにより、子どもの基本的人権が十分に保障されていない状況が出てきている。今後も、子ども一人一人の最善の利益を念頭に置き、障害のある子どもの教育・保育的支援ニーズへの配慮について研究を進めていきたい。

平成 30 年度（2018 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】　生活創造学科栄養士コース　【職名】　講師　【氏名】　古賀　克彦

【研究の題目】
① 普茶料理に関する考察　（普茶料理と長崎の関係について）
② 女子大学生における味覚と嗜好に関する研究
③ 現代の女子大学生の食生活の現状と課題

【研究の概要】
① 普茶料理に関する考察　（普茶料理と長崎の関係について）

普茶料理は隠元禅師が中国から長崎に渡来した際に、黄檗宗（臨済正宗）の教えと共に伝えられた中国式の精進料理である。普茶料理を伝えた隠元禅師の長崎滞在は１年程度と短い間であったが、長崎の黄檗宗の寺院に普茶料理は伝えられ、現在まで継承されている。また、普茶料理で用いられる料理のいくつかは長崎の庶民の間にも広まり、胡麻豆腐やけんちん、飛竜頭など、長崎の郷土料理となっているものもある。そこで今回、普茶料理の歴史や形式について、長崎との関係を含め考察を行った。

調査の結果。江戸時代初期に長崎に来航した隠元禅師によってもたらされた普茶料理は、日本の食文化に大きな影響を及ぼしており、それまで、日本料理では積極的には用いられてこなかった油脂を用いた「揚げる」や「炒める」といった調理法が日本料理に取り入れられた一因となったと考えられた。

普茶料理を日本に伝えた隠元禅師の長崎滞在期間は短かったが、長崎には興福寺、福済寺、崇福寺などの唐寺が江戸時代初期から存在していたこと、また、江戸時代の長崎には最盛期には１万人を超える中国人が居住していたことにより、普茶料理は大陸の文化一つとして長崎に伝承されたと考えられた。

② 女子大学生における味覚と嗜好に関する研究

最近、中高年に多く見られる味覚障害が若い世代にも広がり問題となっている。そこで若者の味覚の問題点を知るために本学栄養士コース学生を対象に、「酸味」「塩味」「甘味」を対象とした「認知閾値の調査」と、酸味と甘味の嗜好を調べるため酢の物を用いた「嗜好調査」を行った。

女子大学生を対象とした認知閾値調査の結果、特に酸味認知能力が低下している結果となった。酸味の認知能力が低下した理由の一つとして挙げられるのは若者のフルーツ離れ等が理由として考えられた。

この結果を踏まえ、料理における酸味と甘味の嗜好がどのように変化したのか調べるため、味付けを変えたきゅうりの酢の物（二杯酢、三杯酢）を作成し、嗜好調査を実施した。その結果、酸味に関しては8～12%の味付けが好まれていた。これは通常、酢の物において美味しいとされる酢の調味パーセント（5～8%）より濃い値である。また甘味に関しては4%と甘酢に近い味付けが好まれる傾向であった。このように酸味と甘味で濃い味付けが好まれた理由として酸味の感受性の低下により酢の使用量が増加し、味のバランスをとるため砂糖の使用量も増加したことも、濃い味付けが好まれる理由の一つと考えられた。

③ 現代の女子大学生の食生活の現状と課題

若い世代では朝食の欠食率増加や、野菜や果物の摂取量が少ない点が問題となっている。そこで本学栄養士コース学生を対象に食生活についてのアンケートを実施し、若者の食生活の問題点や課題について、本学栄養士コースの全学生を対象に調査をおこなった。また、その調査をもとに単身者や若者でも短い時間で簡単に作れる料理を考案した。

調査の結果、厚生労働省や長崎県が実施している各種健康栄養調査の結果と同様に「朝食の欠食」、「主食、主菜、副菜が揃った食事を食べていない」、「野菜、果物、牛乳・乳製品の摂取不足」、「適正体重を意識していない」、「食品を購入する際に栄養表示を利用していない」、「家庭で調理していない」、「郷土料理の伝承が行われていない」など多くの問題点が明らかになった。若い世代の食生活を改善していくためには、将来、栄養士として働く学生の食生活から見直さないといけないと思われた。

この様な問題を勘案し、若い世代や単身者向けに、単身者の台所でも簡単に手早く調理でき野菜等不足する栄養素が簡単に摂取できるメニューを考案した。このメニューは長崎新聞社が発行する、長崎県内の大学・企業・就活情報誌NR（エヌアール）2018 年６月号に巻頭特集記「お手軽メニューで自炊のススメ」として掲載された。

平成 30 年度（2018 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】　幼児教育学科　【職名】　講師　【氏名】中村浩美

【研究の題目】

1. ソプラノ音域からメゾ・ソプラノへの移行をもとに、オペラを含むクラッシック楽曲とミュージカルの発声法を基盤とした歌唱法の同一点と相違点、及び音楽表現、演技法について
2. 保育者養成校の音楽教育における教材研究と指導法について

【研究の概要】

1.　ソプラノからメゾ・ソプラノへの研究を継続しているが、まだまだ課題点が多く、頭では理解しつつも、あらゆる筋肉の使い方や力の抜き方、響きのポジション、また、息の流れが苦手な音域や母音によってスムーズに流れず遠くに声が飛ばず、声帯を締め付けたような声になる場合は今年度も多々あった。しかしながら、それがスムーズに発揮できることもあり、今後可能性を見出す現状となった。

　オペラアリアだけではなく歌曲を通しての研究はパートの移行に効果的であった。息の流れを重視することに最初から高音域にまでの修正課題を目的とせず、２点Ｇ（２点ト）を目安に徐々に音程を上げられる歌曲を選曲して試みた。ソプラノで勉強していた歌曲を中声用に換えてみること、曲によっては高声用のままで今の年齢も含めた上での声質を考えながら研究練習できたことは一つの進歩に繋がったと考える。

　年齢によっての変化で声が重たくなりがちだが、息の流れが自然でありポジションをさらに上げることで理想の声として歌えることも実感した。今年度後半は特に日本歌曲の真髄に触れて演奏したいと言う気持ちが高まった。言葉の重要性とそれによってのダイナミクスを含めた表現力で、例えば３番まである曲が何番かによって訴える内容だけではなく楽曲そのものが変化していく面白さを今更ながらに考えるきっかけとなった。息の流れによって声の道が見える（抽象的であるが）自分の声質や個性にあったアリアにも歌曲同様挑戦したい。同時に今までのレパートリーではないミュージカル曲の研究も取り組んでいきたい。

　中間音域には安定が見られ、特に高音域に入る二点Ｄ・Ｅ・Ｆの響きは自然で通る声になってきて出し易いが、高音域での発声に悩みを多く抱えていることは曲のレパートリーを広げられず今年度も課題として残った。２点Ａから上の音域になると、頭声だけを感じる声や、または声帯が付いてない状態でのかすれ声や、全く出ないことが今年度も頻繁にあり、研究課題として大きく捉えている。重たい響きには、深く掘ったような声になる時があるため、下顎の力を取り上顎部への意識と筋肉の使い方、そして体をほぐしながらで筋肉の使い方を引き続き学んでいきたい。一番の課題となっているのは息の流れがコンスタントに回ることで筋肉を使っての無理のない自然体な声がレパートリーを広げられことに繋がるのは言うまでもない。授業ではどうしてもミックスボイス、つまり、地声とファルセットの混じりでの歌声となり（ミュージカル奏法的にも精通する）、その歌声を継続することと、学生への指導する声の出し方で、クラシック発声であるメゾ・ソプラノの響きとは違う重い声、そして高音域が声帯に負担をかけているため出なくなることをクリアできるよう声を大切にしたい。

　オペラでもその発声法の課題点、問題点が影響しており、アリアでは役になりきっていても、その役に見合った声の出し方に疑問を感じ、根本的な発声法の見直しをしながらメゾ・ソプラノの響きと音域の幅を広げていくことを今後も研究したい。それによってミュージカル発声法の同一点と相違点の考え方、演奏法にも新たな発見ができるように思う。

2.　今年度も初心者が多く音楽基礎知識の理解も約８割がない状況のため、授業外でお互い余裕ある時間を都合し合ったことが多かった。個人レッスンは研究室で一対一の演習のため、まずは緊張状態を緩和させること、学生の性格を早く把握するように努めた。性格を早く知ることはその学生のピアノ技術の進度や音楽的な感受性をどのようにして引き出せるかにおいてとても重要である。これまでの経験によって今年度も性格を早く知り各学生の指導方法、内容、言葉かけに注意をはらった。学生の性格を知ることだけではなく学生と教員との信頼関係を構築した。メンタル面の強化も指導の一環として重要視した。ただ練習をするのではなく練習の仕方のノウハウを丁寧に、時に厳しく繰り返し指導していくことを継続した。今まで積み重ねて努力することが少ない学生には苦痛でもあったと思うが確実に上達していることを学生自身も感じることができていたようだ。どんなに厳しくとも、愛情を持って心から応援する気持ちで指導することで、学生もなぜ厳しく指導されたのか、なぜ上達したのかを理解してくれた。今後もさらに学生に愛情ある指導をしていきたい。

平成30年度（2018年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】幼児教育学科　　【職名】講師　　【氏名】本村　弥寿子

【研究の題目】保育実践力を身に付けるための授業内容の模索

【研究の概要】

1　研究の目的

近年、少子化等の影響により、本学幼児教育学科の学生も乳幼児と接する機会が少ない状態で入学する。もちろん、幼稚園や保育所などの様子も知らない状況である。そのため、保育に関する授業内容の理解が十分になされないまま授業が進められていく。特に「カリキュラム論」における保育指導案の作成では、子どもや保育者の様子が想像できないために作業が進まず、指導案作成に抵抗感を覚える学生が多い。これらのことから、学生に様々な科目の内容理解を促し保育の実践力を身に付けるには、保育に関する学びを始める初期の段階で保育現場の様子を知ることが第一であると考える。そこで、本学科1年次に行う「体験学習」の内容を再検討し充実を図った。

2　研究の方法と内容

(1) 研究の方法

「体験学習」は、学外実習の事前学習として本学附属幼稚園で行うものである。3点の目的（①子どもの様子を知る。②保育者の子どもへの関わり方を学ぶ。③保育者になることについて考える。）の達成のために、一人の学生が1年次に3回附属幼稚園へ出向き、1時間ほど観察したり子どもと関わったりしている。

本科目の充実のために本学附属幼稚園との協議会を設け、「体験学習」時の学生や園児の様子等を出し合い、内容の再検討を行った。また、「カリキュラム論」での指導案作成において、学生が「体験学習」で学んだことを生かすよう助言をし、指導案作成への取り組みの様子や内容の充実度を確認した。

(2) 研究の内容

３回行う「体験学習」の内容を以下のように変更し、それに伴って記録物や報告書の内容の改善を行った。

①第１回目「１日観察」

登園から降園までの観察を行い、幼稚園の一日の流れを把握する。子どもや保育者の様子、環境等をメモし、事後、時系列に沿って“子どもの姿”“教師の姿”を観察記録に起こす。観察記録には、行動や発言等を客観的に、報告書には自分の感想や考えを記入させることで、実習や就職後の保育記録の書き方につながるようにした。

②第2回目「子どもと関わる」

9：00から10：00までの1時間、子どもと実際に関わり、子ども理解や援助についての理解を深めるものである。会話をしたり遊びに加わったりしたことから感じたり考えたりしたことを報告書に記入させた。

③第3回目「学生による保育実践」

学生それぞれが、約10分間で子どもに活動を提供するものである。同じクラスへ入る者同士打ち合わせを行い、実際の保育を想像しながら簡単に流れを書いた後、引率担当教員の指導を受けて保育に臨むようにした。実施後は、子どもがどのように活動に取り組んだか、保育者としての自分の援助はどうであったかを考えて報告書を記入させた。

3　成果と課題

3回の体験学習であるが、段階を踏まえて保育者として身に付けさせたい力を盛り込んだ内容を取り入れた。報告書からは、段階を経て確実に内容が深まっている学生が増えていることが分かった。特に3回目は、学生が活動を考えて準備を進めて実践したため、保育を考える際にポイントとなるものや自分に足りなかったことに気付いていると思われる記述が見られた。これは、指導案を作成する際に生かすべきものである。そこで、この体験学習の報告書を指導案作成時に再度目を通させて実際の作成に取り組むようにすることが必要であると考える。体験学習での学びが日々の授業と結びつき、それが学外実習につながり、さらに卒業後の保育現場での取り組みにつながっていくよう、授業内容の工夫や改善を行うことが課題である。

平成 30 年度（2018 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】　幼児教育学科　　【職名】　講師　　【氏名】　荒木正平

【研究の題目】
さまざまなケア場面におけるコミュニケーションに関する研究

【研究の概要】

（1）本年度の研究成果として、まず前年度に引き続き、「子育ての社会化」と家族のあり方をテーマにした論文の執筆を行った。そこで用いたのは、前年度同様、幼児教育学科１年生を対象に「社会的養護」の授業で課したレポート課題がまず一つである。今年度はもう一つ、幼児教育学科２年生を対象に「社会福祉」の授業で実施したアンケート調査の結果を分析の素材として加え、さらなる考察の深化を試みた。目的としては前年度実施・報告したものと重なるが、対人支援をめぐるさまざまな分野においてすでに確認されている「ケアの社会化」をめぐる動きのうち、児童分野における動向に焦点を当て、まずはその現状と課題を概観的に確認すること。さらにそのうえで、保育・幼児教育の実践者となることを目指す短期大学生が、「子育ての社会化」についてどのような意識を有しているのかについて把握するための、より有意義なデータ収集のあり方を検討することである。これについては、前年度の成果・課題としてあげていた３つのポイントについても意識しながら授業の実施・論文の執筆を行うことが出来た。とはいえ、やはり紙幅の制限もあり、データの分析にもまだ十分な部分が多く残ったため、その成果を次年度以降の授業の組み立てにも活かしつつ、研究としてもまた継続的に取り組んでいきたいと考えている。

（2）本年度のもう一つの研究成果として、島田教員と連名で、教育・保育実習を終えた幼児教育学科２年生を対象に、障害のある子ども・気になる子どもの在籍状況や、支援ニーズに即した必要な配慮の実施の有無と、配慮があった場合その内容についてのアンケート調査を行った結果についての分析を実施した。荒木は主に、関連資料・文書の整理と学生アンケート結果との関連付けを行うことを意識して共同研究に取り組ませていただくこととなった。そのなかで、国家あるいは国際的な動向としてのインクルーシブ教育・保育への要求の高まりと、具体的な実践の現場における取り組みの現実とをいかに結びつけていくか、その重要性と難しさを身を持って理解することが出来た。現場の教職員スタッフの思いについて、話を聞くことが出来ればより意義のある研究になるとも考えられるがこの点を今後の課題としたい。よって本研究についても、引き続き継続し、より効果的な現場実践に寄与することが出来ればと考えている。

（3）介護実践現場におけるコミュニケーションのあり方については、前年度の成果・課題をいかすべく、執筆中である。

平成 30 年度（2018 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】　幼児教育学科　【職名】　講師　【氏名】　福井謙一郎

【研究の題目】①保育者養成課程に在籍する学生の養育態度認知と子供観の関連
②親子関係に問題を抱える学生の事例研究

【研究の概要】

①昨年度に引き続き、学生の養育態度認知と子供観の関連性について研究を行い、2017 年度で得られた結果の再分析を行った。その結果、それぞれの質問紙から得られた因子名と因子数に変化が見られ、さらにそれに基づく結果を得られた（執筆中）。

前年度における研究は、愛着や養育行動の世代間伝達を軸に「保護者－子ども」の関係と「保育者－園児」の関係に共通性があると考え、保育者が親から受けた養育態度認知が、自身の子ども観に影響を与えていると仮説設定した。検証を段階的に行うため、本研究では保育職志望の女子学生 210 名を対象に調査を行った。その結果、親から「無関心」に育てられたと認識する学生は、子どもに対する「慈愛」や「可能性」、そして子どもの意思や主体性を重んじる「尊重」といった肯定的子ども観が有意に低く、さらには「過干渉」的養育態度認知がそれらを調整することで、肯定的子ども観に対する「無関心」と「過干渉」的養育態度認知の有意な交互作用が明らかとなった。以上の結果から、学生（第二世代）が認知する親（第一世代）の無関心ならびに過干渉的な否定的養育態度は、学生の内面に作用し、子ども・園児（第三世代）に対して否定的なイメージを持つことにつながることが示唆された。したがって保育者養成校は、授業や実習を通した学生への肯定的フィードバックやディスカッション、ならびに学生とのサポーティブな対話といった、重層的な支援アプローチの体制づくりが求められると考えられる。

②来談する学生の多くが家庭的背景に問題を抱えており、他大学の臨床心理士を交えて検討を行った（執筆中）。

上記①の「保育者養成校は、授業や実習を通した学生への肯定的フィードバックやディスカッション、ならびに学生とのサポーティブな対話といった、重層的な支援アプローチの体制づくりが求められると考えられる。」という文脈から、学生の実態について、まずは質的な検討が必要だという前提で、検討を行ったところ、いずれの学生においても自己愛が高い傾向があった。また、セラピストや教員に対する攻撃性が見て取れ、まずは学生自身のセルフモニタリングを促しつつ、本人の意思や主張、感情を受容していくことが重要だという結論に至った。

平成 30 年度（2018 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】幼児教育学科　　【職名】　講師　　【氏名】　光武　きよみ

【研究の題目】1. 領域「健康」の指導法についての研究～園児への手洗い指導に向けて：準備から保健指導実施・事後インタビュー～
2. 学外実習における養護技術の課題について
3. 保育におけるリスクマネジメントに関する研究
4. 領域「健康」の指導法についての研究　～　保育学生によるブラッシング指導　～

【研究の概要】

1. 前研究では「学生の手洗い評価」について考察したが、その後、感染症や保健指導に対する知識を深め、今回は、教材選定から作成、保健指導の実施、その後の学生インタビューまでの経過と指導法を検討した。その結果、①視聴覚教材作成は、助言は必要であったが、参加者の発達段階を考慮して作成できた。②指導案作成は、実習で作成した経験があり、大きな修正は必要ではなかった。③保健指導実施は、学外実習等で練習時間の確保が難しく、臨機応変な対応ができなかった。④学生は実施できたという達成感が大きく、なぜ計画に沿った実施ができなかったのか等、振り返りを十分行う事ができなかった。以上のことから、今後の学生指導にあたっては、1 つ 1 つの行動に対する自己分析とチームとしての振り返りの重要性が示された。

2. 「子どもの保健演習」における乳幼児の発達段階や養護技術の理解度について、アンケート調査を実施した結果、①講義や演習の理解度は高く、9 割を超えていた。②デモンストレーションや資料の工夫は、乳児保育や養護技術の理解に効果的である。③年度で、学内演習項目の難易度に違いがある。④学外演習では、27 年度生・28 年度生共に、動きのある乳幼児のおむつ交換や着脱、調乳等に難しさを感じていた。以上のことから、授業に対する理解度は高いが、実習における乳幼児の発達段階や個別性というものを理解できていない可能性がある。今後の授業においては、発達段階や個別性を理解し、動きがある乳幼児の養護技術についての教授の工夫が必要であると考える。

3. 保育補助者等に対して「子どもの安全」という講話を行い、その後アンケート調査を実施した。その結果、リスクマネジメントの言葉や意味を知らなかった者が約 3 割いたが、今回の講話で理解できたと回答があった。また、保育補助等は様々な研修を望んでおり、学習意欲、知識の向上を目指している者が多かった。研修内容については、食育や子どもの環境問題、感染症の対応、安全に対する知識という基本的研修内容を希望していた。子どもの命を守るためには、基本的内容を押さえた上で危機管理意識の向上を目指し、継続的なリスクマネジメント教育が必要となってくる。保育所保育指針や感染症、アレルギー、事故防止や事故発生時の対応ガイドラインを基に、保育補助等用にポイントを整理した研修内容を検討していく必要があると示唆された。

4. 本年度の卒業研究ゼミ生 10 名中 4 名が、幼稚園におけるブラッシング指導を行った。4 月当初から教材研究を行い、手袋シアター、ペープサート、絵カードとはみがきソングを選択した。指導案は学外実習で経験はあるものの、全員が共有して動けるような指導案にするために追加修正を何回も実施した。指導案完成後は、保健指導実施までの期間、空き時間を利用して練習及び連携が図れるように打合せを行った。その結果、①教材は発達段階や好みを考慮して選定を行う。②学生の指導案は臨機応変に対応できるように詳細なものが必要である。③保健指導を成功させるには、練習時間の確保と実施内容の工夫が大切である。④学生は反省を次に生かしていく力が求められる。という事が明確になった。

平成 30 年度（2018 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】　幼児教育学科　　【職名】　講師　　【氏名】　山本尚史

【研究の題目】アクティブラーニングを取り入れた授業研究

【研究の概要】

教育原理、保育原理、保育者論等、担当する科目すべてにおいて、学生が自ら課題を設定し、そのテーマについて調査・研究し、発表する課題を課した。この課題の中で、仲間と協力し、幼児教育の最先端の問題、成果について学ぶことができた。また学修成果を、発表を通じて学生同士で共有し、学びを深めることができた。

具体的には、以下の２つを示したい。

まず、教育原理においては、課題のテーマとして「現代の教育・保育の課題について各自・各グループで報告する」を提示した。その課題の設定趣旨については、「教育・保育に関する話題はほぼ毎日といっていいほど新聞、テレビニュース等で報じられている。保育を学ぶみなさんも毎日報道に接して考えることも多いかと思います。各自が気になる話題を持ち寄り、保育者を目指す仲間と保育について議論し、考えてください。そしてそれを分かりやすく、みんなに報告をしてほしいと思います。」という形で学生に示し、質疑応答を受けながら、課題の明確化、共有化を進めた。その際、評価のポイントを①現代の教育・保育に関する話題に興味・関心を持つ。②話題についてグループで話し合い、理解を深める。③適切な言葉を用いて、分かりやすく説明をする工夫をする。④グループ全員が関わる形での発表形態を考え、実践する。⑤他のグループの発表から学び、教育・保育について知識を増やす。⑥発表を聞いての感想文、の６つ示した。

次に保育者論においては、「２年間学んできて考えること」という課題を設定し、１年生とのディスカッションを課した。その概要は、１年生に話をすることで、自分の保育観、目指す保育者を考えることとした。ディスカッションをする留意点として、「①後輩と何でも語り、楽しみましょう。②保育者を目指す勉強をしているという姿勢で語り、自分の考えを伝えてください。③保育者とは何なのかを常に意識して聞き取りに臨んでください。」を伝え、学修する雰囲気づくり、および学びの集団作りを、学生及び教員がともに意識した。

上記２つの具体的な取り組みには、いずれもレポート課題を課した。テーマは各課題に対応したものである。どちらの科目においても、学生は課題を仕上げ、提出率１００％、課題の到達度も高いものであった。講義最終回に学生とディスカッションする機会を設けたが、学生の学修への意欲は高いレベルを維持していたと感じている。しかし、本取り組み・研究を進める上で教員側に課題も残されている。その課題としては、１００人規模の授業での実施だったため、アクティブラーニングを進める中で、各学生の到達度を踏まえた指導や学修スタイルの提案にはいたらなった。今後の研究を進めたい。

平成 30 年度（2018 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】　栄養士コース　【職名】　講師　　【氏名】玉記雷太
【研究の題目】途上国における呼吸器感染症疫学研究
【研究の概要】
本研究において 2015 年初頭に世界保健機関（World Health Organization: WHO）によって改定された包括的小児疾患管理（Integrated Management of Childhood Illness: IMCI）の肺炎治療ガイドラインの費用効果分析を実施し開発途上国における費用対効果の高い小児肺炎政策提言につなげる。フィリピンにおける肺炎診断に関して決断分析を実施し、各診断・転帰確率に基づく費用を算出し、ガイドライン改定前後の費用効果を導く。国レベルではその費用効果分析によって医療費の低減率を、世帯レベルでは費用効果分析に加えて貧困層の Catastrophic Expenditure（生活困難となる医療支出）の回避率を提示することを目的とした。本研究において以下 2 点を明らかにし世帯レベル～国レベルの政策提言を行ってきた。
国レベル:フィリピンにおける小児肺炎にかかる医療費を各医療施設において診断別に細分化し各項目をパラメーター化し、診断に至る決断分析に基づいて診断別の確率およびそれに基づく医療費を算出する。そこから改定前後のガイドライン費用効果を算出する。
世帯レベル：世帯の改定前後のガイドライン費用効果の算出に加えて、世帯総収入のうち保健関連支出が 40%以上となる場合を Catastrophic Expenditure と定義し（Xu K et al. Lancet. 2003）、その割合をアウトカムとして新ガイドラインによるその回避率を算出する。

2014 年より実施してきたコホート・介入研究フレーム内で行う事によって、運営面のスムーズさのみならず、信頼性の高い 1 次データを新ガイドラインの費用効果分析に使える点にこの研究の強みがある。国レベルでは、同地域で実施されているコホート研究から得られる正確な肺炎発生率を使って、決断分析・費用効果分析を行うことができた。また、大幅な医療費削減はみられなかったが、その有効性が示されたため、今後国全体で本格導入となった場合、非常に大きなインパクトとなる。世帯レベルでは、特に貧困層をターゲットに Catastrophic Expenditure 回避率を算出し、世帯レベルのインパクトを提示する（現在解析中）。これらのエビデンスは保健政策のアクションにつながる機動性を含んだ提言の基礎となる。これらの成果は、Science　Impact によって出版（現在 in press）の状態であり、また、別途論文執筆中である。

東北大の非常勤講師（JGRID）に関連して、フィリピンに２回出張し、これまで蓄積したデータ解析に参画中である。すでに、２０以上の論文が出版されている。また、国内・国際学会においても４回発表している。

栄養士コースでは、次年度以降に予定していた、研究費獲得のための、パイロットスタディ（地域における孤食対策およびその介入方法の検討）が終了し、研究基盤やネットワーク（子ども食堂・フードバンク・フードドライブ）は確立した。さらに、子ども食堂のための場の確保と、栄養士のプレゼンスの向上を目指して、「特別養護老人ホームの CSR 的機能を使った地域の子ども食堂モデル」を検討し、その Feasibility および Sustainability のための枠組みを構築したが、研究者が退職となったため、継続が難しくなった。

平成 30 年度（2018 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】　ビジネス・医療秘書コース【職名】特別専任講師【氏名】江頭万里子
【研究の題目】学修成果の検証の方法について
【研究の概要】

「演習科目の学修成果の検証を教員が実技試験で行い、同時に、事前に評価のポイントを押さえた上で学生にも他者評価、自己評価を課せば、実技試験時にも学びを深め学修の質の向上に繋がる」という仮説検証を試みた。

１．実技試験について

科目：「秘書実務２」
対象：ビジネス・医療秘書コース２年生　２４人
時期：平成 30 年前期
方法：来客応対の終了後、14 回目の授業時に実技試験を行った。試験の流れは以下のとおりである。
１）上司が不在で会えない状況に来訪者があった場面が記された紙を３パターン用意する。２）直前に学生にその中の１枚を見せ、応対方法を考えさせる。３）教員が来客の役を演じ、学生は秘書として応対する。

評価のポイントは、基本姿勢については、①かかとをつけ背筋を伸ばす②手を前に組む③前傾姿勢の３項目、お辞儀については、④上体を倒したらいったん止めるの１項目、話し方については、⑤適切な声の大きさ・スピード⑥来客に視線を向けるの２項目、応対については、⑦正しい言葉遣い⑧謝罪する⑨状況を伝える⑩来客の意向を聞くの４項目で、計 10 項目である。秘書が来客応対をする際には、適切な状況判断に基づく対応に加えて感じの良さが求められる。感じの良さは、立居振る舞いと言葉遣い、話し方から評価した。

試験を実施する前に、評価のポイントをクラス全員で共通理解した。各項目について事前に教員から示されたレベルに達していれば１点、達していなければ０点とし、10 項目で 10 点満点とした。当日の出席者は 24 人であった。

２．結果

学生による他者評価の平均点は 9.2 点、教員による評価の平均点は 8.5 点であり、学生による他者評価の平均点が教員による評価の平均点より 0.7 点高かった。この結果は、t 検定を行ったところ $p=0.0007$***で有意差が認められた。また、他者評価と教員による評価は、$r=0.7111$ で、高い正の相関が見られた。学生の自己評価の平均点は、7.7 点で、教員による評価の平均点より 0.8 点低かった。この結果は $p=0.018$**で有意な差が認められたが、$r=0.2148$ でほとんど相関は見られなかった。学生の自己評価の平均点は 7.7 点で、学生による他者評価の平均点 9.2 点より 1.5 点低かった。この結果は、$p=0.000002$***で有意差が認められた。自己評価と他者評価には $r=0.4945$ で正の相関が見られた。（***$p<0.01$、**$p<0.05$）

３．考察

他者評価と教員による評価には正の相関があり、これは、授業で学んだ来客応対時の注意点について試験実施時に評価のポイントとして改めて共有（再確認）したことで、学生は求められる応対の在り方について理解を深め、その結果教員と類似した評価を行ったことを示している。筆者が担当する「マナー学」でも、立ち居振る舞いの演習で他者評価を課した際、当日の出席者全員（幼児教育学科１年生 107 名）が他者評価をすることが、自身のその後の立ち居振る舞いに役立つと思うと答えたことからも、他者評価が学修の質の向上に有効であると考えられる。

一方自己評価については、評価のポイントを押さえて自信の応対を振り返り評価するので、他者評価と同様学びの深化に繋がるものと思われるが、自己評価と教員の評価には相関は無かったことから、演習の学習成果を測る場合は、教員による客観評価が必要であり、同時に学生の成長実感の有無を知るためには自己評価が有効であると考える。

平成 30 年度（2018 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】介護福祉士コース　　【職名】特任講師　【氏名】植木明子
【研究の題目】ｱｸﾃｨﾌﾞﾗｰﾆﾝｸﾞにおける学生の能動的学修をはかる。
【研究の概要】こころとからだのしくみ・障害の理解・発達と老化の理解については苦手意識を持っている学生も多い。この教科学修にのアクティブラーニングの促進をはかり国家試験におけるこころとからだのしくみの得点率をアップをはかることを目標にした。方法は、学生が選んだテーマについてプレゼンテーション・過去の国家試験問題実施とし、内容の理解の促進を図った。結果的には全員を国家試験合格までには導けなかったが学生からは楽しく学べたとの意見はあった。

目標
①各授業での授業時間における授業外学習時間を増やす。
②学生がプレゼンテーションした内容を確実に理解させる。
③国家試験の得点率を上げる。
④効果的なプレゼンテーションを考える機会にし、発表を楽しめる。

実施方法
介護福祉士コース２年生に対して、3 科目に対して学生へプレゼンテーションをさせて問題を解くことを課し、授業へのとりくみをみる。最終的にはその中から前期テストをだし、知識の定着を図る。実施後の問題の空白に自由記述をさせ、その意見を支障ない範囲で発表学生にバックする。

結果・考察
全学生がプレゼンテーションを行った。教材に大型絵本を使ったもの、パワーポイントを使ったもの、自作のポスターを使ったものと何らかの媒体を用いて説明を行っていた。
実施後、5 択の問題を解いてもらうことを行った。問題用紙の空白に自由記載をしてもらい学生の感想を書いてもらった。実施してみてほとんどの学生が自由感想にわかりやすかった、声が大きくて聞きやすかった。声が小さかった等の感想を書いており、プレゼンテーションをした学生に感想を渡した。授業の様子は全学生取り組んでいるようで、過去問の回答率は大体よかった。

学生が意欲的に取り組んだかについては本学の授業アンケートから 5 段階評価 4.3～4.4 となっている。国家試験問題に関しては一通り授業の時間内で取り組むことはできた。授業アンケートからは目標①の「各授業での授業時間における授業外学習時間を増やす」については本学の授業案ケートの 30 分を２、１時間を３としての数値が 2.2 と低く、全体の学習時間を増やすことはできなかった。②については期末試験に類似問題を解かせて何度も反復させた。
③に関しては結果的に国家試験での不合格者を出してしまい、特にこの 2 名に関してはこころとからだのしくみの分野の得点は平均点より 16～40%低く個別の支援が不足していた。その他の学生に関してはこころとからだのしくみを含めた後半試験問題の得点も安定した得点を得ていた。④については全員が何らかのプレゼンテーションの機会となったと思われる。

能動的学修については、期間を設けず学生の自発性に任せての実施を行ったため、各学生の取り組みに差があった。早めに取りくむ学生は意欲の高い学生であるが、時期が遅くなるに従い発表の内容もうすく、準備も不十分だった。授業時間の中で取り組む内容をグループで行うとかするとまた違った反応があったかもしれない。また、過去の国家試験をそのまま解かせていたが、問題と答えを暗記するところにつながった部分もあったと思われる。問題と解説も学生に作らせることもしてもよいと思われる。

まとめ
からだのしくみに関する授業は、苦手とする学生も多い。プレゼンテーションをして、学生に教える立場になることは能動的学修のきっかけにはなったと思われる。学生が興味関心を持って授業に取り組み、自分で基本的事項のポイントをおさえた学修をする授業を計画したい。また、理解度の低い学生に関しては個別の指導を行っていくことが必要である。

平成30年度（2018年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】　介護福祉士コー図　【職名】講師　【氏名】田川　千秋
【研究の題目】　高齢者施設の職員のケアに対する悩み
【研究の概要】　認知症の人のケアについて施設・在宅ケア事例を収集し課題解決の方法を探る
長崎県内　　関東　6事業者の職員105名を対象としてアンケート調査を行なった。しかし現場の職員不足からの多忙により回答を得られたのは63件である。

性別	男　24	女　39			
年齢	10代　3人	40代　6人	平均勤務年数	8.98年	
	20代　18人	50代　0	最高勤務年数	20年	
	30代　33人	60代　3人	最低勤務年数	9ヶ月	
有する資格	**介護福祉士　24人**	**社会福祉士　3人**	**社会福祉主事　2**	**ヘルパー2級　14**	**ガイドヘルパー　1**
	介護基礎研修修了　13人		**ケアマネージャー　4人**		**看護師　2人**

１．施設でまたは在宅生活を支援するとき
主に食事・排泄・入浴・体位変換・移乗などADLと認知症の方との関わりで周辺症状（行動・心理症状）などに困っていること、相談相手・相談場所の有無などについて。
相談相手・相談場所については95%の人が有と回答する。
困っていない１・２・３・４・５困っている。5段階で評価してもらった。

１）主にADLなどの技術面への不安については
排泄「3」40%　「4」55%　入浴「3」55%　「4」30%　食事「2」40%　「3」30%
体位変換「2」40%　「3」40%　移乗・移動「1」20%　「2」20%　「3」30%　5」20%
その他「衣服の着脱」・「着席と立位」「会話」「レクリエーション」に困っていると上がっていた。

２）周辺症状など認知症症状への対応について
物盗られ「3」30%　「4」60%　介護拒否「2」30%　「3」30%　「4」30%
暴言・暴力「3」40%　「4」40%　外出・帰宅欲求「2」20%　「3」40%　「4」20%
徘徊「30」40%　「4」30%　　過食・拒食「2」30%　「3」30%　「4」40%
幻覚・妄想「2」30%　「3」40%　「4」10%　　虐待「2」20%　「3」20%　「4」30%
これまでではあまり困っていないと思われるが、経験年数2年程度の職員が困っていないと回答している項目が多く、6年以上の職員はADLでは入浴、体位変換、周辺症状では物盗られ、介護拒否で悩んでいる職員が多くあった。
３）どのような研修を希望するか
麻痺のある方の入浴介助、シャワーチェアを使った入浴、実践に使える介護技術、移乗・移動の技術、体重が重い、体格が大きい方の体位の変換、レクリエーション、会話、徘徊、帰宅願望、介護拒否、幻覚・妄想、拒食のある方への接し方などが上がった。

４）直接話すことができた職員の中には、職場内研修のあり方、どうしても時間外研修が多くなる、介助・介護の方法について「なぜ」と聞いても納得できない、回答がないなど不満も聞かれた。新人への指導に悩んでいる職員の姿もあり、そのことがストレスとなって、身体的症状が出現していることも聞かれた。
管理者からも自施設内研修では研修に望む職員に「聴く」姿勢が足りない、子育て中の職員の研修参加のあり方に苦慮しているなどが聞かれ、双方が問題を抱えていると思われる。
施設内に精神疾患を持つ利用者への対応問題、現場で家族へ説明し納得してもらうなど、コミュニケーション能力、根拠に基づいた技術の向上などは必須であろうとおもわれる。
１）では問題なしと解答しているにもかかわらず、研修希望では困っていないはずの内容が上がり、スキルアップを希望しているとも思われる。まだまだ不十分なアンケート調査である。　これからも継続し問題を明らかにし、先ず利用者にとって管理者側と職員双方にとってよりよき現場であるための問題解決の道を探す。
これは途中経過報告である。

以　上

平成 30 年度（2018 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】　幼児教育学科　【職名】助教　【氏名】昆　正子

【研究の題目】

本学造形表現系科目からみる領域「表現」の学習成果
（学生の創作「自己紹介絵本」の実践における活用事例から）

【研究の概要】

目的と方法

本学における保育者養成カリキュラムの特徴の 一つとして、「実践を重視した教育内容」があげられる。今後は、より幼稚園教諭の養成課程カリキュラムや保育士養成課程科目の見直しが進み、学生の保育内容の理解と指導法の修得が一層重視されると思われる。

本学幼児教育学科の造形表現に関する科目のうち、筆者が担当する「子どもと美術」（1 年生通 年・卒業必修科目）および「子どもの絵と制作（指導法）」（2 年生前期・保育士選択必修科目）では、学生の基礎技術と保育実践力を磨くため、「絵本」を手立てとして学生の教材制作や子どもとの造形活動を継続してきたが、それらの実践が実習でどのように活かされ、学生の保育の知識・技術の習得と向上につながったか確認し、今後の授業計画に反映させることが課題であった。

そこで今回、学生による創作絵本「自己紹介絵本」を実習で発表した学生に聞き取り調査を行った結果から、授業の成果と課題・展望について考察した。平成 26 年度・平成 29 年度本学幼児教育学科入学生のうち、独創性が高く、かつ実習先で発表することのできた 5 作品について、園での発表を再現した時の録画ビデオ分析、および実習での発表の感想についてインタビューを行い、養成校内での発表やシラバス分析からは読み取れない学生の学びの実態を考察することとした。

結果と考察

これまで子どもたちとほとんど触れ合ってこなかった学生たちが、子どもの興味・関心ごとを想像しながら制作・発表する様子からは、積極的に子どもの姿をイメージしようとする姿勢や、子ども参加型の発表形式で子どもに問いかけ発話を促す工夫がみてとれた。実際に子どもたちも、分かりやすく共感しやすい内容で、反応よく楽しんで聞いてくれていたようであった。子どもが親しみを覚える表情や佇まい、分かりやすい言葉選び、ボディーランゲージ等、子どもの表現を引き出し、共感し、楽しさを共有できる保育者の心と身体のあり方を意識できたようであった。絵本発表がその後の子どもや担任保育者とのコミュニケーションの糸口にもなり、嬉しさややりがいにもつながっていたことが分かった。また担当保育者の助言を受け、改良して作品の保育教材としての意義や効果を高めていた学生もいた。創作絵本、とくに自己紹介という設定は、学生にとって造形の技術修得に終始せず、また写実・抽象の隔てなく、楽しみながら造形表現の知識技能を獲得する機会にもなったと考えられる。また作品を通して演じ手と受け手の共感が生まれることからも、初対面の子どもの心の距離を近づける活動として、価値も十分感じとれるものだったといえる。

今後の展望

本題材には、造形の知識だけでなく見せ方・演じ方、保育理解の面でも、自身のステップアップにつながる要素が十分にあることが明らかになった。また卒業生の実践をヒントに新たな工夫を生み出し、自らを成長させる学生が現れてきたことから、創作自己紹介絵本を継続して授業で取り組んできたことの成果も見えてきた。今後は以下のことを心掛ける。

〇授業効率を考慮し、ミニ絵本版（4 つ切り画用紙の 8 等分サイズ）を今後継続する。

〇複数の領域や領域に関する専門的事項と保育内容の指導法の両方の内容を含めた複合的な視点から、保育を計画し省察する姿勢を備えた保育者養成を目指す。模擬授業後の省察シートを工夫し、10 の姿や 5 領域のねらい及び内容から子どもの育ちを確認させ、根拠をもって活動を構成する力を培う。

〇「絵本を介した保育造形指導」の実践成果についても考察を加え、一斉保育での造形指導における学生の実践力向上のための授業改善に取り組む。

平成 30 年度（2018 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】　幼児教育学科　【職名】　助教　【氏名】　蛯原　正貴

【研究の題目】　鉄棒を使った運動遊びの導入における有効なアナロゴンの検討

【研究の概要】

本研究では器械・器具を使った運動遊びの中でも苦手意識が生まれやすい，鉄棒を使った運動遊びの導入において，子ども達の自由遊びの様子から有効なアナロゴンを検討することとした.

対象者はＫ小学校１年生 28 名とし、単元計画の２時間目までは鉄棒，ジャングルジム，登り棒，雲梯，肋木でそれぞれ遊び，固定施設遊具で見られた動きからアナロゴンを抽出した. アナロゴンは自由に遊んでいる状況をデジタルカメラで撮影し，抽出した動きを下り系，上り系，回転系，支持系，振り系の５つに分類した. アナロゴン抽出時には教員から動きを誘導するような声かけは行わないよう注意した.

研究結果については、鉄棒，ジャングルジム，登り棒，雲梯，肋木における遊びを抽出し，下り系，上り系，回転系，支持系，振り系の５つに分類した. その結果，鉄棒では全部で 24 種類の動きが見られ，上り系３種類（12.5%），下り系４種類（16.7%），回転系３種類（12.5%），支持系８種類（33.3%），振り系６種類（25.0%）の動きがそれぞれ見られた.　ジャングルジムでは全部で 16 種類の動きが見られ，上り系１種類(6.3%)，下り系１種類(6.3%)，回転系２種類(13.0%)，支持系８種類(50.0%)，振り系４種類(25.0%)の動きがそれぞれ見られた.　登り棒では全部で７種類の動きが見られ，上り系５種類（71.4%），下り系１種類（14.3%），回転系１種類（14.3%）の動きがそれぞれ見られた. 雲梯では振り系の動きが１種類だけ見られた.　肋木では全部で５種類の動きが見られ，上り系１種類（20.0%），下り系１種類（20.0%），支持系２種類（40.0%），振り系１種類（20.0%）の動きがそれぞれ見られた.

ジャングルジムはあらゆる場所に足場を作ることができるため，鉄棒で跳び上がりやよじ登りができない児童にとっては，支持以降の遊びの感覚を養う有効な遊具であると考えられた. また，「こうもり」などの逆さ感覚が必要となる動きに関しても，上下左右にバーが存在することから，バーをつかみながら徐々に逆さの姿勢に移行することができる. これは，逆さの姿勢を習得するためのアナロゴンとして有効であると考えられる. これらのことから，ジャングルジムにおける遊びは，鉄棒を使った運動遊びの支持系，振り系のアナロゴンとして特に有効であることが示唆された.

登り棒においては，２本の登り棒を使った上り系の遊びが多く見られた. また，２本の棒を使って逆上がりに挑戦する児童や，逆さ姿勢を維持する児童が見られた. 登り棒は遊具の特性上，上り，下りの動きが大半を占めるが，鉄棒に上がることができない児童に対しては，よじ登りの感覚を体験させるアナロゴンとなる可能性が考えられた.

雲梯においては，遊具の特性上回転系の技ができないこともあり，懸垂移行と振り系の遊びしか見ることができなかった. 懸垂移行についても，降旗の報告にもあるように，握力が弱いためか，折り返し地点まで進めたのはごく僅かであった. これらのことから，振り系のアナロゴンとなる可能性はあるものの、鉄棒遊びにおける動作との類似性は低いと考えられた.

肋木においては，雲梯と同様に遊具の特性上，回転系の技ができないものの，壁に張り付いているわけではなかったため，基本的なぶら下がりから「こうもり」といったぶら下がり，支持系の遊びを楽しむ姿が見られた. また，反り系の遊びも見られ，予想以上に遊びの幅が広いことを確認することができた. しかしながら，遊具の設置場所によっては支持系の遊びに限定されてしまうことから，逆さ姿勢を含めたぶら下がりや支持系のアナロゴンとして活用できる可能性が考えられた.

最後に，鉄棒を使った運動遊びで見られた動きを踏まえながら，有効なアナロゴンを検討していくこととした. 鉄棒では，ジャングルジムと同様に支持系，振り系の遊びで楽しむ児童が多く，「つばめ」や「こうもり」といった姿勢が見られた. このことから，ジャングルジムにおける遊びは鉄棒に上ることのできない児童にとっても，支持，振り系の遊びに親しむ場となり得ることから，有効なアナロゴンとして活用できると考えられた. また，上りに関しては「よじ登り」「跳び上がり」「逆上がり」が見られたが，よじ登りで鉄棒の上に上がる児童が多く，登り棒での遊びがアナロゴンとなる可能性が考えられた. しかしながら，雲梯と肋木に関しては棒をつかむ感覚や支持，振り系の遊びにはアナロゴンとして活用できる可能性があるものの，限定的な活用となることが考えられた.

KAKUMEI
GAKUEN

SINCE 1896